

〔もくじ〕	11・試練の日…111
はじめに…2	12・慰留の日…123
1・調査の日…3	13・挑戦の日…135
2・奮起の日…15	14・動悸の日…147
3・観察の日…25	15・天翔の日…157
4・報告の日…35	16・逃走の日…171
5・改名の日…43	17・伝道の日…185
6・方言の日…55	18・自責の日…203
7・説明の日…65	19・欲望の日…219
8・救助の日…75	20・成長の日…235
9・同居の日…85	あとがき…260
10・触発の日…97	『ミコロボ』シリーズ一覧…261

★無断転載・無断掲載・複製・複写・転用・アップロード・フリマ出店はお断りします。

★『8・救助の日』『9・同居の日』（白井3兄妹の両親編）と、『11・試練の日』～『15・天翔の日』（華南編）は続いております。その他は単発章です。

★シリーズを通して残虐行為・性的描写（年齢制限をかける程ではないですが、匂わせがあります）があります。ご注意ください。

★この作品は、フィクションです。

☆はじめに☆

こちらは『白井未衣子とロボットの日常（ミコロボ）』の短編集となります。

本編の補完的な内容となっております。

理解を深める為に、まずは本編の《共闘》ルート（全1巻）、《反転》ルート（全2巻）を読んだ方がいいです。

基本的に各章、単発で読めますが、『8・救助の日』『9・同居の日』（白井3兄妹の両親編）と、『11・試練の日』～『15・天翔の日』（華南編）は続き物となっておりますので、ご注意ください。

段々寒くなって来ました…。寝る時は長袖が必要になりましたね。

まだ長袖と掛け布団だけで暖かいので、寒さは厳しくありませんが。

どうも今年は気温が高い傾向にありますねえ。

以上、カレーパークでした。

あとがきもありますので、最後まで楽しんで頂ければ幸いです。

次のページから、どうぞ。

短編 1

調査の日

私の家族は、私・2人の兄と祖父母が同じ家に住んでいる。

他に父がいるのだけど、父は別の場所に住んでいる。

家族と喧嘩して家出したわけではなく、仕事の都合で離れているだけ。

祖父が1日に1回程のペースで、父に連絡をとっている。

祖父が穏やかにニコニコしている日もあれば、怒鳴り散らしている日もあった。

私は...父の仕事が何をしているのかわからない。学校の課題で出された時も、祖父の昔していた仕事を書かされたんだ。

祖父は靴の製造会社で働いていた。

[ラストコア]での強制訓練を終えて、私達3兄妹は帰宅した。

武人兄ちゃんも一緒にきてくれた。

「まあちょっと寄るだけやからな。」

家のドアを開けると、怒鳴り声が聞こえた。

武人兄ちゃん以外は声の主がわかっていて。

「またおじいちゃんかよ。」

「お父さんに八つ当たりが酷いんだなあ...。」

祖父の怒鳴り声は、白井家では馴染み深い声になっていた。

むしろ怒鳴り声よりも内容が気になった。

祖父の部分しか聞いていないので、事実把握できなかったけど。

「経営方針を変えるだと...!今住んでる高齢者達はどうするのだ!」

「外国人受け入れて、既存の人々が困惑するだけだろう!」

「何年この商売をやっているんだ!ウチは長年住んでいる高齢者と労働者のみだ!」

外国人は拒否しろ!」

「ウチの建物は観光ホテルじゃない!」

祖父は受話器を強く叩きつけた。

高齢者、労働者、ホテル...? 介護のお仕事?

でも介護のお仕事だったら、無理に隠す必要ないよね?

だってお年寄りの人の世話をするんだから、役に立っているよ。

私は自分中心だとわかってるから、絶対その仕事向いてないと思うし。

ますます気になってしまった。早速私は調べようってなった。
まずは話を聞いてみようとした。でも祖父母ははぐらかした。
期待はできなかったの、他の方法で調べた。
こういう時、インターネットは便利だなあ。
言葉を入力するだけで、膨大な情報が出てくるもん。
ネットの情報を、私はメモしたり、印刷したりと収集していた。
すると、お目当ての情報を見つけたんだ。
愛嬌市北部は繁華街。
行く手前に、出稼ぎ労働者達の住处があると。
労働者達はその場しのぎで生活していて、繁華街へのお出かけが趣味と化している人が多いらしい。
住处の地図を調べてみた。 ホテル?マンション? 名称が複雑な建物が多すぎる...。
父の働き場を探すのは難しいなあ。

決まりだ。現地へ行こう。
私は[ラストコア]の帰り、勇希兄ちゃんの迎えが来るまでにこっそり《転送装置》を使った。
家の最寄駅までやってきたら、切符を買って電車に乗った。
乗車には苦労はしなかった。夜は暗かった。
目当ての駅に着いたけど、駅構内は綺麗ではなかった。
地面のゴミはわかるけど、食べ物のカスやらよくわからない液体も地面に撒かれていた。
建物などの壁際には塗料スプレーの落書きが。怒られないのかな?
マンションみたいな住处が多いと思っていたけど、実際は居酒屋やコンビニも多かった。
父や祖父ぐらいの男性達の笑い声が聞こえる。
駅から離れると、夜のせいか街中は暗い。
街灯はあまり機能していないらしい。

ホラーのアトラクションに挑戦しているかのようだった。

でもここは遊園地ではない。普通の街だ。

街なのに、恐怖が押し寄せてくる感覚が染みついてきた。

居酒屋で飲む人達はマシだった。

歩いていくと、路上でマントが何かを敷いて座っている人がいた。

もう高齢のお爺さんで、腫れているのか、顔が真っ赤だった。

少しチラッと見ただけだけど。

「嬢ちゃん!ここに何のようだい?」

と声をかけられた。

因縁をつけられたかのような、怒り気味の荒げた声だった。

本来は知らない人には無視しろと教わったけど...目的達成の為に もっと情報が
必要だ。

私は丁寧に返答した。

「父を探しているんです!マンションみたいな所で働いていて...。」

「マンション?住む所なんか、この辺りはたくさんあるよ!」

言われてみればそうだった。

事前に調べたとおり、ここは労働者達が暮らす街として有名だという情報が
あったんだ。

資料で調べるよりも複雑で大変かもしれない。

お爺さんに話すばかりでは時間の浪費になるだろう。

「すみません、ありがとうございました。」

私はお礼だけを述べて、もう少し歩き回ろうとした。

私の不注意だった。

歩いている誰かにぶつかってしまった。

「あ...。」

「おいガキ!どこほつき歩いてんだよ!」

どうやら私は、またお爺さんと出会ってしまった。

今度は先程の人と比べて、かなり気が荒れているようだ。

とりあえず、ぶつかったみたいだし、謝ろう。

「ごめんなさい!」

「ああ?お前ケンカ売ってるのか!」

え?ケンカを売る?怪我させた事を謝るだけで?

私は頭がパニックになった。

無意識に私の言動にも棘が出てしまった。

「ごめんなさいって、謝っていますよ!」

「ああ?俺に突っかかるとはいいい度胸だな!クソガキ!」

私は自分で言うのもなんだけど、大人しい真面目な性格だ。

一応、その点に関心のない学校の先生も認めてくれている。

だから、『クソガキ』と言われる程やんちゃな子供じゃないのは、自分でもわかっている。

でもこの人は、私に向かって『クソガキ』発言をした。

ただ単に不注意でぶつかっただけだよな?どうしてなの?

私は泣いてないけど、動揺はしていた。

その後に現れたおじさんがいなかったら、走って逃げたかもしれない。

「待ちな。その子供はこちらで話をするから、貴方は帰いな。」

おじさんはお爺さんの手を掴んでいた。

「あ?テメエ誰に口聞いて...!」

「帰れ、って言ってるのがわからないのか?この腕が折れるまでに去れ。」

「あ、あ、あ、あ、」

お爺さんの顔が強張った。

おじさんの掴んだ手の握力が強かったのかな。

お爺さんはうまく言葉を発せなかった。

今のうちに逃げよう、なんて思っていたら、おじさんに止められた。

「お嬢ちゃん?送り迎えするからそこで...未衣子?」

突然、名前を呼ばれた。

声の主は、助けに入ったおじさんからだった。

「え?」

「未衣子?未衣子なのか?」

「...未衣子は私ですけど。」

名前を連呼してくるので、私は正直に答えた。

するとおじさんはお爺さんの腕を振り離して、私に近づいた。

お爺さんは即座に逃げた。

「未衣子、こんな所までどうして...。」

「父を、探してまして。」

「俺のことかい?」

『俺』? 私は聞こえたんだけど...まさか。

「お父さん、なの...?」

「あはは...。数年も会っていなかったら、顔をよく覚えてないか...。」

この人、私のお父さんが言っている事はまさにそうで。

小さい頃から私達3兄妹は祖父母と一緒に暮らしていた。

母は残念ながら雲の上にいっちゃったのだけど、父はまだ活着ているのを覚えてるだけ。

私は、私達は、父とあまり顔を合せてないのだ。

だから私は、父の顔をよく知らなかったんだ。

「ひとまず、ここでウロウロしていたら危険だ。ご飯は食べたかい?」

「まだ...です。」

私はまだ警戒していた。

あの厳ついお爺さんの件もある。

この人が本当に私の父なのか、疑っていた。

「...そうか。あまり顔を知らないからな、未衣子は。でも大丈夫。比較的安全な駅前に井屋があるから、奢ってあげる。」

「いやお金は...。」

「欲しい本の為にとっておくんだ。少ない小遣いでよくここまで来れた事は褒めてあげるよ。」

「私の趣味、わかるんですか?」

「お婆ちゃんから散々聞かされているからね。丼と麺類だけど、好きなもの食べたらいいよ。」

「ありがとうございます。」

「まだ表情硬いな...。」

父はやれやれと頭をかいていた。

★★★

駅前の丼屋さん。

安価で早くメニューが出てくるお店だった。私は親子丼ときつねうどんを注文したが、家庭の味で美味しかった。

「ところでよくここまで来たね?どうやって?」

「...インターネットで。」

「ネットか...今の時代は便利だなあ。」

ハハハと笑う父。

牛丼とかけそばのセットは、まだ少し残っていた。

「お爺ちゃんは何も喋らないだろう?」

「電話の音が...。」

「妙な所で頑固だからな。お爺ちゃんは。」

父はビールの入ったコップを置いた。

「ちょっと、仕事を変えようと思ってね...。あ、転職じゃないよ?」

「何を変えるの?」

「未衣子は電車乗った時、外国の人を見かけたりしなかったかい?」

例えば、大きなキャリーバックを引っ張っていく金髪の人とか、と父が聞いてきた。

私は電車に乗った時の様子を思い出した。

そういえば。

金髪の女性2人が、キャリーバックを置いて話し合ってたなあ。

あの言語はおそらく、英語だったかな?

「未衣子が訪ねてきたから言うけど、俺の仕事はホテル業なんだ。」

「旅行に来た人を休ませる仕事?」

「本来の意味はそうだけどね…。実は俺の…いや白井家のホテルだが、お客さんのほとんどが労働者達なんだ。」

え?どういう事?

普通住むのだったら、ホテルじゃなくて、マンションとか家だよな?

私はすぐに理解ができなかった。

「普通なら未衣子の想像通りだ。だがここ愛嬌市北部の今成区は昔、市の開発事業で多くの日雇い 労働者が借り出されてね。彼らの仮住まいとして、俺達のホテルがあるんだ。」

父はかけそばの残りを食べ切った。

「時代が変わり、雇用形態も変わり、日雇い労働者が減っていった。 開発事業は大手の建設業が担うようになって、彼らの仕事が減った。 宿泊費が払えず、ホテルを出る羽目になった人達も多数だね。 そこで、国からの支援制度を利用した給付金で生活してもらうよう、切り替えたんだが。 労働者達は高齢化が進んで、具合を悪くしていなくなる人達も増えたんだ。」

父は牛丼の最後の1口を口に含んだ。

よく嚙んで飲み込んだ後に、続きを話した。

「そこでだ。実は近所の専門学校の先生から話を聞いてね。 愛嬌市全体が観光の街としても栄えようというプロジェクトを計画しているらしく、外国人の観光客を呼び込もうとしているんだ。観光ガイドのセミナーも開催されて、僕も参加したんだ。 今成区の既存のホテルを利用すれば、プロジェクトのコストも削減しやすいとね。」

「お父さんはその話、乗るの?」

「最初は半信半疑だったさ。外国人絡みだと国境を超えた手続きの問題もあるし。 でも、俺には支えなくてはならない存在がいる。 和希、勇希、未衣子、お爺ちゃんやお婆ちゃんという家族を。 吉川区の喫茶店だけではね、未衣子達を支えきれないからね。 だから家に帰れなくても、俺は未衣子達を家族だと思っているし、未衣子達を助けているつもりだ。」

…未衣子には実感が湧かないかもしれないけどね。」

実感はそうかも。

私は父や祖父母みたいに働いていないのだから、お金の感覚がわからない。

家事はほとんどできるけど、生計の立て方はあまりよく知らない。

父はおそらく、「生活するにはこれだけの費用がいる」事を知っているんだろう。

だから働いているんだ。私達を支えるために。

父の苦労だけは、段々理解してきたよ。

「それじゃ、もう家に帰ろうか。お婆ちゃんには俺が言いつけておく。だから未衣子、お父さんの仕事は覚えてていいし、遊びに来てもいい。でも、お婆ちゃんの言いつけだけは守ってあげてくれ。いじめの時以来、お婆ちゃん達は心配してくれているから。」

店を出ると、父は近所の駐車場に連れてきた。

黒色の普通の自動車。

私の家族分ならちょうど乗れるサイズだから、軽よりは大きめだった。

ここで私は、ある人物と遭遇した。

というのは、私を探していたなんて事、知らなかったただけだから。

「未衣子!」

車に乗る前に私は呼ばれたので、後ろを振り向いた。

癖毛の強い黒髪ロングの、メガネをかけた男の人…。

武人兄ちゃんだった。

武人兄ちゃんは走ってきた。

「武人兄ちゃん?」

「未衣子、和希と勇希が心配しとるんや、家に帰るで…。」

すると、車のエンジンかけた父が睨んだ。

「ウチの娘に、何か用かい?」

父は怖いお爺さんをねじ伏せた事があるから、並大抵の男の人は怯えるけど。

武人兄ちゃんは、違うんだ。

「娘、やと?」

「俺はこの子の父親です。今から送り迎えをするんですよ。」

「場所は...吉川区の神社の近くの、喫茶店の入った3階建ての住宅やな?」「!?」

父は目を大きく見開いた。

「何故ご存知で...。」

「未衣子達の通う塾の先生やねん。未衣子が意欲の高い生徒でな、難しい内容も教えてるんですわ。」

「そうなのか、未衣子。」

父は私に尋ねてきた。

私は空気を読んで、武人兄ちゃんの言った内容を認めた。

「う、うん。そうだよ。」

塾ではないんだけど...。ここで言うとなやこしくなるから黙っておいた。

「今から娘を家まで送るんですよ。なのであなたは下がって頂きますか?」

「一緒に乗せる選択肢はないんやな?せやけど、それでお婆ちゃん達納得するん?」

「俺は普通に対処できますから。」

「未衣子は1人で外出させるなと言う禁止令が出てるんやろ?あんた、自分の仕事内容隠しとったみたいやな。」

「隠してたのは親父ですよ。」

「あんたが未衣子と一緒に帰ったら、未衣子は余計外に出られへんやろ?いじめ問題でも縛りがついとんのに。」

「そうですが...。」

「最寄り駅で下ろしてくれたらええ。あとは俺が連れて帰る。」

すると父は運転席でため息をついた。

「未衣子、この人を乗せていてもいいか? 未衣子はこの人知っているみたいだけど、俺は心配なんだ。」

今度は武人兄ちゃんが後ろから言った。

「別に俺は1人で帰ってもかめへんで。親子だけで話したい事たくさんあるやろ?」

判断は、私に委ねられた。

どうしようと迷いそうだけど、せっかく来てくれた兄ちゃんの好意を無にできない。

「いいよ兄ちゃん。後ろに乗って。その代わり...。」

★★★

「親子の会話に参加せえへんかったけど、よかったんやな？」

「ごめんね。心配してくれて...。でも兄ちゃん、何でわかったの？」

「アレックスに《転送装置》のルートを探ってもらってな、それでわかったんや。」

「...すごいね、これ。」

私はブラウスの中に隠したペンダントをチラッと見た。

「あんな所で働いてんねんな、お父さんは。」

「初めて知ったんだけどね。今まで教えてくれなかったし。」

「ほんまに愛嬌市内でも、色々あんねんなあ...。噂は聞いたんだけど、外に出えへんからな。」

「兄ちゃんは10年くらいだもんね。愛嬌市の知識は、私の方が先輩か...。」

へへ、と私は笑った。

これから祖母に怒られるかもしれないのに、呑気になっちゃってるな。

多分、隣の兄ちゃんがそばにいるから、平気なんだろうな。

「...事情を抱えてんのは、俺だけちゃうんやな。」

「え？」

「いや、何でもあれへん。」

武人兄ちゃんが独り言言っていた気がしたけど、兄ちゃんが止めたので深掘りはしなかった。

「未衣子、お父さんは良かったか？」

「うん。お父さんは立派に仕事しているよ。お爺ちゃんが怒る様な悪い事はしてないわ。」

「そうやと思う...暮らせる家を提供できるのは、決して悪い事やない。」

兄ちゃんの言う通り。

暮らせる家があるのはありがたいんだ。

初めて今成区内に来た時、路上で寝ている人もたくさんいた。

今は5月初めで夏に向かって暑くなる。

夏は雨が多いから、濡れて風邪をこじらせてしまう。

あの人達も、父の所で休ませればいいのに...。

なんて考えたけど。父はホテルの名目で商売をやっている。

多分、あの人達はお金がないから、家に住めないんだろう...。

誰か、助けてやれないのだろうか...。

「今は、家の事心配した方がええで?」

武人兄ちゃんの言葉に、顔をあげた。

「あの人らはなんとかして生きていけると思う。今までずっと生きていけたんやからな。」

そうかもしれない。

私が心配していても、何も解決しない。

だったら、私が今しなければならぬ事に専念しなきゃいけない。

それは、あの人達がこれからも生きていける様に。

この地球を守る事だろう。

せっかく武人兄ちゃんという、強力な仲間がいてくれるのだから。

もっと、勉強して、強くならないと。

家には無事に着いたが、私は家族に怒られるのは避けられた。

武人兄ちゃんが自分の不注意として、深々と頭を下げたからだ。

その後、勇希兄ちゃんに詳細を教えてほしいと言われたので、

「お父さんは頑張ってるよ。」

と一言返しておいた。

短編 2

奮起の日

俺、白井勇希は幼少期から空手を習っている。

拳と蹴りで倒す格闘技に憧れて、今の今までずっと空手の修行をしてきた。

空手教室の類いだから、ガチの格闘家のレベルまでは到達できてないけど。

素質は十分にあると師範は認めてくれているんだ。

空手バカな俺だが、友達がいるんだ。名前は青木燈太（あおきとうた）。

同学年だがコイツは私立で通う中学も違う。

ただの空手教室内で同じ修行を積む人間だ。

だけど、幼少期からずっと仲良くしている。

負けん気強い俺に比べて、コイツは大人しくて気が弱い。

空手教室をずっと続けているのがすごいくらいなんだ。

中学2年になって1ヶ月が経った、5月の頃。

教室の終わりの集いで、師範から大事な話があった。

夏の大会の選抜選手の発表だった。

名前が挙がったのは3人。

その内の1人に、燈太が挙がっていた。

俺の名前は、なかった。当然だ。

俺には〔ラストコア〕の期間限定のパイロットをしているから。

用事があるのは既に、師範には伝えていた。

突然声をあげた奴がいた。

俺の友達の燈太だ。

「師範、ゆ…白井君の名前がないのですが…？」

「此奴に今回の選抜は無理だ。他の課外活動を先にこなさんといかんらしい。」

師範は俺の〔ラストコア〕のパイロットの件を《課外活動》って言ってくれる。

ジェームズさんが間に入ってくれたおかげで、師範は俺の《課外活動》を認めてくれた。

〔ラストコア〕のパイロット活動は、普通の人に教えてはいけないラインがある。

燈太以外にも師範や教室のみんな、俺の家族まで。

知っていいのは活動している俺と兄貴と未衣子だけ。

俺達白井3兄妹は特例の扱いを受けているだけ。

「ラストコア」の人達は基本的に本部から出られない。許可が必要。

その代わり海底なのに広いんだよな、本部。

「連絡は以上だ。選抜者もそうでない者も精進するように！」

「はい！」

空手教室は修行に気合いを入れるためにも、返事は腹から声を出せと言われて
いる。

俺も燈太も返事はいいが…燈太の表情は暗かった。

哀しげで、泣き出しそうな表情だった。

★★★

「勇希、未衣子ちゃんは？」

「あとで拾って帰るって伝えたからいいぜ。今日は分かれ道まで帰ろう。」

「うん！」

落ち込んでいたのが嘘かのように、燈太の返事は元気だった。

やっぱり、一緒にいてほしかったんだな。

返事とは裏腹に、暗い影が燈太から見えたからな。

空手教室から燈太との分かれ道は、歩いて10分程だ。

ちょっとお話しする程度だったら、あっという間に気分も晴れるだろう。

「ねえ勇希？」

「何だよ？」

「悔しく…ないの？」

「悔しいよ。そんなのわかりきってるだろ？」

「何でそんなに、平気なの？」

「！？」

そうか、コイツには俺が気にしてない、って感じたんだ。

誤解を解いてもらう方がいいのだろうな。

「平気じゃねえよ。試合の舞台に立ちたい、立ってやるってずっと思ったさ。《課外活動》は、どうしても最優先しないとイケないんだよ。これは地球の為。ひいてはお前の為でもあるんだ。」

「僕のため？」

「お前が、お前以外の奴らもだけど。安心して暮らせる環境を整える為に、俺は《課外活動》に参加しているんだ。」

なんか優等生らしい発言になったけど、燈太にはなんとしても理解してもらいたかったから、こんな説明になってしまった。

「すごいね。地球規模の活動をしているんだね。だったら僕、応援するよ。」
ようやく燈太が、納得してくれた。

「僕、勇希の為に頑張って試合に勝って、トロフィーを手に入れるよ！もっと強くなって、頂点を目指すんだ。」

「そんなに目標高くして大丈夫か？」

「勇希が《課外活動》に全力を尽くすなら、その分僕も挑むよ。僕も勇希の活動を応援するから、勇希も僕の試合を応援してよ。」

「当たり前だろ？友達を応援しないで、何が友達だよ。」
喋り尽くした後、俺達2人は笑い合った。

☆☆☆

7月に入り、夏の暑さが本格的に増してきた頃。

空手大会の予選が始まった。

道着姿で入場した少年、青木燈太は視線をキョロキョロ動かしていた。
矛先は観客席全体だった。

（勇希は…いないのか。）

お目当ての人物を探していた燈太は、いない事実を確認して落胆していた。
先月の愛嬌市内の警報時以来、燈太は勇希に会う機会がなかった。
師範や勇希の祖父母に尋ねても、「《課外活動》で忙しい」と返された。

事件に巻き込まれたのかな！？と疑った燈太だが、『課外活動』の4文字で違うかな？と判断した。

生存報告は確認できたものの、1ヵ月程会っていないのは、彼にとっては大問題だった。

（応援しない奴は友達じゃない、って誰が言ったんだよ。）

燈太は平常心を装いながらも、心の内では悲しんでいた。

行方不明者でもないのに1ヵ月も音沙汰がないなんて…。

と彼はこの会場に不在の友達を恨んでいたかもしれないかった。

開会式が終わり、初戦が始まった。

燈太の初陣は勝利に終わり、次の試合に進むことができた。

（なんとか…勝てただけど。）

初勝利を素直に喜べなかった燈太。

次の試合は翌日。

荷物をまとめて師範や他の仲間と共に空手教室へ戻った。

★★★

「青木、少し話がある。」

空手教室の終礼後、燈太は帰宅しようとしたが。

終礼の挨拶を述べた師範が燈太を呼び寄せた。

「はい。」

もちろん、師範の指示を燈太は拒否しなかった。

「場所を変えよう。ついて来い。」

師範が歩き出すと、燈太もその後について行った。

和室の、ちゃぶ台が置かれた居間。

師範と燈太は座布団を敷いて座っていた。

「今日を出してやる。食べていけ。」

ちゃぶ台の上には、師範の奥さんの料理が並べられていた。

燈太の家でも食べていそうな、和風の家庭料理だった。

「こんな物しか出せなくてごめんなさいね、燈太君。」

「いえ、ありがとうございます。」

忙しく働く奥さんに、燈太はお礼を述べた。

いただきますの合図と共に、2人はちゃぶ台の料理に手をつけた。

奥さんの料理は美味しかった。

燈太の食べるスピードは速くはないが、落とすような真似はしなかった。

「白井は会場にいなかったな。」

「……はい。」

師範もまた、勇希を探していた。

それに燈太は驚いていた。

「お前も白井も、幼少期から教えておる。心情も理解できるようになる。」

「そうですか…。すみません。」

燈太は大会という大事な場面で馬鹿な真似をしたと思い、謝った。

「あの場で叱責しなかった私にも責任はある。試合に集中せんと、怪我をする一大事になる危険性があるのはわかっとるだろう？」

「師範の言う通りです。」

師範は煮物の野菜を食べた後、お茶を一口飲んだ。

「私が言いたいのは別の話だ。」

「別の話？」

燈太はお茶碗を置いた。

「お前は白井が出場不可だから補欠で選ばれたと、未だに思っているのか？」

「師範…？」

師範の言葉に戸惑った燈太。

全部見透かされていて、燈太は言葉を見失った。

「…そうですね。僕は。」

「やはりな。以前から話をしようとは思っていたが、お前はもう少し自信を持って。」

そう言った師範は白ご飯を一口食べた。

十数回嚙んでから、口の中を空にした。

「私は教え子の能力を見極めておる。お前が劣る人間ならば、私はお前を選抜しておらん。」

「師範のお考えはそうですけど…。」

師範はお茶を飲み干し、ちゃぶ台下の急須でお茶を注いだ。

茶碗の白ご飯が空だと気づいた奥さんが、茶碗を持って台所に向かった。

「ここだけの話だ。白井の《課外活動》がなければ、お前と白井のコンビで選ぶ計画を立てていた。」

「え…そんな。僕は白井君以上に力はないですよ。」

「だから、自信を持ってと言っているだろう。」

同じ原因で燈太は注意された。

彼は素直に謝るだけだった。

「小学校低学年までは、お前に才能はないと思っていたが…ここまで変わるとはな。」

「どういう意味ですか？」

「お前は、白井の妹が被害に遭った事件を知っているだろう？」

「そんな…！僕は他言してませんよ！」

「お前の口は堅い。言いふらす真似をせんのはわかっておる。真剣さや集中力が変化しておった。これも毎回指導していたらわかる。」

師範の優れた洞察力に、燈太は頭が上がりなかった。

彼は正直に話す事を決意した。

「…未衣子ちゃんが巻き込まれて以来、白井君が脆くなった気がするんです。」

燈太は口に含んだおかずを飲み込んで、ゆっくり話した。

「事件直後だったと思います。白井君は1人で帰ってました。ですが家に帰らず、公園のトイレに隠れて、泣いていました。いつも明るく元気な白井君が我慢していたのがわかった瞬間でした。僕は白井君の側に、静かに近づきました。白井君は僕に気づくと、すぐに僕に抱きついて、声をあげて泣き出しました。」

燈太は師範の顔を見た。

「だから僕は決心したんです。白井君以上に強くなって、彼を守りたいと強く願った。その為に一生懸命修行して、大会に出て頂点に立つんだって…。」

「心境の変化が、お前をここまで熱くさせたのだな。白井にはその熱意を知っているのか？」

燈太の顔はちやぶ台上の料理の方へ向いた。

「いいえ。知らないと思います。」

「時が来たら、ゆっくり話すといい。幼少期からお前は、随分と成長した。これからもお前には精進してもらいたい。だから、今は大会の試合に集中しろ。白井が応援してくれていると、信じてだ。白井を大切にしたいのだろう？」

師範は燈太の肩を撫でた。

ゴツイ手でも撫でられると心地いいと、燈太は思った。

師範に励まされた燈太は、気持ちを切り替える決心をした。

（そうだ。勇希がいなかったって言いじけてはダメだ。勇希が安心できるように、僕は修行して空手を極めていかないと。大会で頂点を目指さないとダメだ。僕が、強くならないと。）

燈太はご飯を食べるスピードを早めた。

夕食後、燈太は師範と共に自宅へ帰った。

入浴を済ませて、ベッドの中に入り眠った。

翌日の大会で勝ち進む為に、十分な休息を取りたかったのだ。

★★★

大会の結果、燈太は予選ベスト4で敗退した。

全国大会まで手が、届かなかった。

（悔しい。）

敗退したが、周りの声援は暖かい声でいっぱいだった。

気の弱い燈太がここまで勝ち進んだ事を讃える者が多かった。

（これで勇希と肩を並べられるものか。）

それでも燈太は負けた事を、誰よりも悔しがった。

（会いたいよ勇希。僕は君を守りたいんだ。君が僕を守ってくれたように。今度こそ、冬の大会では全国にだってやる。）

燈太は涙を道着で拭き取った。

短編 3

観察の日

高1の春。

吉川高校に入学した俺・白井和希は、電子工作研究部に入部した。

元々ロボット製作が好きで、自分の小遣いの範囲内で簡単な電子工作をしていた俺にとって、部活が存在してくれたのは嬉しかった。

部員数は少なく、上下関係も緩い部活だった。

そんなことはどうでもよく、俺は家に気を遣わずに工作できるのが良かった。

研究部の新入生歓迎会。

俺はその時に不思議に思ったのだ。

研究部は男子の比率が高い部活で、女子を募集してもなかなか寄りつかない。

そんな中、俺を含めた新入部員の中に、女子が1人混じっていたのだ。

ホームドラマの映画に出てくるような、清楚な美少女。

研究部に入るような人間ではないだろう、と俺達は思っていた。

彼女の名前は櫻井美空（さくらいみそら）。

先輩達が電子工作の知識とかは？と聞いてきたが、知識はないですと言っていった。

文化系の部活は初心者歓迎の部活が多いから、1人増えたところで負担にはならない。

今度は何か得意な事とかある？と先輩達が聞いていた。

そこは重要なのだろうか…？と彼女以外の俺達新入生は思っていた。

すると彼女は言った。

「絵を描くのが得意です。」

先輩達はどんな絵を描くんだろうと思ったのか、今度見せてくれ、と彼女に頼んだ。

彼女は携帯電話を取り出し、画面を先輩達に見せたのだ。

瞬間、おお、すげえ、という賞賛の音が教室内で響いた。

「美術部との掛け持ちになるんですが…いいですか？」

彼女は小さめの声で言った。

先輩達はこの条件に軽い返事で同意した。

複数の部を掛け持ちしやすいのも、文化系の部活の利点だけだなあ…。

最初は正直、不安だった。

一応、俺には末衣子という妹がいるので、女子が苦手ではない。

ただ、初心者女子がやってきて…トラブルが起こらないか心配だった。

★★★

時は経って、高校生活初めての夏休みに入った。

電子工作研究部は8月上旬に、全部員のミーティングがあった。

研究部はチャット部屋が元々あって、普段はチャット部屋で意見交換をするのだが…。

点呼も取りたかったのか、この日は学校の借りている教室で集まっていた。

俺が危惧していた女子だが。彼女は普通に馴染めていた。

大人しい性格でやや消極的な彼女だが、週に2日、研究部にやってきた時は真面目に参加していた。

経験豊富な先輩達が手取り足取り教えて…簡単なキットの製作程度には慣れていった。

俺も少しだけだが、彼女の製作のアドバイスをしたりした。

夏休みのミーティング。

内容は10月中旬の文化祭に向けての計画であった。

研究部は毎年、製作物を展示しているとの事で。

各々の部員達に作品を1つでも作って欲しいとのお願いだ。

1人で厳しい場合は、誰かとの共同制作でもよく、部員以外から参加させてもいいという特別ルールもある。

俺は1人で製作ができるが…問題は彼女だ。

簡単なキットの製作程度ならできると言ったが、それでも時間がかかる。

俺は声をかけようと彼女の近くに寄ると、先輩達が彼女に話しかけていた。

先輩達は彼女の絵描きのうまさを知っていて、彼女にポスター等、文化祭を盛り上げる装飾物の製作を頼んでいた。

装飾物の製作は了承したのだが、彼女は困った顔をしていた。

「私も何か、工作したいですけど…。」と。

先輩達は彼女は特別に仕事与えてるからいいよ、と言っていた。

が、彼女の表情は晴れなかった。

そこで。俺は更に近寄ったのだ。

「作品を、彼女と共同で製作します。それでいいでしょうか？」

と発言した。

俺の過去作品を覚えている先輩達は、その手があった！と声をあげた。

俺の軽い提案は、あっさりと通った。

それ以降、俺と彼女で作品を1つ、仕上げる事にした。

まずは作業日程を決めて、完成日を9月末に設定した。

作業場は学校に指定した。学校の教室が集中できるし、材料も豊富だからだ。

作業分担は、細かい部品の取り付け等、知識のいる分は大抵俺が行って、彼女は外側のデザインを任せるようにした。

他に美術部で強制イベントがあればそちらは優先してもらって…あとは時間があれば完成を急がせるため、製作に専念するようにした。

2人の工作品の製作が始まった。

☆☆☆

文化祭当日まで、大きなトラブルはなかった。彼女の組立ミスも直せる範囲だったし、逆に彼女の絵のうまさには改めて驚いた。

俺と製作活動している時、彼女は先輩達に頼まれた仕事も同時にこなしていた。

特にポスター。未来社会の世界を描写していて、人間の代わりに電子部品が街を歩いている姿が印象的だった。

文化祭当日は、研究部が使用する教室は既に店舗仕様にチェンジされていた。

前日ギリギリまで内装作業に追われていたのが嘘かのように。

普段、運動していないメンバーだと身体が重くて、行動が遅くなりがちだからなあ…。

文化祭当日が盛り上がれば、作業の疲労は吹き飛ばしてくれるかな。
気持ちの問題だけど。

当日の来場者からの評判は上々だった。

先輩達や同級生達も、みんな心を込めて作り上げた作品ばかり。

みなさん、展示の作品を触って遊んで、楽しんでくれた。

実は俺と彼女の共同で製作した作品だが、3作品も出来上がってしまった。

彼女は初心者だが、工作に活かすいろんなアイデアを俺にくれた。

お昼休憩は交代で取るようになった。

先輩達の後押しもあってか、俺は彼女と一緒に休憩時間を設けてもらった。

学年のクラスの企画や、彼女が掛け持ちする美術部の作品展示の案内もあってか、お昼の1時間程しか被る時間帯がなかった。

2人で食堂に行った。

文化祭当日は食堂もフルオープンの状態で、日中ずっと満杯状態だった。

俺も彼女も昼食は持参しているから、売店にわざわざ買わなくてもいい。席を確保したら、スムーズにご飯にありつける事ができた。

俺は祖母と未衣子が作ってくれた弁当箱。彼女は…。

「サンドイッチと、スープ？」

余計な単語を口にしてしまった。

食べ物で判断するのは失礼だと思い出したからだ。

彼女を傷つけてしまって困惑していたが。

「今日はこれだけだけど、たまに弁当を買って食べるよ。」

彼女は俺の発言を気にしている様子はなかった。

それはホッとしたが、他の点に気づいてしまった。

これ以上は彼女の気に障るかも、と考えて口に出すのをやめた。

今度は彼女から、説明してくれた。

「実は私も両親も…料理ができなくて。」

「大丈夫、俺もできないから、祖母や妹に作ってもらってる。」

「妹さん、料理できるんですか？」

「ある程度の家庭料理はできるようになったってさ。小学生だけど外で遊び子じゃなくて、ほぼ毎日祖母の手伝いをしてるんだ。」

すごい、と彼女が褒めていた。

未衣子の事なんだけど、褒められると嬉しくなった。

お返しとは言わないが、俺は彼女に聞いてみたい内容を伺った。

「実は俺、君にずっと聞きたい事があったんだけど…。」

「いいよ。どんどん話しても。」

「いいのかい？ ゆっくり話すように心がけるから。」

「慣れているから大丈夫。」

入部当初から大人しい性格の女子の印象は持っていたが、やや消極的だなあと改めて思った。

でもうまい絵を描くし、積極性が乏しいとは見えないんだ。

せめて、ずっと抱えてた疑問点を解決しよう。

「君はどうして…研究部に入ったんだい？」

少し、言葉を詰まらせてしまった。

悪気があってではなく、聞きづらい質問だと感じたからだ。

入部動機なんて、最初に聞いておけばよかったのに…と。

すると彼女は少し照れて、入部動機を言ったのだ。

「…新たな刺激を求めたくて。インスピレーション、というのかな？ 絵を学ぶにも、教養が必要かなあ、と思って…。」

す、すごい動機だ…。

優等生が志望動機書に書くような内容を、俺は聞かされた。

「はは…。でも、君の絵はものすごく上手だけどなあ。先輩達も認めているのに…。」

彼女は食べかけのサンドイッチをビニールの上に置いた。

「私の絵は、地味って言われるんです。自然の景色が大好きで、風景画のスケッチをするんですけど。」

「もしかして…動物や植物が好きなのかい？」

「うん。動物園や植物園に行って、キャンパスに水彩画を描くの。コンテストにはいつも出場しているんだけど、賞を貰えなくて…。」

「そんなに難しいのか…。」

「親も先生も、『君には個性がない』と指摘されて…大好きな自然鑑賞以外に自分の要素を身につけようって。絵の勉強はしたいから掛け持ちだけど…。」

彼女は画家の一家なんだなあ、と俺は初めて知った。

自然鑑賞と電子工作。

ナチュラルとカスタマイズ。

両極端な2つのジャンルを、彼女はこなそうとしている。

「今、研究部は楽しめてるの？」

俺は他の質問をした。

彼女は俯きながらだが、クスッと笑って答えた。

「工作は楽しいです。とっつきにくいかなあ、と不安だったんですけど、絵描きと同じ、創造力を働かせてくれるから。」

創造力…。

そこに繋がっていくんだなあ。

素人と芸術家は発想が違うなあ、と改めて実感した。

「風景画、俺にも描けるだろうか？」

「え？描いている人いっぱいいますよ？自然のある広い公園でも、私見た事ありますし。」

「…頻繁に外出しないタイプだから、かもなあ…。」

ハハハ、と俺は笑っていた。

☆☆☆

文化祭が終わると、気温が下がって寒さが増していく。

この年の愛嬌市も冬を迎えた。

冬に咲く花は、俺の知識の中では少ないと記憶している。

なのに、俺は植物園に来てしまった。微々たる入場料を支払ってまで。

植物園内は公園の数倍は広く、1周歩くと15分以上はかかった。

疲れは意外と感じなくて、自然の空気が綺麗で気持ちよかった。

でも、目的はそれだけじゃなかった。

実はリュックの中に、ソフトケースに入れたタブレット端末を持ってきていた。祖母からもらう小遣いをコツコツ貯めて買った機械。

俺はこれとタッチペンを使用して、風景画を描いてみようと思ったんだ。

初めは絵画の教科書的な本を読んで、どうコツを掴んで描くかを学んでいた。

端末には、失敗作もどきの俺の絵が多く保存されていた。

一応俺は、部屋の中の小物や家具、植物園以外の公園や施設などを端末でスケッチしていった。練習の名残が、端末内の画像データへと反映されていた。

植物も今回が初めてではなく、家の植木鉢や公園の花壇もスケッチしていた。

タッチペンの先が擦れやすくて、一度買い替えた事もある。

画面のキズを抑える薄いフィルムも購入した。

いよいよ、植物園でのスケッチデビューとなった本日。

練習の時と同じで、端末内のアプリで白紙のページを出して、そこにタッチペンで描き始める。レイヤー機能を駆使して、下書きの線画から色塗りまで端末だけで終わらせる。

綺麗に咲かれた冬の花畑があった。

背景の青空と一緒に、俺は全体図を描いた。

☆☆☆

和希が植物園でスケッチを行った翌日は登校日だった。

電子工作研究部で和希は美空に声をかけた。

見せたい物があると誘われ、美空は和希の側に寄った。

ソフトケースからタブレット端末を取り出した和希は、指で画面を操作していった。

画面に表示されたのは、1枚の画像データ。

植物園での風景を描いた水彩画だった。

どう？と和希は美空に感想を伺っていた。

ところが、美空はあまり喜ばなかった。

むしろーん、と唸りながら困惑していた。

和希も彼女の表情が曇りがちなのは読めたので、ちょっと端末を少し下げた。

すると美空は、端末を逆に自分に寄せて、画像の水彩画を凝視した。

彼女は和希作の水彩画の問題点をいくつか挙げていた。

もう少しデッサン力を高めようとか、配色に気を遣ってとか…。

彼女の弁はヒートアップしていった。

今度は、美空が困惑する立場になった。

問題点のあら探しに熱が入り、彼を置いてけぼりにしてしまった。

ごめんなさい、と彼女は謝った。

だが和希は怒る事なく、むしろフッと笑っていた。

意外な一面が見れて嬉しいと伝えて。

美空もまた、彼の笑いに釣られて、同じように笑い合った。

彼女は和希に端末を両手で返した。

また絵を描いて、見せて欲しいと言った。

デッサン力と配色の見極めを怠らないでね、と忠告を添えて。

彼は端末を受け取って、わかったよと答えた。

この日以来、和希が美空に絵の添削を受けてもらった日はなかった。

2年になって和希は、『課外活動（「ラストコア」のパイロット任務）』に追われていた。

研究部に中々、顔を出せる状況ではなかった。

もちろん、美空に絵を見せる事も叶わなかった。

さらに和希は学校自体にも顔を出せなくなってしまった。
同時に美空にも転機が訪れた。

★★★

絵画の修行の為、海外留学が決まっていた。

2年の夏休みには日本を旅立つ予定だった。

「…長続きって、難しいよね。」

空港の待合室で、美空はキャリーバックを寄せたまま座っていた。

アナウンスが鳴った。

フランス行きの飛行機がもうすぐ離陸すると発表した。

美空は立ち上がり、バックを引きながら飛行機の搭乗口へ歩いていった。

「君の絵の完成、待っているからね。」

短編 4

報告の日

降伏。

この2文字はある者達にとっては、絶望を意味する言葉。

平穏な生活の終止符を打つに相応しい言葉でもあった。

藍色の髪と瞳を持つ種族達には、自分達の身体に強い刺激を受けた感覚だった。

原始地球のように、宇宙の脅威に対する防衛線を張れないわけではないのに。

ある子供は、これから生活の地盤となる町の変わり果てた姿に、言葉が出なかった。

涙は枯れていて、虚な目をしていた。

ぼう然と、ゆっくり歩いているだけだった。

道端に、宿っていた生命が所々に落ちている。

建造物は破損、もしくは粉々になっていた。

空模様は荒れ果てた大地に同調するかのように、暗い青に染まっていた。

少年は街の入り口の門に立った。街の外を確認するために。

街の外は元々まっさらな大地だった。

草花は所々に生えているが、木は生息していない。

建造物もちろん、存在していない。

だから、彼は大地の向こう側まで見渡せたのだ。

同時に発見したのだ。

黒くて大きな人型ロボットを。

★★★

「リユート、大丈夫？」

「あ、ああ…すまない。気にするな。」

土星圏ニコン・王家フレアランスの王子でありリユートには、[ラストコア]内の専用の個室が設けられていた。

個室内は特別に、特定回線のみ外部への通信が可能なコンピュータが備わっていた。

地球の海底に潜伏させている〔フレアランス5〕へ、果てにはニコンに住む王様への通信を快適に行う為である。

警戒の為、個室に隠しカメラを搭載し、リュート達の行動をチェックできるように施されているが。

「じゃあ、王に通信繋げてもらうわね。」

「ああ、頼む。」

サレンは個室内の通信機器を操作した。

取り付けたヘッドホンを片手に持ち、もう片方は電波調整のノブを回した。

ノイズの音が2、3回流れた後、通信機器のモニター画面に誰かが映った。

〔フレアランス5〕に在中の、リュートの側近兵である。

『お待ちしておりました王子。』

「父上に繋いでもらえるか？」

『かしこまりました。』

側近兵は画面越しのリュートの前から離れ、後ろの機器を操作していた。

キーボードのようにカタカタと音を鳴らして。

画面は一旦閉じられた。

すぐにスイッチが入り、今度は冠をつけた初老の男がまっすぐ前を向いていた。

『来たな。リュートよ。』

初老の男が言った。

リュートはイスから立ち上がり、左膝を床につけて姿勢を低くした。

ついでに頭を下げていた。

操作したサレンも隣で同じ姿勢をとっていた。

「お久しぶりです、父上。」

『我とお前達の仲だ。かしこまる必要はない。席につけ。』

「わかりました。」

リュートはゆっくりとイスに座った。

サレンは立って、座るリュートのイスを掴んだ。

『定例の報告だ。賢者達は無事だ。自ら奇策を取った賢者達はフリをして、わざと醜態を晒しただけだ。賊団に兵達が下手に落とされないようにだ。』

「無事は確認できたのですが…やはり…」

「賢者様らしいですが、身を案じてしまいます。」

サレンはイスを握ってない片手を胸に当てた。

『民は穏やかに暮らしておる。賊団の対処に戸惑った通関人が謝罪の念に駆られてはおるが…。巧妙な手口が多数存在すれば、全てを見抜くのは不可能であろう。』

「その通りです…。」

初老の男…フレアランス王は目を伏せた。

『リュートよ。此度の報告はお前にあるのだろう。』

「ですが…。」

『案ずるな。これからの未来を生きるお前達の報告が大事だ。』

「…はい。」

リュートは王の助言に従い、報告を始めた。

「父上、私は大きな悩みを抱えております。」

『兵から存じておる。仇敵との戦闘に迷いがあるのだろう。』

「…流石は父上。」

『お前を“引き取って”15年は経ったろう。息子の様子をずっと観察してきておる。』

何も知らない者が聞いたらエッ、と驚く内容を王は話した。

サレンは既に知っているので表情は変わらなかった。

『己の道を行くがよい。その為にお前を送り出したのだ。敵討ちでも共闘でもよい。己の悔いのない道を進め。』

王はリュートの不安を掻き消す為に、今の発言をした。

だがリュートは未だ、曇りがちな表情をしていた。

「後悔はしたくはありません…。ですが、奴は悪人であったのかどうか…。第1の故郷・ラドムを滅ぼした男という事実があってもです。」

モニター越しに王は、顎髭を指で摘むように触った。

少し困惑気味の表情をしていた。

『償うのは我である。リュートよ、お前に負荷をかけてしまった。』

「え…、何をおっしゃっているのですか父上。私は感謝しております！」

『だが、お前を戦乱の場に放り込んだ事実は、お詫びせねばならん。我の話を、聞いてはくれんか？』

「…是非、お聞かせください。」

リュートの子承を得て、王は目の前の息子に隠していた事実を告げた。

『お前の生まれの星、ラドムの者の生き残りは存在する。』

「…それは…！」

『真実だ。我が星の調査団も、生き残りと遭遇した過去が記録されておるのが…。10年程であれば、健在の者もおろう。』

王から告げられた事実に、リュートは大きく目を見開いたまま、動けなかった。サレンも驚いていて、彼女は口に手を当てていた。

『[ラストコア]の任が終了すれば、旅行を検討してみるのはどうだ？同朋を探す旅は悪くないぞ。継承問題はなんとでもなる。我もまだまだ現役でいられる。』

王の発言の後、個室内に沈黙が流れた。

口を開いたのはリュートだった。

「わかりました。納得のいくまで、任の後、私は同朋探しの旅へ参ります。父上、御身に異常があれば…。」

『わかっておる。我が言えずとも、家臣に伝達するよう努める。』

王がそう言った直後、家臣の1人が小声で伝言をしていた。

家臣が去ると、王は正面を向いた。

『これにて終幕としよう。必ず、[ラストコア]の任は果たせ。彼らはお前達を引き入れてくれたのだ。御恩を忘れるでないぞ。』

「わかりました。報告の場を設けていただき、ありがとうございます。」

リュートとサレンは同時にモニター越しの王に頭を下げた。

王からの配慮が入った2人は、畏まるようなお辞儀はしなかった。

回線はここで途切れた。

モニター画面の電源も切れて、2人の顔が薄く映った。

着席時は背筋を伸ばしていたリュートはホッとして、イスに背中を預けた。

「汗、びっしょりね。」

サレンはポケットからタオルを取り出し、リュートの顔に流れる汗を拭き取った。

「私は迷い子のような存在なのだ…。王には、鞭を打たれるのかと怯えてしまった。」

「大丈夫よ。貴方なりに上手くやれてるわ。」

物事が見えてくると、思考も複雑化していくものよ。」

汗を拭う間、リュートはふう、と呼吸をしていた。

口は一旦閉じた彼は、すぐに話を切り出した。

「サレン。頼みたい事があるのだが…。」

彼の言葉の最後は、途切れていた。

彼に躊躇いの念があったからだ。

だが名前を呼ばれた彼女は、察しがよかった。

「貴方と同じ星の人の生き残りを探す旅に出るのね？」

「そ、そうだが…。」

「何言ってるの？私は貴方に助けてもらった身よ。私は貴方についていくわ。」

王の許しも出ているんだし、終わったら旅立ちの準備をしましょう！」

「ああ、ありがとう。」

リュートはお礼を述べると、サレンの手を握った。

夏による体温の上昇なのか、彼女が心優しいのか…彼女の手は暖かかった。

手の温もりを感じた後、サレンは立ち上がった。

「睡眠のセッティングしておくね？」

「いや…大丈夫だ。サレン、もう戻ってゆっくり休んでくれ。」

「動けるの？」

「私の気遣いだ。少しすれば、立ち上がれる。すまないサレン。」

「…わかったわ。隣の個室にいるから、何かあったら呼び出して。」

サレンは個室の自動ドアまで行き、開錠した。

「リュート、おやすみ。」

「ああ、おやすみ。」

サレンは通路に出ると、ドアを閉めた。

「同朋が…生きている。」

天井の真ん中の照明だけが照らす、薄暗い部屋。

見上げたリュートは1人、呟いていた。

「奴は…ラルクは…本当に罪人なのか…？」

どうして私を、我々の息の根を止めなかったのだ…。」

彼は問いかけた。

しかし、1人だけの部屋では、彼の問いに答える人はいない。

やがて疲労が彼を眠りに誘って。

リュートの目蓋がゆっくりと下された。

短編 5

改名の日

黒という色は、本当に悲しい時に似合う色だと、ラルクは思った。
最愛の人、エトラトルを失った彼は逃げた。本来ならば、彼はエトラトルの故郷である金星圏フェルホーンの人達と、宇宙へ上がる予定だった。
ところが、彼はフェルホーンの宇宙船に乗らず、コソコソ逃げていた。
王女を失った責任を問われるのが嫌で。
自らの手でエトラトルを潰した訳じゃない。
彼女は彼女の意志で、ラルクを救う事を誓った。
彼女のHRだった事、HRの能力が『命を代償とした救済』という事を、ラルクが知らなかっただけだ。
だが彼女の故郷の者達は、ラルクを恨むだろう。
王女を喪失した責任は重い一点張りで、自分を処刑するのだろう。
彼女から星を守る使命を託されたというのに…。
日本のとある田園地域の天候は、雨だった。削られたような跡にも見える砂の道以外は、田んぼで広がっていた。
日本には米という食物の収穫がある事を、火星圏タレス出身のラルクは知らない。だが鮮やかな緑色の稲を見て、元気に育つといいな、と勝手に願っていた。
都会と比べて、田園地域は必要以上の照明がなかった。
雨が降ると風邪をひくから、外出を控えるのだろう。
昼間なのに、都会よりも暗く感じられた。
雨の日の外出は、傘や専用コート等の濡れを防ぐ道具が必要だった。雨も知らないラルクに、そんな持ち合わせはなかった。
だから、彼の身体はびしょ濡れだった。
びしょ濡れで服が肌にべったりとつきやすくなり、何より髪の毛から雨の雫が頬に伝わった。
ラルクは田んぼと田んぼの間の砂道から、1歩も動かずにいた。

歩行者どころか、車1台も見かけない静かな田園地域。
農家の人間が乗りそうにない軽自動車だけが、田園地域の道路に停まった。

軽自動車の助手席から、30代くらいの男性が降りた。

傘をさして、黒いコートを濡らさないように歩いた。

ひとりぼっちのラルクの元へ。

ラルクは寄ってきても、男性に目配せをするだけだった。

特段、驚きもしなかった。

「こんな所で待っていても、雨はすぐに止まないぞ。」

男性が言った。

ラルクの頭上に、雨の雫が溜まるのを止めた。

傘が代わりに、ラルクに落とす雫を受け止めたからだ。

話しかけてきたのはわかってても、ラルクは口を開かなかった。

「替えの傘は持っている。お前が使え。」

男性はラルクの右手を取って、自身が持っていた傘を渡した。

コードから折り畳み傘を出して、ラルクの隣で差した。

雨はまだ、衰える事がない。

傘に落ちた雫が流れ落ちてゆく。

男性も最初は気を遣っていたのか、あまりラルクと会話を交わさなかった。

しかし、ずっと沈黙が終わるのを待っていたら、体力にも限界がくる。

男性は何か、ラルクの心を動かす話題を持ち出そうとした。

「…彼女、残念だったな。」

するとラルクは、男性の方へ顔を向けた。

ショックを受けているような表情をしていた。

男性はラルクに見られている事を気に留めず、話を続けた。

「交流会の襲撃事件は広がりを見せた。当日開園日の〔天海山ユートピア〕

も、損壊の影響で移転が決定した。」

「…どこまで知っている。」

「少し調査しただけだ。深くは知らん。…だが、ちょっと探りを入れるだけでお前の情報量は膨大な、ラルク・トゥエラー。」

フルネームを呼ばれたラルクは、俊敏な動きで男性から距離を置いた。

男性が只者じゃない、と頭で感じ取っていた。

ラルクは身構えたが、男性はこれぐらいの事で驚かず、平静を保っていた。

「そう固くなるな。俺は金星人じゃない。だからお前を刑に処する動機もない。」

「お前はほとんどの知識を得ている…。」

「さっき言った。お前の情報は膨大すぎたって。鍵を掛けたくない理由もわかる。」

ラルクの警戒心はまだ解かれていない。

男性に対し、鋭い目つきで睨み続けた。

彼の左手がうずうずしている。

「何が目的だ地球人。捕獲して処刑台まで運ぶつもりがないなら、孤独な俺を権力者の下でこき使わせるのか？」

「まあ…少しは合っているかもな。」

男性の答えで、ラルクの左手の指が止まった。

男性の反応に戸惑ったからだ。

もし男性がラルクの問いに否定していたら、間違いなく彼は左手から銃を出して、男性を撃っていた。

ところが、男性の返答は肯定の可能性も僅かに示しているような言い方だった。

ラルクは撃つ前に、男性に探りを入れた。

「何を企んでいる？」

「企みか…悪く言うと、お前を戦力に加えたい、って所だな。」

戦力、のキーワードにラルクは反応した。

彼はびちゃびちゃの田んぼに身体を戻して、男性に言った。

銃を構えようとした左手を、ポケットに突っ込んだ。

「…帰ってくれ。俺は期待に応えられない。」

「時間を取らせる気はない。用が済んだら、ここを離れるさ。だが…。」

傘を差してから田んぼの方向に向けられた男性の足のつま先が、ラルクが立っている方向へと変えた。

「お前はそれで、気が済むのか？」

男性の目線は、武人の横顔に当てられた。

男性の視線はまっすぐで、ラルクの黒髪から逸さなかった。

ラルクは男性に突きつけられているのはわかっている。

だが、彼には力強い眼差しの男性に、合わせる顔が無いと思っていた。

何より、『戦う』気力を失せていた。

心が折れるどころか、妥協すらしないラルクに対し、男性はもう一押しの気持ちで彼に言った。

「エトラトル・フェルホーン。」

「っ!？」

ラルクの身体が少し揺らいだ。

無意識に吐息も漏れてしまった。

「彼女は元々、金星圏フェルホーンの民ではない。同じ金星圏のメイスのロボと地球の女性との間に産まれたHRらしいな。」

男性は『エトラトル』の名前を口にした後、彼女の詳細を語った。

ラルクはもう、雨水が溜まる田んぼを眺めるのをやめていた。

彼は焦燥しきった表情で、男性を凝視した。

この男は、全てを知り尽くしているかもしれない。

ラルクは警戒心を高めた。

左手から拳銃が出現した。

ラルクは即座に銃口を男性に向けた。

向けただけで、発砲まではいかなかった。

いや、発砲できなかった。

拳銃を持つ左手が震えた。

標的とされた男性が、逃げずにただ立っているだけ。

どう考えても今の状況ではラルクが有利で、男性の息の根を止めるのは容易いのに。

「どうした？撃たないのか？」

男性が聞いてきた。ラルクはかなり困惑していた。

「お前の言う通り、撃つのは容易い。容易いはずなのに、手が震えて、動悸も激しくて…。彼女は言った。自分の第2の故郷の地球を、守ってくれと。でも、どうしたら、いいんだ…。」

ううっ、と言葉にならない声を漏らして、ラルクは泣き崩れた。

「彼女の想いが、お前の引き金をセーブしたんだな。」

男性はラルクの前に近寄って、しゃがんだ。

「もし、地球の防衛の仕事があったとすれば…お前は引き入れるか？」

ラルクの泣き声がなくなった。

俯いたまま、彼は男性に聞いた。

「そんな都合良く、あるのか？」

「まあ、ついてこればわかるさ。どうする？判断するのはお前だ。彼女の意志を汲み取りたいのならば、俺達の話聞いてくれないか？」

男性が懇願すると、ラルクは腕で涙を拭き取り、ゆっくりと顔を上げた。

「聞かせてくれないか、お前の話。」

「わかった。場所を移そう。俺の名前は西条宗太郎。日本正規軍の中佐だ。」

☆☆☆

宗太郎はラルクに、とある場所に連れて行った。

ラルクは宗太郎の名乗りから判断して、日本正規軍の関連の施設へ向かうのかと想像していた。

実際は違った。

地球の地理的知識を殆どエトラトルからしか得ていないラルクでも、『日本』じゃない国へ連れて行かれたのは理解できた。

宗太郎が連れて行ったのは、アメリカだった。

アメリカ東部の海、大西洋の海底に巨大な軍事施設があった。

数キロ離れていてもはっきりとわかる施設だと言うのに、名称はまだ無い。

海底まで降り、出入り口らしき扉を開けて、施設の中へ入った。

無名のみならず、施設の外側のライトも十分に照らされていなかった。

さらに、潜水艦の出入り口には、多数のヘルメットと作業着の人間が動き回っていた。

忙しく動く作業員達に軽く会釈して、宗太郎はラルクの案内をした。

膨大な数のコンピュータ技術が搭載された大広間。

コンピュータは壁とほぼ一体化しており、軍服姿の人間がパネルの電子音を鳴らしていた。

壁一面のモニターには、アルファベット文字の羅列された文章がズラリと表記されていた。

情報の交錯する大広間のど真ん中に立つ、50代半ばの軍服姿の男性がいた。

大広間の自動ドアに敬礼する宗太郎と、戸惑った様子のラルクが現れた。

2人の姿に男性は微笑んだ。

「苦労をかけてすまないな、西条中佐。」

「とんでもありません、中將。」

敬礼の挨拶の後、宗太郎は中將と慕われた男性の紹介に移った。

「紹介しよう。こちらディム・カミング米軍中將だ。」

「アメリカ…？アンタ、日本正規軍じゃないのか？」

「話は…長くなるが。」

「よいではないか西条。我々の経緯は信頼度が向上してからでも、遅くはない。」

「中將のご判断でしたら…。」

宗太郎は話の主導権をディムに譲って、引き下がった。

「…さて、ラルク・トゥエラー君？かな？」

ディムは念の為に、ラルク本人かを確認めた。

自分の名前は間違われていない事を知り、ラルクは口を出さなかった。

黙認していると見たディムは、話を進めた。

「感傷に浸っている最中、君を訪ねに来て申し訳なかった。だが、どうしても君に頼みがあったのだ。…率直に言おう。今後設立する組織の主要人になって頂けないか？」

ディムは頼み事を申し出たが、ラルクに驚きの表情はなかった。

彼自身、何者かに利用される可能性はあると疑っていたからだ。

無反応な対応を見せられたディムは、自らで話を進行しようと考えた。

「何かを企んでいるかもしれない、と疑りをかけているようだ。相当君は、手馴れた兵士だな。」

「それは、違う。」

ラルクがディムに向けた、第一声だった。

「俺は、手馴れた兵士じゃない。星を壊滅させる程の能力を持ち合わせながら、最愛の人1人も救えなかった…。」

「ラルク、」

「彼女に救われなかったら、俺は『クーラン』に負けていた。こうして、地球に足をつけていられなかった…。」

ディムが俯くラルクの肩に手を置いた。

「全部過ぎた事だ。いつか君が地球を滅ぼす凶悪人になったとしても、私は君を恨まない。どうしても、今は君の力が欲しいんだ。愛嬌市の襲撃事件で、我々は力不足を痛感した。技術向上と育成強化を掲げ、改革を進めようとしたのだが…界限では皆弱気の姿勢しか見せなくてな…。」

「…。」

「そこで、君が地球上に居続けているという目撃情報を入手したのだ。即座に我々は搜索を開始して、君を探し出せた。先述の通り、君には新組織【ラストコア】の主力になって頂きたい。名目上の最高責任者は、西条中佐にならざるを得ないが。」

ディムは自分の手を下ろした。

ディムの頼み事自体、ラルクは十分理解していた。

しかし気持ちの部分では、不安に満ちていた。

目の前の軍人を筆頭に、一部の地球人は自分に期待を寄せている。

襲撃事件、エトラトルの件が、彼を引きずらせている要因で、克服したいと望んでいて…。

ラルクは誤魔化すように否定的な内容を述べた。

「ヒューマニティー・ロボティクス、通称HRは《同調性》という共通の特性がある。群れを逸れた俺は、自らの意志で行動を起こせない。」

「無理に動く必要はない。何か気づいた点があれば、アドバイスでもくれたらいいさ。」

「俺はHRが、11の星を潰していると周りから言われ、恐れている。王女の星でさえ、最初は潰す計画だった。」

「私は気にしない。過去の過ちだろう。これから塗り替えればいい。」

ラルクが否定的な発言をしても、ディムは励ましの言葉ばかり出す。

青年の彼は、頭脳では中將に劣ると悟った。

だからラルクは、急押しのような発言をした。

「どんな事があっても、俺を責めないのか？」

「そうだ。形式上、罪を犯せば裁きを下さざるを得ないが…私も一連托生の意志を持って共に償おう。」

これでラルクは、真剣な眼差しの軍人に敵わないと思い、降参した。

ラルクは突然、態度を変えた。

「わか…りました。自分は、貴方の配下に加わります。」

「私は一介の後見人だ。その口調だと、[ラストコア]に所属する決意表明だと受け取っていいかな？」

「構いません。命令があれば、従います。」

「君はゆくゆく命令する立場になるんだぞ？…そうだ、名前を変えよう。」

名前？とラルクは疑問に思った。

「君の名前はクーランからつけてもらったものだろう。彼の運命から断ち切る為にも、改名はそれらの第1歩になるのではないか？」

ディムの言葉に、ラルクは突然目覚めたかのような衝撃を受けた。

「[ラストコア] はしばらく、日本の海底に本拠地を置く。西条、日本人の名前を彼につけてやったらどうだ？」

「…良いのでしょうか。一軍人の私が名付け親で。」

「不安だったら、彼と一緒に考えたらいい。」

心配そうな表情をした宗太郎は、ラルクをチラッと横目で見た。

「日本と言えば、戦う者達を『武士』だとか、『侍』だとか呼ばれているそうだな。」

ディムが言った。

「『武士』？『侍』？」

「現在でも、ニュース等で例えられますが…。」

「物語の『武士』を拝見した時の話だが、洗練された逞しい男の姿だと感動したよ。まるで…襲撃事件の君のように。」

「俺が…『武士』？」

ラルクは両目を大きく開いた。

彼は今まで戦場に出て、賞賛された経験がなかった。

クーランから『優秀な従僕』という対象でしか、褒められた事はなかった。

「いくら巨大ロボに変身できたとしても、君は彼相手に背を向けなかった。」

「俺は1度、彼から逃れてます。」

「再び立ち上がったではないか。なかなかの度胸の持ち主だぞ。君は。」

ディムはラルクの肩を、ポンポンと叩いた。

「『武士』の『武』を使って…。想像力が乏しくて申し訳ないが、『武人（ぶじん）』と書いて…『武人（たけひと）』はどうだ。」

宗太郎が小さなメモ帳に書き込んだ漢字とひらがなを、ラルクに見せた。

「これが、『武士』という日本語の文字…。」

ラルクはなるほどと、興味を持った。

気に入った文字を、自分の名前にしようと決心した。

「俺、この名前にしたいです。」

「もう少し候補を増やしてもいいんだぞ？『武』が含まれた人名はいくらでも…。」

「もういいだろう西条。どうやら彼も、少し喜びを表すようになってきている。」

ディムはラルクの口角が上がっている事に気づき、宗太郎に言った。

「よし、今日から君は『武人（たけひと）』に改名する。[ラストコア]を、地球を…頼むぞ、武人君。」

「はい。」

ラルク、改め武人はディムの期待に応えるよう、返事した。

ハリのある大声ではなかったが、自信無さげな低い声でもなかった。

元気を出してくれた、それだけでもディムにとっては良かった。

最終的に、『ラルク・トゥエラー』は『黒川武人』へと改名した。

苗字の部分である『黒川』の決定に、ある程度の時間を要した。

考えるのが面倒くさくなったのか、武人が「ありきたりの苗字でいい」と言い出して…。

彼のイメージである『黒』を用いた『黒川』を苗字に採用した。

エトラトル、宗太郎、ディム。

この3人に会わなければ、武人は前へ進めなかっただろう。

どこかの戦場で、散っていたかもしれない。

（協力…そうだな、支え合いながら守っていけばいいんだ。エトラトル、俺はお前の願い、必ず果たすよ。）

短編 6

方言の日

「ところでさ、武人兄ちゃん。」

「何や？」

〔ラストコア〕臨時支部の、束の間の休息の時。

食堂で武人兄ちゃんにご飯を食べている頃だった。

勇希兄ちゃんが武人兄ちゃんに、何かを聞こうとしていた。

勇希兄ちゃんが聞いてきた質問は…今まで気づかなかったのが不思議に思える程の内容だった。

「何でそんな、変な方言使ってたんだよ？」

勇希兄ちゃんがストレートに言うので、私と和希兄ちゃんはため息をついてしまった。

「オブラートって言葉、知らないの？勇希兄ちゃん。」

「別にデリケートな話じゃねえだろ！？え？違うのか！？」

ああ、これは勘違いされるね…。

私は武人兄ちゃんが不快にならないか、心配になった。

今は臨時支部に移り、クーラン側の〔宇宙犯罪者〕の数も減って…決戦の日も刻々と近づいていってる時期。

ストレスを与えるような発言をしたら、相手が疲労するのに…。

私は武人兄ちゃんが怒らないか、不安になった。

でも、実際は違った。

兄ちゃんはデリカシーの無さそうな勇希兄ちゃんの質問に、笑顔で答えた。

「使ってみたいなあ、って軽く思っただけや。」

「え？なんでだよ？」

だから勇希兄ちゃん、あんまり武人兄ちゃんの心の内を抉るのは…。

と深刻になったけど、武人兄ちゃんが気にしている素ぶりがないから、大丈夫なのかな？

「んー。話が長くなりそうやけどな…。」

「どのくらい長いの？」

私も人の事言えないな。

便乗して、武人兄ちゃんの方言の理由を聞き出そうとしていた。

私の質問でも、兄ちゃんは快く答えてくれた。

「そうやな…。こっちに来てすぐ？なんかな？」

「[ラストコア]に来て、10年くらいなの？」

「何で曖昧なんだよ？」

「いちいち覚えてへんからなあ。些細な事は。」

そりゃそうでしょ？

いくら強い武人兄ちゃんでも、忘れてる事はたくさんあるよ。

だけど兄ちゃんの話には、続きがあった。

「いつかはわかれへんけど、エピソードやったら覚えとるな。」

「え！？マジかよ！」

武人兄ちゃん、記憶に自信がないなら無理に話さなくても…。

勇希兄ちゃんも、期待をかけ過ぎだよ。

でも私はこれ以上、制止の声をあげなかった。

私自身も、あまり自分から語らない兄ちゃんの昔話を知りたかったから。

だから、黙って兄ちゃんが話を始めるのを、待っていた。

急かすような行動はやってない。

けど、兄ちゃんはすぐに昔話を開始させた。

「あれは…そうやな。[ラストコア]が創設されてすぐやったわ。」

☆☆☆

[ラストコア]が創設されて間もない頃だった。

俺はディム・カミング米軍中將の推薦で、特別隊員としてのポストに就いた。

[ラストコア]の運営云々は、創設直前までかなりの打ち合わせが行われた。

アレックスは未加入前で、俺と宗太郎と米軍大尉だったジェームズを交えての打ち合わせだった。

スローガンなどの基本的な組織のあり方については、大まかに決定されていた。

初期のスタッフの大半は元軍人が公務員で、組織内の行動の取り方を熟知している人間がたくさんいた。

大規模な襲撃事件はクーランが起こした以降は目立った形跡がなかったのもあって、組織としては順調に進んでいった。

問題は…微細な部分で起きていた。

アレックスが技術局長としての地位を確保するまで、[ラストコア]の使用兵器はもっぱら、地球産の兵器のみだった。

兵器の利用に長けている軍人達が必要だった。

ディム中將の推薦で選ばれた兵士達が、[ラストコア]内初の訓練に参加していた。事務局長に就任したてのジェームズが兵達を引率する。

この頃、俺は兵達との連携プレイの練習として参加した。

訓練に参加していて、また日常生活でも、つくづく難しい問題に直面する。

[ラストコア]の戦闘体制に関する改善点とかもあるが…俺個人でも抱えていた問題があった。

俗に言う、コミュニケーションの取り方である。

元タムクーランの手で躰けられた過去があり、俺の性格は無口・無表情で物静かな人物像だった。

エトラトルと出会い、俺は言葉を発するようになったから、心配は無用だと思っていたが。

訓練時に自分が前に立つと、兵士達に怯えられる。

襲撃事件での失態が、ここまで尾を引いているとは…。

俺的には訓練だから、真剣に取り組ませるように冷徹になってるだけ。怖がらせる意図は、特別抱いていない。

厳しく取り締まるつもりでいたが、ジェームズや宗太郎から、

「もう少し穏やかな雰囲気を醸し出してくれ。」

と頼まれてしまった。

穏やかな雰囲気。

緊張感マシマシの状況下で、そんな和んだ空気をつくった経験のない俺は、悩んだ。

当の頼まれた本人達は他の業務で多忙だったし、誰か気軽に話せる地球人もいなかった。

特別隊長として大層？な地位についていた俺だったが、一応休暇はもらえた。

特にやっておきたい事がなかった俺は、[ラストコア]内をブラブラ歩いていた。

たまたま閲覧室の前を通りかかった。

設立時の説明で、閲覧室の大まかな紹介は聞いていた。

紹介された内容を、ざっくりと振り返った。

閲覧室は、資料室と似た仕組みだった。

例えるなら、図書館って言った方がしっくり来る。

エトラトル曰く、図書館は知の宝庫だと教えてくれた。

俺は閲覧室なら、兵士達とうまくコミュニケーションをはかる方法が見つかるんじゃないか、と想像していた。

早速俺は、閲覧室の中にお邪魔した。

人っ気のない受付を通り過ぎると、近くに数台のPCが。

PCの奥には多数の本棚が設置されていた。

本の探し方の知らない俺は、受付のボタンで女性スタッフを呼び出した。

彼女は快く駆けつけてくれた。

俺は女性スタッフに、「会話が上達する本はないか？」と尋ねた。

彼女は最初は困惑していたが、すぐに該当する本棚へ案内してくれた。

言語に関する内容が記載された本が、ずらりと並んでいた。

一応俺は、エトラトルのおかげで地球の公用語らしい英語を学んだ事がある。

背表紙のタイトルの意味を把握できる本も、幾つかあった。

女性スタッフは何冊か取り出して、俺に内容をざっくりと見せてきた。

結構な分量だった。

束の間の休息で学びきれぬのか不安になる程に。

それだけ、生物同士のコンタクトに自信のない奴らが多いのか…。

ずらりと並ぶ本へ視点を移すと、俺は1冊の本を発見した。

俺は自然と、その本を取り出していた。

その本も英語表記だったが、『愛嬌弁のいろは』とか書かれていた。

『いろは』の意味はわからないが、小さな英文で『理解が深まる』的な文章が表紙にあったから、教科書みたいな本だろうと認識していた。

「あ、この本はジャンルが…。」

違いますよ、と女性スタッフが言おうとしていた。

だが俺は、この本に釘付けになった。

『愛嬌弁』という言葉を知らない俺は、意味を女性スタッフに聞いてみた。

「『愛嬌弁』とは何だ？」

「私も知っている限りでしか説明できませんが…。『愛嬌弁』とは〔ラストコア〕から地上へ上がった都市・愛嬌市で使われた方言です。」

「方言？」

「同じ国でも、地域によっては違う言葉で同じ意味を表す単語や熟語が存在するんですよ。英語でも、アメリカ英語とイギリス英語では異なる箇所も多いですよ？感覚的には…そう捉えて頂いた方が理解が早いかと。」

要するに、新しい言語の習得か…。

「この本を読みたい。借りていいか？」

「え！？ですがこちら、日本語を元にした方言ですよ？」

「じゃあその日本語に関する本も頼めないか？」

「でしたら…。」

女性スタッフの計らいで、俺は『愛嬌弁』の本と日本語習得の本の2冊を借りた。

さっさと自室に戻って、ベッドの上で読書に励んだ。

★★★

『愛嬌弁』という特殊な日本語を学んで1カ月が経過した。

この日の予定に、兵士達との合同訓練があった。

訓練自体は週に一回の休みを除き、ほぼ毎日行われているが、俺の参加は週に2回程だった。

他の仕事…例えば聴聞や検査や見回りなどがあるから、休みの日数は兵士達と同じになる。

だが運の良い事に、読書は空いた時間でもできた。

仕事の合間、俺は個室でじっくり本を読んだ。

借りた本には期間があるから、途中で別の本を借りてそちらも読んだ。

内容は同じ『愛嬌弁』と日本語に関する本だった。

勉強と仕事で時間を費やして、1カ月が経った。

兵士達との合同訓練は、俺が指揮を執る演習も組み込まれている。

だから訓練前と後の挨拶で、俺は彼らの前に立って目標や反省点を掲げる役目を担っている。

今回も、俺が前に立って挨拶する場面があった。

俺が兵士達と一番接触しやすいのは、合同訓練時の挨拶だ。

これを逃すと、俺は彼らに『近寄りがたい』存在として映ってしまう。

なんとしても、俺はこの意識を払拭させたい。

俺と彼らの違いは、HRか地球人ぐらいだ。

HR自体が脅威的な能力の持ち主だから、極端な相違として見られがちだが。

コホン、と俺は咳を1度だけした。

ついに、俺の勉強の成果を示す時がきた。

「…皆さん、どうも～、黒川武人やで～！」

満面の笑顔で手を振りながら、名前を名乗った。

俺の名前を兵士達はすでに知っているが、心機一転もかねて自己紹介のつもりで言った。キラキラと輝いた俺を見て、兵士達は笑ってくれる。

そう信じていたが。

兵士達は誰1人、笑わなかった。

口を大きく開けて、固まっていた。

ポーカフェイスな奴らは1人もいなかったの、みんな反応はしてくれたようだ。

だけど、なんだか虚しさを感じてきた。

これはもう一押し必要かと思い、別の話題を振った。

「いやぁ今日はいい天気やで～！いや海底で天気わからへんやで～！ホンマやで～！」

「ちょ、ちょっと待て！」

横からジェームズが割り込んできた。

いよいよ気づいてくれたのか？と期待を寄せたのだが。

「お前！大事な訓練時に何遊んでいるんだ！」

彼は怒っていた。俺はジェームズの怒りが理解できなかった。

場の空気を和ませる為にやった事なんだが…。

「俺は彼らと話をする機会が少ない…んや。だからこうしてリラックスを…。」

「休憩時に何度も会うだろうが！」

「会っても会釈される程度だ…ねん。」

「無理矢理語尾をつけなくていい！」

俺とジェームズが口論になってる所を、兵士達は呆れた様子で見ている。

「少しでも雰囲気やを上げるように言ったの、お前もだろ…やん？」

「雰囲気の話だ！言葉を習得までは言っていない！」

「うーん、『愛嬌弁』は難しい…ねん…。」

1ヵ月しか『愛嬌弁』の勉強をしていない俺に、それらしい詛りを喋ることは困難だった。

結局、態度が変わっている以外はマトモだったから、俺は今回の訓練に参加した。

一部の兵士がぎこちない戦車の動きを見せていたから、注意をした。

『愛嬌弁』を忘れていた。

流石に訓練は真剣にやらねばという意識はあったし、全体的に無事に済ませた。

だけど、俺は『愛嬌弁』を諦めなかった。

最初に読んだ『愛嬌弁のいろは』には、こんな記述があった。

『愛嬌弁とは、昔の愛嬌市民が馴染んでいた方言であり、今は存在を失われつつある。しかし、お笑い芸人や喜劇の役者など、《笑い》に長けた芸事を披露する者には親しまれている方言でもある。愛嬌弁は、人々に喜びをもたらす言葉としての存在意義がある。』

俺はその記述内容を忘れなかった。

だから必死に、言葉を勉強した。

☆☆☆

「てなわけでな。俺は『愛嬌弁』を習得したんや。まあ苦戦はしたけど、愛嬌市の歴史も知れたし、面白かったで？」

武人兄ちゃんの語りが終わった。

終始聞いていた私達兄妹は、啞然としていた。

あれ？と不思議に思った兄ちゃんが尋ねてきた。

「ん？どないしたんや？君ら。」

「えっと…。」

私は返答に困った。

和希兄ちゃんもうん、と唸っていた。

なんかおかしいなあ、と私達は感じ取っていたから。

兄ちゃんを傷つけないようにどう返そうか悩んでいたら、勇希兄ちゃんがズバツと包み隠さず言ってしまった。

「兄ちゃんは、バカなのかよ？」

…これには待って、と言わんばかりの制止が必要だった。

「勇希兄ちゃん！どストレートに言うのは止めようよ！」

「いや有り得ねえだろ！コミュ力鍛えるのに入り方からして違うだろ！」

「武人兄ちゃんが苦労して努力しているのに、もっと言葉に気をつけてよ！」

「お前は兄ちゃんに対して盲目になりすぎだろ！」

私と勇希兄ちゃんの口論がヒートしていきそうになると、私達の長兄はすぐ止めに入った。

「2人とも落ち着け。勇希、さっきの発言は俺からみても行き過ぎだぞ？」

「う…。軽く見過ぎてた。ごめん、武人兄ちゃん。」

勇希兄ちゃんは頭を下げた。

「気にしてへんよ。まあ、あん時の俺はどうかしとったんや。女性スタッフの話を聞かんと勝手に興味を持ってもうた。」

「そんな事ないよ！兄ちゃんが他のスタッフさんと仲良くなろうと頑張ったんだから、きっと伝わってるよ！」

「訓練の後、女性スタッフが庇ってくれたんやけどな…。一番悪いのはこの俺や。」

気にせんといてな。

武人兄ちゃんは隣に寄った私の頭を撫でた。

兄ちゃんの手は男の人の手だから、ゴツイのだけど。

柔らかな感触があるなぁと思っていた。

今は順調に「宇宙犯罪者」と呼ばれたHR達を倒していけるけど、近い将来、武人兄ちゃんまで消えていなくなるかもしれない。

頭から感じる手の感触も、2度と味わえなくなるかもしれない。

僅かな休息を取る今、この感触を覚えておこうと、私は決めた。

短編 7

説明の日

愛嬌市吉川区内に襲撃があった当日。

私達は運命的な出会いを果たした。

人間の姿から巨大ロボットに変身する武人兄ちゃんに。

颯爽と現れて私達を助けたその姿を見て、私はカッコいいと思った。

同時に、

『この人が夢の中に出てきてくれてよかった。』

と嬉しくなった。

1体のロボ（後に【ホルプレス】と教わった。）をオート操縦で倒してから、

私達兄妹はすぐに【ラストコア】に連れてこられた。

愛嬌湾の海底に【ラストコア】本部の基地が潜んでいた。

正確な場所は教わってない。

輸送機の窓はほとんど黒塗り状態だったし。

武人兄ちゃん、あと輸送機に乗っていたスタッフさん数人が私達をある場所へ連れていった。

【ラストコア】本部の、統制制御室。

名称をそのように紹介していた。

まあ…戦艦のブリッジを3倍以上広くしたような部屋だった。

出迎えてくれたのは、2人のおじさんだった。

しかも、とっても偉い人。

【ラストコア】の総司令官の西条宗太郎さんと、事務局長のジェームズさんだ。

宗太郎“さん”と付けたけど、普段私達は西条司令と呼ぶ事にしている。

西条司令は強面の男性だなあ、と私達は若干怯えてしまったけど、不機嫌そうには見えなかった。

これは司令の素の表情なんだろう。

隣にいたジェームズさんはハア、とため息を吐きそうな残念な顔をしていた。

私達が来た事が嬉しくなかったのかなあ？

「よく生きてこれたな、君達。【バステューユ】のコックピットに乗った勇気だけでも褒めてあげよう。」

強面の男性の西条司令だけど、私達に最初に話しかけた時はにこやかになっていた。

機転の早い大人かなあ、と私は想像していた。

「いや…俺達はただ乗っていただけですが…。」

「心配しないでええよ。大人でも怖がって乗らん奴はいくらでもおるんやから。」

和希兄ちゃんが褒める程でも…と気を遣っていた。

武人兄ちゃんが後ろからフォローを入れたけど。

「雑談などは後で設けよう。先に重大事項を片付けたいのでな。」

西条司令が言った。

輸送機に乗った時に言われたけど、重要な説明を受けるために統制制御室に來たんだ。

最高司令官の話をちゃんと聞かないと。

武人兄ちゃんも困り果てたジェームズさんも、西条司令の意図に沿った。

なので、西条司令と私達兄妹から少し離れて見守った。

「早速だが、これから説明する事は事実だ。

怖い内容も含まれているが、我慢して聞いてくれ。」

司令に忠告された私達だけど、特に何も考えていなかったのも、返事だけした。

「ならば、まずはこちらの画像のスライドをご覧くださいどうか。」

私達の前に立っていた司令が横にずれた。

統制制御室内の明るさが弱まって、暗い雰囲気を出した。

部屋の暗さとは正反対に、奥の壁一面に広がるモニターが明るくなった。

司令の言う通り、引き伸ばされた画像が一定の時間でスライドされていく。

画像の中身は、普通の写真だった。

状況が過酷だと思わせた以外は。

「君達が愛嬌市在中だったら、学校で履修済みかもしれないが。今から10年前、オープンしたての〔天海山ユートピア〕に大規模災害を思わせる事故が発生した。」

たくさんの画像をスライドさせながら、司令が説明を始めた。

〔天海山ユートピア〕とは、愛嬌市最大のレジャー施設の1つで、遊園地のような所だった。

写真のあちこちに、遊具が破損された姿も確認できた。

「学校で習った通りだと、この惨劇を《事故》として取り扱っているだろう。実際は違う。これは《事件》なのだ。なぜならば…。」

司令は1つの画像を展開した。

それは太平洋上に行んでいた、空飛ぶ船（宇宙船の事を初めはそう思ってた）とロボの大軍の写真だった。

「これは…？」

「宇宙から突如やってきた大群だ。彼らは愛嬌湾周辺を攻撃してきた。〔天海山ユートピア〕は戦闘に巻き込まれた形で被害を受けた。」

愛嬌湾は太平洋、もしくは日本海と比べたら狭い海みたいな存在。

すぐに突破されるのは容易いだろう。

被害は〔天海山ユートピア〕だけではなくて。

他の愛嬌湾周辺の地域にも及んでいた。

言葉に出来ないほど、凄まじい光景であった。

「愛嬌湾周辺以外にも被害は拡大したが…全て公開するとキリがないのでここまでにしよう。」

そうだね。

太平洋上に止まっていた敵なら他県への襲撃もあったよね。

そう考えている時に、司令は巨大モニターの画像を消した。

室内の照明は一定の明るさを取り戻した。

「〔ラストコア〕はこの襲撃《事件》をきっかけに、10年前に設立されたんだ。私とジェームズと黒川は、その初期メンバーだ。」

設立して10年なのに巨大な基地が海底に潜んでいるの！？

私と勇希兄ちゃんは驚いた。

知的な和希兄ちゃんが質問を始めた。

「写真を見せてもらって過酷な状況を読み取れましたが…実際のデータ等はどうなっていたんですか？」

「ああ、その統計情報がこれだ。」

照明は暗くなかったが、司令はモニターにある情報を映し出した。

棒グラフのデータだった。

細かい文字もたくさん記載されていたけど、どういうグラフなのかはすぐにわかった。

左上のタイトルと、棒グラフ下の事件や事故や災害の名称で。

〔天海山ユートピア〕での襲撃事件だけ赤の棒グラフで示されていて…他の出来事は青で統一されていた。

学校やニュース等で一度は目にした事のある悲しい出来事ばかりが連なっている。

〔天海山ユートピア〕の襲撃事件は左から2番目の位置に属していて、2番目に長いグラフになっていた。

左上のタイトルは『負傷者の数』。

多ければ多い程、人命が失われやすい悲惨な出来事と判断できる。

「見ての通りだが…昨今の日本での天災よりも3倍近くの被害者が出ている。グラフの目分量で見ると、ざっと20万だ。」

「20万!？」

「これは負傷者のみだ。行方不明者も含めれば…25万は行くだらう。」

勇希兄ちゃんが吠えた以外、私達は言葉を発せなかった。

人数の規模に衝撃を受けて。

「当時の防衛事情はどうなっていたんですか？」

「あー、それはだな…」

「愛嬌市の会議場でな、他星人との交流会が開いってたんや。そこを敵さんが狙ったんや。」

「いいのか!？」

和希兄ちゃんの質問に対して言葉を濁らせたジェームズさん。

武人兄ちゃんが普通に回答したから、慌ててしまった。

「この子らはしばらく【パスティユ】のパイロットとしての役目を果たさせるつもりやし、少々の開示はかめへんよ。」

「まだ許可を出していないぞ!」

「他に探し出せるんか? お前も相当苦闘しとるやろ。」

「だからと言って、子供を候補に入れるな!」

武人兄ちゃんが指摘すると、ジェームズさんが怒り出した。

2人の上司的立場の司令が間に入った。

「落ち着け。ジェームズの言い分もわからんでもないが…急用だ。3ヶ月だ。任命期間は3ヶ月。それ以降は考えよう。」

司令が私達の方を向いた。

「君達も3ヶ月、辛抱してもらえらるだろう。右も左もわからないまま来てもらって申し訳ない。答えられる範囲ならば、質問に答えよう。」

司令の発言の後、和希兄ちゃんが肩の高さまで右手をあげた。

和希兄ちゃんは謎について探りたい人間であり、疑問を解決したがっていた。

「他星人と出てきましたが、本当に存在するんですか?」

この質問は改めて聞くと、そういえばと思い起こさせた。

「そうだな。君達には他星人の存在を認知していないようだしな。」

「襲撃事件も事故として教えてもらってるんやし、俺らで知ってる範囲で答えようか?」

武人兄ちゃんが乗り気だった。

兄ちゃんは人間の姿からロボに変身したけど、何かあるのかなあ?

早速、説明が開始された。再び照明が暗くなった。

モニター画面を使用した内容になるんだ、と私達は期待した。

「まずは君達を公園で襲ったロボ達。彼らは【ホルプレス】と俗に呼ばれる者達だ。もちろん、地球人ではない。」

「俗に？」

「寄せ集めの集団やかからな、【ホルプレス】は。」

寄せ集め？

「【ホルプレス】の中身は他星人の集まりやかからな。HRやったらあとは改造で強力にできるし。」

「改造…するの？」

「つーかHRって何だよ？」

武人兄ちゃんが【ホルプレス】の詳細を語った後、私が首を傾げて、勇希兄ちゃんが根本的な質問をした。

「HRとは…《ヒューマニティー・ロボティクス》の略称だ。人間のような生物とロボのような機械を交互にチェンジできる能力を持つ生命体だ。」

「ちなみに俺もHRや。」

「お前、それを言うのか…？」

「先に理解深めた方がええやろ？」

ジェームズさんが武人兄ちゃんの一言についつい驚いていた。

私達元一般人が触れてはいけない話題だったのかなぁ…。

でも武人兄ちゃんの秘密がしれて嬉しかった。

なんか特別な気分を味わったかのようで。

コホン、と西条司令が咳き込んだ。まだ説明は終わっていない。

司令以外の大人2人も、我に返った。

「君達に問題だ。こちらの他星人だが、ルーツは我々の住処である地球上の生物からやってきている。どこに根拠があると思うかな？」

根拠？原因の事かなぁ…。

「成仏した魂…とか？」

「兄貴が宗教的な答えだしてる…。」

「ごめん。俺、宇宙に関する知識は習う範囲しか知らなくて…。」

「和希兄ちゃんが物知りなのは電子工作の分野でしょ？」

「別に非難してねえよ！」

まあ、和希兄ちゃんだったら科学的な根拠を言い出すと想像してたけど。

司令がフッフ、と微笑んだ。

私達の回答が面白かったんだろう。

「興味深い答えでいいぞ。転生したととらえると…まあ似てくはないかもしれないが、真実かどうかわからないからなあ…。はっきりと言おう。《臭い》だ。」

司令が答えを言った時、私達は目が点になった。

一斉に『は？』と失礼な反応をしてしまった。

「…まあ、これは仮説レベルなんだけどな。」

「わかってる事はそこそこ伝えた方がええやろ？現時点でも未知の領域らしいからこの答えしか言われへんけど。」

ジェームズさんはため息をつきながら、困惑気味の私達をフォローしていた。

あまり意味は無いんだけど、彼なりの気遣いだなあと思う事にした。

対して武人兄ちゃんは教えたがりだったかも。

司令の立場が上だから、譲っているんだろうな。

「要するに、絶命した後の腐敗臭だな。気体の分子は飛び回る。それは空が、宇宙が存在する上へと登っていく。分子のごく僅かが、小惑星等の宇宙の星に流れ付くと、現在は説明されている。」

司令がスラスラと解説している。

本当かなぁ？と疑う頭もあったけど、今はそうなんだ…と納得する事にした。

「それは…凄いですね…。やはり《魂》が登っていった…」

「兄貴…まだ引きずるのかよ？」

「はっきりとした実証はまだないからな…信憑性に乏しいだろう。理解が追いつかないのは仕方ないさ。」

まあ気にするな、と司令は軽く笑った。

ここで…司令のスーツのポケットから、電子音が鳴った。

年配のおじさんである司令なら、携帯電話の1台は持っている。

誰かが掛けてきたんだろう。

司令はすまないと軽く謝り、携帯電話のボタンを押した。

電話をかけてきた相手と、連絡を繋げた。

電話はすぐに切れた。

司令の話し声は聞こえたのだ、通話はうまくやれたようだ。

「時間だ。本当は紹介する内容が山程あるが、スケジュールが詰まってるからな…。3ヶ月だ。頑張ってくれば、君達3人分の報酬はつける。もちろん高額のだ。」

「マジかよ！」

「目の色を変えるな。親御さんの口座に振り込む。」

勇希兄ちゃんはすぐに落胆した。それは仕方ないでしょ？

「パイロットとして乗ってもらう為の、健康チェックを行う。外に案内するスタッフを控えているから、着いていくように。」

「はい。」

「はい！」

「わかりました。」

じゃあ外に出よう、と司令に言われた私達は、統制制御室を後にした。

案内役のスタッフを見つけ、健康チェックをする部屋へ連れて行かれた。

☆☆☆

未衣子達が去った後。

ジェームズが携帯での通話を始めたので、宗太郎は武人に話しかけた。

「いいのか？黒川。」

「何がや？」

「あれだけ子供達に教えると言ったが…お前が防戦の位置に立っていたのは…。」

「いずれわかるやろ、って言われんでも理解しとるけどな。」

「何故隠した？」

「…恨むやろうな。守った俺やけど、火種を撒いたのも俺やから。」

それ以上、宗太郎は何も聞かなかった。

武人は未衣子達の様子を覗くと言って、統制制御室を後にした。

短編 8

救助の日

白井大希（しらいたいぎ）は高校卒業後、イライラする頻度が高くなった。

最大の理由は、自身の進路への妨害である。

中学卒業後、大学進学を視野に入れて進学校に合格を決めて、通学していた。

毎日の勉強は大変だったが、大学の事を考えると苦にはならなかった。

猛勉強して、見事志望校である愛嬌市内の公立大学の合格を勝ち取った。

ところが。

数日後、大希は帰宅すると嬉々に満ちていた表情が一変してしまった。

大希の父親である白井造希（しらいぞうぎ）が息子の入学を断ったのだ。しかも、電話1本で。

すぐに撤回の連絡を入れようと大希は電話機へ向かうも、父親に行手を阻まれた。

「何でだ親父！」

大希は父親に向かって怒鳴りつけた。

怒鳴られた側も同じように、怒鳴り返した。

「お前は凡人だ！大学なんぞ行っても役に立たん！」

「凡人だからこそ大学出て就職するんだよ！」

「戯け事を。働きに出るなら丁度いい頃合いだろうが！」

大希は父親に負けじと言い返した。

だがそれも、父親に反撃された。

ここで、大希は自分の母親に目が行った。

「お袋もなんか言ってくれ！このままフリーターにでもなれて言いたいのか！？」

大希は自分の母親に助けを求めた。

それも、母親・白井布美子（しらいふみこ）の口で裏切られた。

「お父さんの言う事を聞きなさい、大希。貴方は跡継ぎなの。家業を営んでもらうわ。」

「それくらいなら大学出てからでも遅くはないだろう！」

「貴方に出す学費はないわ大希。それでどうやって勉強する気なの？」

「特待生で学費免除の支援もあるんだぞ！」

大希はカッとキレてしまう程、両親に反抗していた。

終いには親子との関係をより陰悪させた発言も出てしまった。

「もういい！俺は出ていく！働きながら大学に通う！それでいいだろう！」

「いや、ダメだ。お前には家業を営んでもらう。」

「家業って喫茶店か？靴職人か？それで将来安泰と…！？」

大希の反論が一時的に止まった。

造希が1枚の紙を、大希の目の前に見せたからだ。

今まで勉強してきた大希なら、数秒で紙の内容を理解できた。

四角のフォームが整然と並んだ契約書の類いである。

「不動産の、売買契約書…！？」

「ちゃんと収益の出る宿泊所だ。今成区の労働者達が集う町だったら、自然と泊まりに来るさ。」

「騙されているぞ2人共！知り合いの業者さんに言いくるめられたんじゃないだろうな！俺が直に行って話をしてくる！」

大希は家を出て、両親の知り合いの不動産業の業者の元へ向かおうとした。

心当たりがある息子の彼は、業者の住所もある程度覚えていた。

なんとか、契約を解除してもらわないといけない。

そう願う大希だが、心変わりのしない父親がまた行方を阻んだ。

「怒鳴り込みにいくつもりだろうが、それでどうする？」

「そんなの決まってる、契約を解除してもらうんだよ！」

「無理だな。奴は俺を大層気に入っておる。『親孝行しろ』と言いくるめられてお終いだ。」

「やってみないと…。」

「愚かだなお前は。何の為に勉強してきたのか…。」

大希に鬱憤が溜まっていく。

が、それを発散できなかった。

追い打ちは母・布美子からの発言だった。

「お父さんは靴の製造をやめて、気楽に商売ができる方向性を組んでいるのよ。宿泊業なら、知識だけ詰め込んだあなたならできると思ってね。旅行関係とは違う宿泊業だから、あなたならできるわよ。」

最後に慰めの言葉を使われたが、大希にとってはちっとも嬉しくなかった。

だから彼は、悪態をついた。

「クソっ！！！」

★★★

両親に最悪な家業を押し付けられてから、大希に笑顔はなかった。

今成区内の宿泊所は、5階建のマンションみたいな建物だった。

その1階の、出入り口すぐに管理室があてがわれた。

6畳程の和室で、簡易的な洗い場とクローゼット以外は何もなかった。

基準法に基づいた窓と、受付用の小さな窓はあった。

小さな窓の前のデスクは、父親の知り合いの不動産業者からの貰い物だ。

これを知った大希は、デスク下の大きな引き出しを、足で強く蹴った。

相当、怒り心頭だったのだ。

実際に宿泊所の稼業を始めてみたが、『まともな』人は来なかった。

労働者達が多いのは両親から聞いていたので、ある程度の客層は予測していた。

その反面、収益は散々だった。

『まとも』じゃないので、お客様側の労働者達の支払いは滞っていた。

滞納ぐらいならば、まだかわいらしいレベルだった。

労働者達はおじさんだらけだが。

賃料を支払わず、言い訳で誤魔化して逃げる輩もいた。

これには腹を立てたので、大希はすぐに警察に通報した。

流石に労働者達も観念して、賃料の支払いに応じた。

受け取った賃料は丸々収益にならない。

宿泊所の維持にはお金がかかる。

水道光熱費や税金から、建物の借入金の返済まで。
賃料滞納と集客率の悪さで、支出が追いつかなかった。
大希はスキマ時間や夜勤にアルバイトの予定を組む事に決めた。
支出に間に合うようにする為と、自分の懐に多少余裕を持たせる為だった。
最低週1日は休めるようにスケジュールを組んだ。
宿泊所は土日を定休日に設定していたのは数少ない幸いだっただろう。
日曜日だけ、完全に休むよう心がけた。
うまく調整して平穩に、穩便に生活していた。
それでも…大希のストレスは溜まるばかりで。
発散するのに外食で美味しい物を食べた。
値段的に一千円程度の定食だが、それぐらいしか彼には楽しみがなかった。
あとは居住地代わりの管理室でテレビを見て寝るだけ。
労働と暇つぶしだけが、大希の今のサイクルであった。
ところが、ある土曜日の夜だけは違った…。
正確には、日曜日の朝の帰りだ。

★★★

大希は夜勤の仕事の時、バイクを使って通勤していた。
夜の10時から翌朝の5時までの、休憩を挟んだ6時間半のアルバイト。時間は短めだが時給は高めで、週に4日程入っていた。
大希は他のバイトに週3日入っている。
日曜日は休むとはいえ、完全な休みは朝方から昼間くらい。
夜はまたバイトに出なくてはならなかった。
彼に丸1日の休みはなかった。
だが、休みを増やすと収入が落ちて、宿泊所の経費を捻出できなくなるのも事実で。根をあげる暇もなかった。
定時上がりでバイクに乗って帰っていた大希。

大通りをなるべく避けて通勤しているので、走行はスムーズに走れた。大通り以外の道路を走っていると、公園の側を通る事もしばしばあった。

それが、1人の女性と出会うきっかけをつくったのだった。

信号待ちしていた時、大希は安全確認の為に、周りをチェックしていた。

朝の6時前の道路は、まだまだ寂れた様子だった。

大希の隣には車やトラックが1、2台走っているのがほとんど。

そんな中で、彼は歩道側の公園に目が行った。

ブランコや滑り台、後は木が数本周りに生えていた、ごく普通の公園だ。

ベンチで伏せて座り込んでいる女性を見つけなかったら、大希は通り過ぎていた。

彼は女性がしんどさでうずくまっているのでは？と疑った。

信号が青に変わった時には、彼は動いていた。

公園の出入り口の隅にバイクを止めて、女性まで走って行った。

「大丈夫ですか！？」

声をかけるのもワンセットだった。

起き上がるのを期待して、女性の肩を掴んで、全身を揺らした。

すると、女性の弱すぎる声が微かに聞こえた。

どうやら生きている。

もう一息だと思った彼は、話しかけるのを続けた。

「顔をあげられますか？」

大希がそう言うと、女性はゆっくりと目元まで表に出した。

女性が外を見た時、視界がぼやけていたので、両目をパチパチして視界をクリアにさせた。

生い茂った緑と、若い男性の顔。

起きた彼女が初めて見た光景だった。

だが思考までは正常な状態ではない。

意識も朦朧としている感じが見られた。

服は着ているが布を巻いただけと思われる簡素な格好をしていて、露わになっている手足には多数の痣があった。

これは、病院へ行かないと。

大希はすぐに携帯で救急車を呼び、女性に付き添った。

★★★

検査の結果、女性は栄養失調と脱水症状だったと分かった。

もう少し遅ければ大事に至った可能性があった事も報告された。

安堵した大希。

彼女の身体は治療で回復するだろう。

問題は、回復後についてだった。

面会を許された大希は、何とか時間を作って女性が入院する病院へ行った。

大希が部屋を訪れた時、女性はベッドの上で上半身だけ起こしていた。

「仮眠は、いいのですか？」

大希は女性に尋ねた。

彼女はきょとんとしていたが、すぐに首を横に振った。

「そうですか…。でしたら、自己紹介をさせてください。俺は白井大希、大希といいます。差し支えなければ、貴女の名前を教えてください。」

女性はまた、茫然としていた。

しばらくすると、彼女は病室の周りを見回していた。

女性はとある病室に設置されていた物を発見したのか、そこで首を固定した。

ちょっとしてから、彼女は大希と目を合わせた。

「『マリコ』、です。」

「『マリコ』？」

女性は頷いた。

たまたま彼女の後ろに飾られたポスターと照準が合った大希。

病院らしく健康促進的なポスターだが、デカデカと写る若い女性には見覚えがあった。

この女性も『マリコ』と言う名前の人物だった。

「有名な人と同じ名前なんですね。」

大希は凄いと感心していた。

マリコと名乗った女性は、急に俯いた。

彼女の目が、辛さを物語っていた。

大希はしまった、と後悔した。

悪気はなかったが、有名人と比較されて嫌がる人だっているんだと。

なので彼はその事を謝罪した。

「すみません。気に障ったようでしたら、もう触れませんから。」

謝罪後、大希は頭を下げた。

マリコは顔をあげて、大希を見た。

彼女の声は聞き取りにくい程小さかった。

彼女にも疑念が残っており、それを解消したいがために尋ねたのだった。

「あの…。」

「…何でしょうか？」

大希は謝罪時の前屈みのまま、マリコだけを見上げた。

マリコは話を続けた。

「ここは、どこですか？」

「病院です。あなたが倒れている所を、俺が救急車を呼びました。」

「病院とは、何ですか？」

え、と大希は困惑してしまった。

人間、産まれた時から病院にお世話になっているからである。

それがわからない、とは。

彼女は一体どんな生き方をしたんだろうかと不安になった。

いや、単純に言葉の壁の問題かもしれない。

病院とはどういう所か、改めて説明してあげるのが彼女の為だろう。

大希は病院の説明を始めた。

「病院は、ケガした人や具合が悪い人が治そうとする手助けをする所です。」

「ホスピタル…。」

「英語は、わかるんですか？」

「英語…。」

「イングリッシュです。」

「少し…。」

大希は彼女には、多少の英単語を交えて話を進めた方が良さそうと心得た。

それから大希は、マリコから情報を聞き出そうといくつかの質問をした。

だが、ほとんどが謎に終わってしまった。

マリコは大希を通じて、多少は話すようになった。

しかし、質問の答えは…『わからない』が多かった。

出生地も、家族もだ。

マリコの身体は回復傾向にあり、退院も間近であった。

病院側も次の患者の受け入れがあり、マリコばかり構っていられなかった。

大希はマリコの担当医に退院後について直接聞いた。

「先生、彼女の退院が迫って来ているんですが…どうするのでしょうか？」

「健康状態はよくても…精神的に不安定な部分が見受けられますから、施設に入る事になるでしょう。生活できる能力があれば金銭の支給と住まいの提供で賄えそうですが、彼女は1人で生活できないでしょう。介護が必要になります。」

施設、の言葉を聞いて大希は唖然とした。

マリコの面影が忘れられなくなったからである。

単純に栄養不足で失神しかかっただけで助けた女性。

見た目だけなら、大希と変わらないか少し歳上の若い女性だ。

髪の毛が茶色に近い赤色をしているから、年齢よりも若々しく見えた。

精神的におかしいだけで、手足の動きは十分だった。

箸も使えるし、歩行も可能だった。

一目見ただけで美しいと讃えたい女性が、障害者扱いにされる。

それはまだいいのだが、施設に連れて行かれるのは確実。

今日の面会ですら、施設だと不可能かもしれない。

もしかしたら、2度と会えないかもしれない…！

大希は焦燥に駆られた。すでに行動は始まっていた。

「先生、俺が彼女を迎え入れるのは可能でしょうか？」

「…退院後、ですか？」

「それで構いません。俺が彼女の面倒を見ます。必要な物があれば教えて頂ければ…。」

「君も仕事で大変では？」

「大丈夫です。彼女のおかげで頑張れそうです。」

やる気が出たと思うと、大希に笑みが戻ってきた。

彼の笑みの表情を見た担当医は、これ以上否定の言葉を使わなかった。

「わかりました。では後見人の手続きを取るようにしましょう。もちろん、あなたが責任を持ってください。それでいいですか？」

「！？ありがとうございます！」

喜びが頂点に達した大希は、勢いよく頭を下げた。

その後、マリコの退院は1週間後に決まった。

事前に病室では、大希はマリコに自分の家に帰るという話はつけていた。

マリコはきょとんとした対応をよくするが、彼の話に頷いていた。

救急車に運ばれた時、マリコには手荷物はなかった。

退院時に整理の手間はいかからず、大希はマリコを迎えに行くだけで退院の手続きは済んだ。

大希とマリコ。

共に生きる生活が始まった。

短編 9

同居の日

※短編8の続きです。

大希とマリコの共同生活が始まったのは、大希が嫌いな家業を継いでから1年を過ぎていた。

高校卒業後に継いだ大希は、まだ20歳を過ぎていなかった。

後見人の制度の適用は、厳しかった。

マリコを診た担当医が知人の弁護士に頼み込んで、特別に大希はマリコの後見人となった。

とはいえ、生活のリズムを整えるには苦勞した。

マリコには日常生活への知識が非常に乏しかった。

しばらくの間、宿泊所の営業時間内は彼女を管理人室に置いていた。

目の届く範囲に固定し、彼女が変な行動に出ない様にした。

アルバイトは夜勤メインにした。

夜、マリコを寝かせた後に仕事に向かった。

日曜日の日中は必ず、休みをいれてゆっくりするよう予定は組んでいた。マリコはいるが彼女の側でのんびりする方が安心だと、大希は思っていた。

だが、大希の調子も崩れるようになった。

日曜日に休みを入れているとはいえ、平日に十分な休息を取れていない大希。

よく1年以上も自分の身体が持ち堪えたなあ、と感心していた。

それ位、ある日の大希の具合が悪かった。

朝、管理人室の受付の窓を開けようとした途端、彼はフラッと倒れてしまった！

マリコは目の前にいたので、大希の異常に気付いた。

彼が床にぶつかるのを、彼女が支えたおかげで防いだ。

「大丈夫…ですか…？」

マリコは大希と話ができるが、口数はまだまだ少なかった。

話のスピードも遅い。

だが、同居人の気遣いはしたいと常々思っていた。

マリコは自分なりに、学習していった。

簡単な家事スキルや、宿泊客（ほとんど今成区内の労働者だが）への挨拶は覚えていった。

大希が真剣に、彼女をサポートしてくれていた。

マリコが覚えた知識はまだまだ乏しい。

それでも、大希の苦労は理解できた。

大希が救急車を呼んでと言ったので、マリコは大希の指示通り動いた。

彼女の頓珍漢な動きで対応が遅れたが、大希は無事に病院へ運ばれた。

幸い、命に関わる所まで悪化はしていなかった。

安静にするよう指示を受けた大希は、帰宅後数日は仕事を休んだ。

管理人室の受付の窓は開けており、営業中はマリコが座っていた。

おとなしい女性だったので、宿泊客との口論は少なかった。

その分、彼女の天然そうな物言いで客とのすれ違いはあった。

揉め事が起きてしまった場合、大希が素直に謝罪した。

一応、マリコにも「これは言ったらダメ」と注意はした。

時々、彼女の表情が曇る。

怒ったのは大希自身だから、申し訳ないと感じていた。

マリコと共に暮らしていくにつれて、大希の体調は悪化していくばかりだった。

辛そうな表情をしている彼を見て、マリコは心を痛めた。

だからある日、マリコは大希に聞いたのだ。

「もう少し、お手伝い…出来る事は…ないですか…？」と。

とはいえ、日常生活で最低限の作業自体は、既に大希は教え込んでいる。

掃除や洗濯などの至極簡単な家事については。

大希は今ではそれで十分です、と断ったが。

マリコは引き下がらなかった。

「あなたが…苦しむのは、見たくない…です。

助けて頂いた…お礼を、もう少しさせて下さい…。」

マリコの話のスピードは、まだまだ遅めだった。
目をうるうるさせながら訴える彼女に対し、大希は折れた。

★★★

大希が倒れた日から、1年は過ぎた。
彼も20歳になり、成人の仲間入りを果たした。
(※このシリーズではそういう設定をお願いします。)
一時期どうなるか不安だった大希だが、あれから順調よく生活を営んでいた。
マリコは家事も仕事も習得していった。
大希の教えをきちんと守り、最終的に掃除・洗濯は1人でできるようになった。
料理の方も、道具の使い方や市販の調味料を使ったものなら、ある程度こなす様になった。
宿泊所の受付は大希が後ろで座っているものの、簡単な事務作業は覚えていった。
日常生活に支障をきたすレベルに落ちる事なく、むしろ家庭内ならば自活できるレベルまで、あともう少しで登れた。
教え込むのに苦戦した大希だが、マリコの成長を見届けてよかったと喜んでいった。
あとは…彼女の自立を応援しよう。
大希はマリコに、外への視野を広げさせる計画を立てた。
まずはマリコに、沢山の本を見せた。
それは大希が図書館で上限まで借りてきた、子供の本である。
子供向けをわざわざ借りたのは、マリコが読みやすいように考えたからである。
減多に行かない図書館。
その上成人しているのに子供の本を借りた大希は、羞恥心でいっぱいだった。

これもマリコの自立の為だと、我慢して手続きを行った。

本来ならば、2人で外に出て体験してみるのが、一番実感が湧きやすい。

大希が多忙なので、外出先の範囲は近所の商店街のみしか行けなかった。

狭い世界でとどめるのは可哀想だからと、大希は別の手を考えた。

それが、書物による知識の定着であった。

マリコは本の内容を眺めるようにして読んでいた。

文字よりも、絵をじっと見つめていた。

彼女は大希に質問を繰り返していた。

大希も答えられる範囲で質問に応じた。

外の世界は限られたものでしか見せてないが、決断はしてもらわないと困る。

ある日曜日、2人で出前のご飯を食べる時間に、大希はマリコに尋ねた。

「マリコ。ストレートに言っちゃうけど、いいかな？」

「…私は、大丈夫です。」

言葉の習得数も増えたマリコだが、話すスピードはまだまだ遅かった。

声は聞き取れたので、大希はマリコが肯定の意を示したと解釈した。

大希はすぐに本題に入った。

「何か、やりたい事は見つかったか？」

「やりたい…事？」

「本を読ませるしかさせてないが…ざっくりでもいいよ。全部は達成できないが、出来る事は協力したいんだ。」

大希の眼差しはまっすぐだった。

真剣さはマリコに伝わった。

勇気を出して、彼女は大希に伝えた。

「命が…欲しいです。」

「命？生き続けたい事かな？それはもうとっくに…。」

大希が返答すると、マリコは首を横に振った。

マリコは暗い表情のまま、もう少し内容を広げた。

言葉は断片的だった。

「新たな、命が、欲しいのです。」

「…えっと…。」

「宿す、と言え方がいいのでしょうか？」

『宿す』。

たった3文字の言葉で、大希はマリコの言いたい事が読めた。

「まさか…子供が欲しいのか…？」

大希の問いに、マリコは頷いた。

「それは…誰と誰の？」

大希は次の問いに移った。

その答えが薄々わかっていても。

マリコは暗い表情のまま、対象者達を述べた。

「私と…あなた。」

「えっ!？」

大希は驚愕のあまり、後ろに倒れ込んでしまった。

マリコの望みには重みを感じてしまうからだ。

彼女の望みは、言い換えれば『子供を作りたい』ということだ。

子供は作っただけでは、到底終われない。

大人へなる為に、十分な教育を施さないといけないのだ。

教育の義務が伴うのは、子を作った父と母である。

受験の為に勉強に励んだ経験のある大希ならばともかく、知識の乏しいマリコ

では…子供の教育を務まるか疑問だった。

ひとまず、大希はマリコに謝った。

「ごめん。君の希望を叶えたいけど、流石にそれは…早すぎるというか…。」

マリコは突然、倒れ込んだ大希の前でしゃがんだ。

彼の肩に両手を置いて…顔を…唇を近づけた。

大希は生まれて初めて、異性の柔らかい唇に触れた。

軽く触れただけだが、接触経験の薄い大希には…刺激が強すぎた。

「お、おっ!？」

大希は慌てて横にずれた。

シンク台の下にもたれかかっていたので、左右にずれるしかなかった。

彼は両手で唇を隠していた。

顔を真っ赤に染めて、目に涙汗を浮かべていた。

日常生活の常識に乏しく、いつも根暗な印象をもたせたマリコ。

今のシーンだけは、彼女の方に余裕があった。

「…やり方は知っています。あとは…貴方の気持ち次第です。貴方が断れば、2度とこの望みを口にしません。」

どうしますか？とマリコは聞かなかった。

だが大希には、彼女に選択肢を迫られているひっ迫感があった。

大希の頭で解釈すると。

パートナーになり、子供を産み、育てる事に…『はい』か『いいえ』で答えなければいけない選択肢を迫られている、という事だ。

大希はマリコに対して、たまたま公園で倒れていた所を助け出した、放って置けない女性として見ていた。

果たして、本当にそうだったのか？

これは自分の思い込みだったのではないのか？

大希は今までの行動を、振り返る事にした。

彼女を助けたのは、普通の事だ。

病院へ運んだのはまだいい。

それから自分は。

彼女の見舞いをした。

退院時に彼女を引き取った。

彼女の後見人にもなった。

家事や事務作業など、最低限の仕事は教えた。

彼女の将来の為に、世界を広げる為の教養を教えた。

マリコに尽くし過ぎではないか？

大希はそう思った。

これまでの行動には、愛がないとできないはず。

自分は、マリコの事を好きになってしまったのか。

大希は自分の頭でそう考えていた。

ならば、もう躊躇う必要はないだろう。

大希は身体を起こし、マリコの目を見た。

マリコの望みに対する答えを、直接伝えた。

「わかった。検討するよ。夫婦になろう。子作りや育児の勉強も、一緒にやろう。俺は必ず、付き添うから。」

「…はい。」

今まで笑う姿のなかったマリコだが、初めて人に笑顔を向けた。

★★★

マリコの望みを知った大希は、すぐに行動に移した。

彼女の希望を、どうにかして叶えたかった。

まずは婚姻関係となる為の手続きである。

書類関係は役所手続きで簡単に済ませられた。

マリコの家族構成は、いまして通した。

厄介なのは、大希の家族だった。

白井造希は頑固オヤジである。

ちょっと意見がズレるとケンカしてしまう可能性があった。

マリコとの結婚を認めてくれるか、大希の不安は募るばかりだ。

ダメ元でも、婚姻関係を認めてもらわなくてはいけない。

今後マリコと共に暮らしていくならば、周りの気持ちも考えて行動しなくては
いけない。

勝手に家業を継がせたのだから、黙って駆け落ちしてもよかった。

だが今の生活では、2人だけでやっていくには厳しかった。

家業もちょっとずつ軌道に乗っていき、掛け持ちバイトも1つ減らした。

外食以外、お金は使わずに貯金していた。

日々の暮らしがカツカツでも、毎月数千円は捻出して、貯めていた。
まだまだゆったりとした暮らしには不十分で、家族の協力が必要だった。

今成区の宿泊所から南へ2キロ。

吉川区の店舗付きの3階建の建物。

大希の実家である。

白井家の入り口は、喫茶店への入店用の扉と、反対側の住宅用のドアからの、
2種類あった。

日中の喫茶店は営業中だから、大希とマリコは住宅用のドアから入った。

ドアを開けるとすぐに階段があり、そのまま登った。

2階のドアを開けると正方形の玄関があり、2人はここで靴を脱いだ。

相談する為のアボは事前にとっていたから、大希はベルを鳴らさずに戻ってこ
れた。

この日の喫茶店は時短営業で、店じまいをした。

2階の和室の居間で、大希とマリコ、大希の両親が集った。

大希は今までの経緯と、これからの人生について話した。

もちろん、マリコとの結婚を認める事もお願いした。

大希の予想は当たりで、父親の造希は馬鹿者！と怒鳴り散らした。

挙句には大希の頬に平手打ちまで。

「家に戻ってこんと思えば、こんなやましいモンをしておったのか！」

造希の怒鳴り声は外まで聞こえてくるレベルであり、大人しいマリコは後ろに
引いていた。

大希も負けずに言い返した。

「やましい事なんかしていない！あの界限自体、治安の悪い地域で見張りは必
要だったんだ！だからずっと管理人室に住んでいたんだ！それに、彼女は公園
で意識朦朧としていたんだ。助けなきゃ、命を落としていたかもしれないな
った！彼女には身寄りがいない。だから俺は側についてあげてるんだ！」

息子の主張は激しかった。

ここまで大希が説明しても、頑固な父親は息子に折れなかった。

息子の気持ちを汲めず、結婚には反対の一点張りだった。

そんな中、黙って見守っていた大希の母親、布美子が間に入った。

彼女の口からは、大希にとっては意外な対応だった。

「もうよしでしょう？大希のおかげで宿泊所は切り盛りできているのよ？連れてきた彼女、どうやら悪い子じゃないみたいね。大希がこれ程、熱愛するのだから。」

「お前は黙っとれ！」

「大希には無理を聞いているのよ。本来なら、決別されてもおかしくないのよ。結婚ぐらいは、好きにさせてあげなさいな。」

「お袋…。」

父親の言いなりだろうと、母親には諦めていた大希だった。

彼女が大希の肩を持った事に驚いた。

「マリコさん？大希も私の夫みたいにカッコよくなりがちだけど、仲良くするんだよ？」

布美子はマリコの手を握った。

流石の妻が結婚に賛成していたと知って、造希は何も言えなかった。

結局、母親の労いにより、大希とマリコは結ばれた。

大希とマリコの間には、和希・勇希・未衣子の3人が産まれた。

だが、和希が10歳の時…マリコは謎の治せない病に倒れ、息を引き取った…。

☆☆☆

『レフェリー、レフェリー！』

『…その声は、ラチェリー姉さん！』

『よく頑張ったわね。3人も子供を産んで。しかも1人は《メス》だったわね。』

『よかった…。大希さんにはこれで子供は最後、って言われたから…。』

『最後の希望が叶ったわね。』

『これで、私達の《夢》が受け継がれるわね、姉さん。』

『そうね…私は1人しか産めなかったわ。《メス》で良かったけど。』

『姉さんの活躍のおかげで、私は地球を知る事ができたのよ？』

『感謝してるの？』

『当然よ。』

『ありがとう。レフェリーは優しい妹ね。』

『…地球には、姉さんの相手になった《彼》がいるのね。』

『《夢》を見たから？それとも、あの娯楽施設で目撃したから？』

『両方かも、しれないわ。』

『《夢》なら共有できるものね。』

『…これから、娘には《彼》の味方になってほしいわ。』

『《彼》は孤独だった。だから破壊の惨劇を繰り返してばかりだった。』

『そんな人生を終結させる人が現れたのに…。』

『《彼女》もいない。《彼》を愛せるのは…。』

私達の娘だけ。

短編10

触発の日

ラチェリー・ローンは、もう息を吹き返さない。

〔レッド研究所〕の当てがわれた粗末な個室で、ラルク・トゥエラーは人型の《メス》が眠るカプセルのガラスを触りながら、察した。

元々、生物を収容するカプセルは、ラルクのいる個室には備わっていなかった。

時間の概念を把握していれば…カプセルは2日程前にこの個室に放り込まれた。

まだラチェリーは、上体を起こしていた。

ずっと、眠ってはいけなさと心掛けていたのだろう。

生きていかなばならない。

これを忘れずに、日々の暗い生活に耐えていたのだろう。

カプセルに眠る直前のラチェリーは、身体をブルブルと震わせていた。

寒さを感じているのかと、気掛かりになるくらいには。

〔レッド研究所〕の主であるクーランは、彼女を乱暴に扱った。

《メス》という生まれ持った性質を活かせと、仕込んでいった。

ラルクは他星の破壊に関して成果を収めている、クーランの《自慢の息子》。

ラチェリーを彼に当てがい、生命の繁殖を強要した。

人型の《メス》の、しなやかで優美な細身の体型は、みるみるハリを失ってしまった。

涙目で訴え続けた眼光も、次第に霞んでいった。

ラチェリーにとっては、今の無機質な個室が檻だと思い込み、生気を喪失させていた。

ラルクとラチェリー。

《育ての親》と《自分達を強引に引っ張っていった権力者》。

クーランに自由を束縛された2人の間に誕生した生命は、健常者のみで数えると、1つだけ。

ラチェリーの腹に宿した他の生命達は、持続しなかった。

健常な1つの生命は、産み落としてすぐにクーランの元へ連れ去られた。

その後の《子供》の行方は、わからない。

ラルクはラチェリーと出会った当初、クーランの指示通りに彼女を激しく抱いた。

手順については、クーランから教わった。

ところが段々触れ合う中で彼に情が湧き、彼女への手つきが優しくなっていった。

今更彼女に優しくしたところで、赦しを貰えないだろう。

言葉を正常に発せる状態なのかも不明だ。

何の返しの期待すらできない状況まで落としてしまったが、彼女の晩年をラルクは優しく接した。

抱く回数を減らしたり、抱く時も撫でるように触れた。

つもりにも積もった疲労もあってか、ラチェリーの体調は優れず…最後は永遠に目を覚まさなくなってしまった。

ラチェリーには、妹がいた。

それもクーランから聞いた。

妹は、個室に当てがわれる前にいなくなってしまったという。

クーランが彼女から吐き出させた証言によると、なんとラチェリーが手を掛けて捨てたとの事だった。

真偽はわからなかったが、クーランは後追いをさせなかった。

逃げ出したとしても生存確率は低いだろう、と放置した。

カプセルにそっと触れている状態が続いていた最中に、突如通信が入った。

たった1つしかない壁面モニターへ、ラルクは近づいた。

アラームが複数回鳴るので、それを止める為にも回線を開いた。

顎髭を1センチ程生えてきたクーランが、画面に映った。

『よお。最後の面会はどうだ?』

地球の年齢では中高年真っ只中の濃いオヤジが、ニタニタと笑っていた。

彼女が『最期』を迎えているのを、知っているのに。

今更、散々自分をこき使ってきた《オス》に対して、何の期待もしなかった。

「……別に。」

『気にならねえ、ってか？そりゃそうだ。お前さんの手は洗い流せねえくれえに血のおいが染み付いているからなあ。』

ラルクは言葉の後に嘲笑うクーランをじっと睨みつけた。

モニター越しでは、何の効果もなかった。

長話をしたくない若い《オス》は、ある単語を発した。

「用件は？」

中身を聞き出す時も、ラルクはぶっきらぼうに話した。

クーランは火星圏タレスの権力者であり、本来ならば彼の方が上だ。

ラルクの態度がプライドを踏みにじられたと、腹が立ってもいいのだが。

中年の《オス》は、全く気にならなかった。

『何の変化もねえが、仕事を持って来たぜ？今度潰してくるのは、この星だわ。』

クーランは必要となるデータを、ラルクが眺める壁面モニターへと送りつけた。

データは右下の長方形で表示されている。

それは、宇宙に漂う星の外観だった。

惑星やその周りを巡る衛星と異なり、青っぽい色味以外はどこにでも転がっている岩石のような見た目。

これでも、生物達がうまく適応して暮らしている星なのである。

生命の営みが発達している星を『潰す』。

すなわち文明が発展していた星の終焉を迎えさせるのと同じ意味だ。

これは災いを引き起こそうとする活動であり、襲われる者達にとっては悲劇でしかない。

決して、喜ばしいお仕事とは思えない任務である。

だが、ラルクにはもう、的にされた星の民達に対しての哀れみは、薄れていた。

度合いで言えばむしろ、カプセルの中で眠り続ける《メス》の方に、彼は湧いていた。

減ばした星の数が1つ増えたところで、彼には何の驚きもなかった。

『使者の奴らに行かせた時はよ、セキュリティは脆かったそうだわ。お前さんなら、あっという間に陥落させられるだろう？』

「決行はいつだ？」

ラルクは短く尋ねた。

クーランは一時、お喋りを止めた。

星の防衛対策の話より、ラルクの質問を聞いた。

『…もう、行くのか？』

「獲物は早く捕まえろ、と言ったのはアンタだろ。」

『…ほお、素直に教訓を守ろうって魂胆か？いいねえ。』

へへへ、とクーランは不気味に笑った。

『丁度いいか。今回はちと遠いからなあ…。』

クーランは壁面モニターの左下に、宇宙船の映像を流した。

『今はコイツが待機中だ。コイツに乗れよ。』

指揮はお前さんに任せるわ。』

「承知、しました。」

ラルクは普段慣れていない言葉で、クーランからの任務を引き受けた。

★★★

よくこんな遠いとこまで足を運ばせたもんだ。

ラルクはクーランの言い渡された任務に呆れていた。

ラルクの出身も、クーランが構える〔レッド研究所〕も、所在地は火星圏タレス内だ。

今回、『潰す』星は、海王星圏の星だった。

〔フィルプス5〕という当時としては最先端の技術を搭載した宇宙船に乗っても、地球の暦にして3ヶ月はかかった。

地球からロケットを飛ばすと数年は見積もる必要があるので、それに比べたら驚異の速さだが。

何故海王星圏という太陽系の惑星内で最遠の地まで飛ばないといけないのか。

詳しい経緯を、ラルクは〔フィルプス5〕の同乗者に教えてもらった。
任務を言い渡す数日前、クーランは使者のHR達からの報告を聞いて、カチンときたのである。

戦闘を生業とするラルク達HRの知らないところで、クーランが望む商取引の交渉がうまくいかなかったんだろう。

同乗者の話を黙って聞きながら、ラルクの頭ではおおよその原因を把握していた。

馴れ馴れしい会話ができていても、所詮権力者と隷属の関係。

クーランの任務は、絶対に遂行しなければならない。

海王星圏の、クーランが指定した星に到着したラルク達。

彼らは商売人として装い、関門の出港口と駐艇場を通過した。

ラルクは数人を引き連れて、星の内部に入った。

駐艇場付近の都市は外部の客を招く為に、商店の数が豊富であった。

星間同士の貿易も、商店の集まりによって盛んになる。

どの商店も宣伝用の展示や声かけを行っていた。

よりどりみどりの品物など気にせず、ラルク達は素通りする。

彼らには陳列された新品に対して、魅力を惹かれている暇はなかった。

そんな誘惑に引っかかる時間があるなら、星の滅亡計画を練る方向に持っていく。

目移りするなど、クーランから教わっていた。

必要最低限の道具は、母星でクーランが適当に用意してくれる。

なので、余計なものを無理に買わなくてもよかった。

作戦会議の為に部屋を借りようと、宿を目指していた時だった。

ソイツは、娼婦の売り子だったのだろうか。

顔立ちも細身の体型も、『美しい』の一言しか出なかった。

商店の建物の角に立つ人型の生物は、輝かしいオーラを纏っているかのようだった。

必需品でさえも支給されていて買い物に用のないラルクだ。

当然、《メス》の魅せるパフォーマンスも無視した。

だが、麗しき生物の前を素通りするだけでは、終わらなかった。

ソイツが自分に、ベッタリと寄り付かなければ…ラルクは宿屋まで一直線だった。

美形の生物は、ラルクの右腕を両腕でぎゅっと抱きしめていた。

微かな痛みを感じたラルクは、痛みの元になる方角へ振り向いた。

当然、ラルクの気分は悪くなった。

まだ、不満を口には出さない。

相手の動向次第によって、断り方を考えようとしていた。

目の前の《メス》と、個室で共に過ごした《メス》と被ってしまったのだろう。

黒髪赤眼の人型の《オス》が寡黙を貫いているので、美形の生物は痺れを切らした。

自ら口を開いた。

「お兄さん？今から宿に行くんでしょう？」

ラルクは驚いた。

見ず知らずの《メス》が、ラルクの行き先について想像する分には不思議じゃない。

こんな繁華街まで出歩く目的と言えば、宿の他に商店や飲食店に出入りだってする。

頭の悪い生物でも、これぐらいの事は察しがつくだろう。

ラルクが惹きつけられたのは、別の点だった。

この生物が、自分達の行き先は『宿』だろうと推測した事だ。

『だろう』、ではなく、『しかない』と断言したに違いないと、ラルクは感じ取っていた。

こんな発想が出るのは、頭の中が貧困なのか、それとも…。

「…外部に漏れなさそうなピッタリの場所はないか？」

「ラルク！？」

今度は彼の後ろにいた若い《オス》が驚いた。

ラルクは元から口数の少ないHRであり、それは彼らも熟知していた。
ちょっかいかけに来た軽々しい《メス》に対しても、だんまりを決め込むタイプだと見込んでいた。

そのラルクが、《メス》の誘いに応じたのだ。

後ろのラルクの仲間である彼らの動揺は、腕に抱きつく《メス》にも伝わった。

「あら、付き添いの者が困惑してるわよ？」

それを聞いたラルクは、仲間達に視線を向けた。

「…先に行け。後を追う。」

「わかった。」

若干、腑に落ちない顔をした仲間達は、ラルクの側を通り過ぎていった。

走り去ったので、彼らの姿は段々小さくなった。

「やけに従順なのね？あの子達。」

「御託はいい。さっさと場所を移せ。」

「急かす《オス》は、嫌われちゃうわよ？『どうでもいい』って顔してるけど。」

ウフフ、と目の前の《メス》は笑った。

ラルクは相手の思考はわからずだが、不穏な空気は感じていた。

★★★

「倒してほしい、相手がいるのよ。この星にはね？」

美しい生物は自分の案内した建物の密室で、ラルクに頼み込んだ。

聞いていたラルクは密室の壁際にもたれた状態で、椅子に座る生物と顔を見合わせなかった。

彼の目の前にはカーテンのない窓があり、外の繁華街の様子を観察していた。

別に、美しい生物の話を聞かないわけではなかった。

「相手は、俺の目的と被るのか？」

「かなり憎まれているらしいから、一緒かもしれないわね。」

そうか、とラルクは軽く呟くだけだった。まだ、納得はしていない。

美しい生物から、はっきりとした名前が告げられていないからだ。

正体について尋ねる前に、ひと段落置いた質問をした。

「報酬は？」

「あら、引き受けるのね？」

「憎まれ者の名によって判断する。お前が頼み込んでいるからには、見返りは用意されているのだろう？」

ラルクは生物に対して視線のみを向けた。

生物はクスクスと笑った。スッと立ち上がり、商店通りで会った時と同じようにラルクにべったりとくっついた。

ラルクより頭半分低い背丈の生物は、彼の耳元で優しく囁いた。

「倒してくれたら、考えてあげるわ？」

告げた後は、ラルクの横顔から離れた。

彼が首を動かせるようになった。

「で、ソイツの名前は？」

「名前はね…。」

★★★

海王星圏オクトールの政策執行機関の最高責任者である、コルポ・オクトール。

美しい生物が語った名前がそうだった。

ラルクがクーランから星の滅亡の命を与えた原因の1名であった。

なので、彼の中の条件が一致した。

コルポの息の根を止めるのは、容易かった。

太陽から遠く離れた海王星圏の星々でも、空の明暗は存在する。

もっとも、太陽の光が届きにくい存在の海王星圏の星々は、日中でも暗い印象を受けた。

暗さが増す星々には、厳しい寒さも蔓延る。

余計に民達は、殻の中に閉じこもりやすかった。

夜の外出を控えている層が多い星々は、スパイの餌食にされやすい。

オクトールの政策執行機関は極めて目立ちやすい高い直方体の建物を構えている。

コルボはその建物の最上階にいと情報を知ったので、警戒心の薄い夜だとのにされやすかった。

登らないといけないと尻込みそうだが、群を抜いた身体能力を持つ改造済のHRには、何の困難もない。

空飛ぶ生物の影なんて捉えるのは簡単なはずなのに、誰もラルクの背後を襲う者はいなかった。

コルボは室内の明かりを消して、寝床に入っていた。

タコの頭部に似た中年の生物は、永久に眠るだろう。

コルボという生物は、他星人には嫌われているが、同郷の者達には好かれていた噂を耳にしていた。

夜明け頃には、血を垂らしているこの星の長に、下の者達はショックを受けるだろう。

他星人たるラルクには、何の感情もなかった。

何の罪もないのに虐げていた《メス》を失った彼に、大衆に好かれた《オス》の同情などできなかった。

どのみち、悲しみに明け暮れる民達も、いくらか道連れにする予定だ。

長を始末すれば、あとはこの星のライフラインを止めるだけ。

生き延びる術を持たない民達は、次々とぼったり倒れていくだろう。

無理に全員を一気に送り込む必要はない。

クーランは反抗勢力が立ち上がるのを懸念していた。

ラルク本人は、返って非効率と考えたので、今まで実行しなかった。

実際、この方法を選択したおかげで、ラルクは幾度の他星の滅亡に成功している。

クーランの懸念も、起こされていない。

権利者の命に従うラルクだが、これだけは譲らなかった。

コルポの息は、止まっている。

機関の最上階の寝室に、もう用事はない。

開いていた窓から脱出に移ろうとした時だった。

ラルクは、危険を感知した。

既に遅かったかもしれない。

瞬発的な動作のできるラルクなので、ほぼに切り傷ができる程度で済んだ。

回避行動のできない生物ならば、一瞬にしてくたばっただろう。

そんな超速の奇襲を、ラルクはかけられた。

飛んできたのは、超小型のナイフだった。

ナイフはラルクの頬に切り傷をつけてから、寝室の壁に刺さった。

壁の材質がコルクのような柔らかい素材で出来ていたのだろう。

ナイフが投げつけられたのは、過ぎたこと。

ラルクは自分を倒そうとする見えない刺客に対し、警戒心を強めた。

冷たい風が差し込む窓と向かい合った状態で、じっと構えていた。

身構えていて、正解だった。

再度、ナイフを投げつけられた。

これも彼は、うまくかわしていた。

柔らかい素材の壁に刺さったナイフが追加された。

次の戦闘は、まだ始まったばかり。

いや、臨戦体制すらまともに取れていなかった。

刺客の正体が、いよいよ登場したのだから。

長い黒髪と、地球でいう中華風の繋がった赤いドレス。

開いた窓から逆さまの状態で、すると現れたのは…。

「ウフフ。どうやら並大抵ではいかないうね？」

昼間に会った依頼者の《メス》だった。

《メス》は華麗に寝室内の床に着地し、立ち上がると右手の指にナイフを挟んだ。

どうやらラルク自身を、逃す気はないようだ。

「…やはりはめるつもりだったんだな。」

「はめる？まあ、そう捉えてもらって結構だけど。」

この華麗な生物は、まだ何か言い残していた。

「このオヤジを刺して欲しいと願ったのは事実よ？私、手を汚したくなくてね？」

「なぜ俺に、敵意を向けた？」

「実は私、《オス》のHRなのよ？」

すると《メス》…だった生物は、ドレスの裾をめくり、素足をラルクに見せた。

人間に似た肌色の素足に、凸凹した鱗が浮かび上がっていた。

鱗で魚を思い出したラルクは、この生物の出生地を言い当てた。

「海王星圏、ミラニア！？」

「そう。私の名前はニシア・ベティルドなの。」

ホントは名乗りたくないけど、あなただけは特別よ？だって…あなたの血、美味しそうだから！」

ブォン！と風を切る音がした。

HRと明かしたニシアの右手にあった3本のナイフが、ラルク目掛けて飛んでいった。

これもまた、ラルクはうまくかわす。

寝室の壁に、計5本のナイフが刺さった。

「あら、まさに軽い身のこなしねえ。ならば、これはどう？」

ニシアはドレスの裾の太ももをチラ見せた。

太ももには茶色のベルトが巻かれており、薬品の入った小型瓶も付属していた。

ニシアは小型瓶を1本、左手に持った。

瓶の蓋は、コルクだった。

彼は口紅のついた唇、ではなく前歯でコルクを抜いた。

ボンッと音を立てて、中の薬品を部屋中に撒き散らした。

薬品は煙のようにモクモクと広がり、寝室内は薬品の匂いで充満した。

ほんの少し、ラルクは薬品の匂いを吸った。

わずか1mlもない少量を鼻に入れただけで、彼は両手で鼻の穴を守った。
彼は開いた窓を探さず、近くの壁をHRの力で破った。
機関の最上階は、コルポの寝室以外の部屋はなかった。
だからラルクは、肉体強化のみで壁を破り、外へ脱出できた。
もう少し煙を吸えば、命取りだった。
落下中にラルクは危なかった、と思った。
海王星圏ミラニアの刺客・ニシアの追撃は終わらない。
彼もまた、ラルクが破った壁の穴から飛び降りた。
右手にナイフを3本持って、同じようにラルク相手に投げつけた。
これで計8本、ラルクに集中して放たれた。
あんな細身の身体、しかも薄いドレスのみの着用。
ナイフが仕込まれているとは考えにくい。
ニシアは自分もHRと言った。
ならば、自分が銃を出現させるのと同じ、ナイフを出す特殊能力を持っている
のだろう。
そう考えると、ニシアのナイフの所有量に不思議はなかった。
落下中は下へ引っ張られていくため、回避行動が取りにくい。
ニシアのナイフのように、ラルクも銃を出した。
横長の形をした銃だが、発砲はしなかった。
彼は銃をバット代わりにして、降ってくるナイフを思い切って払い落とした。
うまく成功し、ナイフは機関の敷地内の地面に刺さった。
遅れて、ラルクも地面とぶつかった。
生い茂っていた雑草が、クッション材のがわりになっていた。
ニシア、9本目のナイフを出して、ラルクの上に乗っかろうとした。
ラルクは転がりながら避けた。
瞬時に立って、体勢を戻した。
ニシアも、ナイフの刃を黒髪の《オス》に向けた状態で構えていた。
まだ敷地内とはいえ、外に出たならば…ロボ形態での戦闘も可能になる。
大きくなるか、元の状態を維持し続けるか。

どちらかの選択を迫る寸前で、サイレンが鳴った。

2名のHRは、広範囲に響く音にビクッとなった。

「くそッ、こんな時に…!？」

ラルクは苛立ちを覚えると、何かの異変に気付いた。

ニシアの逃亡だった。

彼は俊敏な動きを駆使して、あっという間に去って行った。

ラルクは獲物を逃したと思い、怒りで横長の銃を地面に力強く刺した。

彼自身も、ムカムカしている場合ではなかった。

今は音のみの発令だが、直々自分を照らすライトも登場するだろう。

コルポを始末したHRとして、捕まってしまう。

バレないうちに、ラルクは退散した。

悪い状況を切り抜けたラルクは、無事同じ研究所内のHR達と合流した。

ニシアと密室でのやり取り中に、海王星圏オクトールのライフラインの源を突き止めてもらっていた。

ラルクはHR達の伝言を聞いて、源を破壊した。

そして…海王星圏オクトールは静かに、滅んでいった…。

短編11

試練の日

※この章から『15・天翔の日』まで続き物です。ご注意ください。

こんにちは、諸君。

俺の名前はアレックス・ヘイリー。

外宇宙対策本部〔ラストコア〕の技術局長だ。

今更挨拶などと飽きられるだろうが、今回はお話をしたいが為に自己紹介した。

それは、同〔ラストコア〕で特別隊員として活動している男・黒川武人についてだ。

奴の過去は知っている？

いいや、俺が話したいのは奴自身の過去ではない。

これは俺の所属する〔ラストコア〕にも関連する話題なんだ。

10年前の創設時の話より後の、初の《宇宙進出》を目指した時の事変。

今からそれを、俺が紹介しようと思う。

☆☆☆

白井3兄妹を期間限定のパイロットとして使用する、5年前。

〔ラストコア〕は日々、業務に追われていた。

悪い事ばかりではない。俺は就任したての技術局長であり、ちょうど新兵器の開発を進めていた。

『もの』に関する事柄については、着々と計画が進められていた。

些末な紆余曲折もあったが、中断を余儀なくするまでには至らなかった。

問題は、『ひと』である。

特に前線に立つ人間が、〔ラストコア〕では不足していた。

黒川はHRで非常に強大な戦闘力を持っている。

〔ラストコア〕には絶対に欠かせない逸材だ。

だが黒川1人に任せきりでは、いつか〔ラストコア〕も壊滅する。

それは、阻止しなくてはいけない。

黒川と〔ラストコア〕事務局長であるジェームズは、躍起になって人探しをしていた。

〔ラストコア〕では今、黒川と共に立ち向かう戦友を欲しがっていた。

ある程度鍛え上げられた軍隊や警察機構にターゲットを絞っていた。

人員の確保は、思うようにいかなかった。

軍の基地、警察機構、もっと範囲を広げると刑務所や演技団体まで…。

武人とジェームズ、総司令官の宗太郎までもが現地に赴いた。

どこも〔ラストコア〕に、人手を貸さなかった。

海外情勢や、正規軍側の消極的な態度のおかげで、前線に立つ人材は不足していた。

ディム元中將の紹介でやってきたアメリカ軍の人々も、戦争に駆り出されて

〔ラストコア〕を出てしまった。

この時、〔ラストコア〕の前線部隊は黒川と、俺の自主開発したA I ロボ達のみだ。

このままでは宇宙進出は成し得なかったどころか、侵略に対する迎撃も不可能だろう。

いつ、不安定な状況下の中で、敵の襲撃が来ないか気が気でなかった。

技術開発に勤しむも、戦線を防衛できない不甲斐なさに苦しんだ。

人脈に嘆いていた日々だったが、毎日は続かなかった。

〔ラストコア〕に、戦力となる逸材が入ってきたのである。

それは、消極的だった正規軍からの回し者だった。

★★★

彼女の名前は、紫邑華南（しむらかなん）。

正規軍では看護師資格を持った、空軍の人間であった。

年齢は23歳と彼女は言った。

階級は上の方でも小官クラスだろうな、と俺は察した。

彼女は捻くれた正規軍の中でも、素直な女性だった。

俺より年上だったので、最初は日本の敬語に気をつけながら話した。

彼女は、「私よりアレックスさんの方が、階級上ですから。」

とタメ口を許してくれた。

正規軍の訓練を受けた立派な軍人だから、体力テストに支障はなかった。

空軍に所属していた為か、一般の戦闘機の操縦シミュレーションもクリアしていた。

ただ、気がかりな点を挙げるとすれば…彼女の精神面だった。

どこか、真面目に気合いを入れすぎて、怖いと思った事がある。

生真面目すぎる人間は、いつかぶっ倒れる危険性を伴うからだ。

この類いの人間には、厳しい指導を過度にするのは控えた方がいいのだが。

宇宙進出の目標掲げる【ラストコア】に、そんな呑気な感情を持つてはいけなかった。

文句の1つ2つ言わずに、素直に言う事を聞いた華南。

体育会系の部活の練習以上に、真剣に取り組む。

本当に捻くれ者集団の正規軍の一員かと、疑いそうになる。

今は他に戦力を増強できないので、彼女の成長を見守るしかなかった。

★★★

華南が【ラストコア】の特別隊員として、黒川と共に行動するようになってから、半年後。

愛嬌市内では猛暑が去って、涼しい気候になっていった頃。

統制制御室では、複数の壁面モニターに、多くの人間が正面を向いて映っていた。

かっちりとしたスーツを着たり、潔白の白衣を着ていたり、彼らの業種は様々だっただろう。

目立っていたのは俺と同じ研究者の数だった。

室内に立つのは司令、ジェームズ、黒川と俺の4人のみ。

それ以外は室内への立ち入りを禁止している。

テーマは決まって1つだった。

《宇宙進出》。

これを成功する為の技術展示や提供が、今行われている最中だ。

もちろん、宇宙ロケット開発の機構の人間も集まっている。

俺や司令達は情報収集の為、彼らの発表を真剣に聞いている。

1時間以上は聞いていたが、内容は至極昔からの既存の開発ばかりであった。

惑星探査の目的用途としての《宇宙進出》自体、年に一回成功できれば上々な方なのである。

彼らにとっては、既存のデータの改良の要領ですれば、損失も少なく済むと考えている。

皆ダメージの少ない開発事業の発表をしている中で、俺は未曾有の新兵器を紹介しないとイケない。

正直、プレッシャーがかかった。

普段は口数の少ない俺は、人前で話す事自体、苦手分野であった。

【ラストコア】の技術局長という管理職についたからには、コミュニケーションの克服はしないとイケない。

司令・ジェームズ・黒川の3人の後押しもあったし、俺は新兵器を外部の人間に公開した。

構想図と設計図のみの、ごく一部のお披露目だった。

モニター越しの研究者達の目が大きく開かれた。

皆が鮮やかな構想図や細かい設計図に興味津々になっていた。

今は会議の真っ最中。

賛同の意もあれば、反論の声もあがった。

『どうしても、人を乗せないといけないのか？』

この反論は、俺達【ラストコア】の者達にとって、かなり痛い指摘だった。

世界各国で、機械分野は無人機の開発に着手している。

産業用、軍事用の区別を問わず。

そんな状況下で、人間を必要とした機械の開発など、彼ら外部の人間からすればナンセンスな話である。

どうしてそのような設計に至ったのか。

これを証明してみせないと、研究者達は納得しないだろう。

俺は目上の研究者達に屈せず、理由を説明した。

「オート操縦への切り替えの機能も搭載しております。こちらは地球内外、両方で稼働させる機体となっております。予想外の事態が発生した場合も考え、マニュアル操縦用のシステムも搭載しました。」

『どうしても、有人の必要性があるのかな？』

研究者の1人が即座に言い返した。

俺と司令とジェームズの3人は、うーんと唸った。

研究者の異論は尤もである。

〔ラストコア〕自体、戦闘要員で見ると、慢性的な人手不足。

このダメージを軽減するならば、無人機に問題事を解決させる方がよい。

実際に俺はA I ロボも稼働させているし、その応用でより強固なロボに仕立て上げるのが楽である。

1人の研究者の意見に、俺達はうまく切り返すなどできなかった。

彼らも知恵や知識を豊富に蓄えている。

納得のいく説明をしなければ、勝ち目はない。

沈黙が漂った。

俺達が返答に迷っていたから。

だが、気まずい空気なんてお構いなしに、真っ向から挑んだ男がいた。

黒川だ。

彼は〔ラストコア〕の特別隊員で重要人物だから、ここに立っていた。

科学や技術の知識は、俺や研究者以上の量は持っていない。

正直俺は冷や冷やした。

司令とジェームズにも、緊張が走った事だろう。

黒川の口が、開かれた。

「機械は、万能やないで？過信しすぎはあかんよ。」

黒川の『愛嬌弁』は、[ラストコア]創設当初から彼が一生懸命勉強して習得した方言だ。

この5年前の時点では、流暢に話せるようになっていた。

歴史的に和みそうな方言なのに、どこか凶器を帯びている。

黒川が喋ったせいである。

常に理性を保つように勉学に励んだ研究者達は、驚きはすれど、反応は薄かった。

『君。今はヘイリー氏と話をしている。部外者は引っ込んでくれないか？』

「部外者やったらここにもおられへんやろ？なあ、あんたらホンマに宇宙に行きたいんか？」

癪に障ったのか、研究者達の大半が司令を睨みつけた。

雲行きが怪しくなったと感じたジェームズが、黒川を止めようとする。彼の手を、黒川は振り払った。

「右も左もわからない未知の世界に行きたいんやったら、多少の人員は必要やろ？それはこっちで用意するから、お前らは開発にだけ力を注いでくれたらええよ。」

『生意気な発言を…！』

「そうやろうな。お前からしたら俺は低俗な男やろ。せやけど、お前らの紹介してる研究は何や？地球の過去の産物ばかりやん。偉そうに吠えたらあかんで。」

「黒川！その辺りでやめろ！」

再びジェームズの止めが入った。

ジェームズの思いもむなしく、黒川はズケズケと研究者達に苦言を呈した。

「挑戦するには、新規のものも考慮せんとあかん。挑戦して失敗して、猛省して改善して、ようやく成功に繋がるんや。

既存のアイデアはな、あくまで参考程度、基盤として留めとけばええんや。あんたらは、創り出す人間やろ？

それやったら、アレックスにもうちょっと親身になったれや。」

★★★

黒川の発言以降、外部の研究者達は俺の発表を黙って聞いていた。
別に意見交換ぐらいなら何とも思わなかったが、黒川には研究者達の態度が気に入らなかったんだろう。

過ぎた事である。

これからは新兵器について、企画段階から運用へと着手していかなければなら
ない。

新兵器の機能性や稼働実験は、俺や技術局の管轄で行う。

問題点は度々発掘されたが、うまく対処していった。

機体を熱の力で粘土のように変形する《熱融解》。

機体の骨組みとなる柔らかい管の《神経チューブ》。

パイロットの安全を極限まで守りきる《剛力ガラススフィア》。

これら3つ、今の【パスティーク】に備わっている機能は、この時代には既に
前段階の仕様が完成されていた。

黒川が何度も身体検査に応じてくれたからである。

彼の内部構造を隅々まで調べ尽くさなければ、特殊機能は開発出来なかったで
あろう。

彼には頭が上がらない。

感謝している程度で、畏まったりはしないのだけど。

あの発表会については、俺は黒川を止めようとは思わなかった。

卑怯だと言われるだろうが、俺はアイツを信じていた。

施設という名の暗い監獄から、連れ出してくれたのだから。

当時、俺には『監獄』から連れ出したい人間がいた。

初めに紹介した、正規軍から派遣された兵士である紫邑華南だ。

どうして彼女を救いたいのだと、一研究者が望んだのか。

偶然、彼女と話をして、衝撃を受けたからである。

新兵器である巨大ロボ【ポーリアドール】に適應するかどうかの、健診を実施した。

女性は自らの裸体を男性に曝け出すのを苦手とするが、健診時の彼女は躊躇わずに次々と項目を消化していった。

文句や愚痴の1つも言わず、俺達の指示に従ってくれている。

黒川が毛嫌いしたとは言っても、助っ人を依頼しているのは俺達〔ラストコア〕の方だ。

彼女と仕事上のやり取りをしていると、段々自分が申し訳なくなっていく。

健診は、丁度いい機会だった。

彼女と直接話すタイミングは、この時でしかない。

彼女はパイロットとして前線に立つ身である。

通常は訓練等で忙しい。

本当に仕事上のやり取りのみで、他愛ない会話も全くなかった。

タイミングを逃したくない一心で、俺は華南に話しかけた。

「華南。今時間はあるか？」

「時間ですか？訓練は午後に予定しているので、それまででしたら…。」

健診は《11:00》には終わる。

1時間あれば、ゆっくり話ができるだろう。

健診後、俺は彼女を自分の研究室に招いた。

応接室のような部屋のソファに、彼女を座らせた。

彼女は落ち着きがなさそうであった。

慣れない部屋に戸惑っているようだ。

〔ラストコア〕に来てから、彼女は他人に氣遣う癖があった。

俺は冷蔵庫に保管してあったお茶をコップに入れて、彼女に配った。

それでも彼女は遠慮がちではあったが、俺がやや念を押して彼女に勧めた。

ごちなさに残るが、彼女はコップを手にして、お茶を飲んだ。

量は1口分だった。

彼女はおいしいです、と笑った。

少し、彼女の気分は解れただろう。

そう信じた俺は、反対のソファに座った。

彼女と向かい合う形を取った。

華南と俺は目が合った。

彼女は再び気まずさを感じて、顔を下に向けた。

「あの…どうしたんです？私、悪い事でも…。」

彼女は自分が悪さをしたのだろうか、と思い込んでいた。

俺は即否定した。

「違う。君は厳しい試練を潜り抜けている。立派に誇ってもいいぞ。」

「そうですか…。でも私、全然ダメな子で。いつも同じ誤ちを繰り返して、皆を困らせているんです。」

彼女はそう俺に告げた。

彼女には、何か奥深い事情があるのかもしれない。

俺にはそう感じってしまった。

だから俺は、相談に乗ろうと考えた。

「華南。君には今、悩みはないか？」

「悩み、ですか？」

「些細な事でもいい。何か引っかかる内容はないか？」

そう彼女に進言したが、簡単に心を開かなかった。

「悩みなんて、ないですよ。あったとしても、解決にはならないだろうし。」

「ならば俺は聞き役に徹する。君は、ありったけの辛い思いをぶち撒けるといい。」

話すだけでも、気持ちは楽になるぞ。」

俺は悩み相談の基本について述べただけだった。

彼女は顔を上げた。

その表情は、驚愕の姿をしていた。

「いいん、ですか…？」

「パイロットのメンタル管理も、スタッフには重要な仕事だ。気軽に話すといい。」

俺はただ単に相談に乗ろうとしただけで。

彼女は突然、泣き出した。

今まで生きてきて溜め込んでいた分を、今吐き出していた。

それは彼女の泣き声の大きさに察していた。

両手で顔を覆い隠し、叫び声に近い泣き声を発した。

相当、彼女は苦労してきたようだ。

俺はアドバイスを一切せず、相槌を打つだけに専念した。

彼女の話に、なるべく共感しようと努めた。

1時間は、あっという間に過ぎた。

まだ足りないだろうと実感はしていた。

彼女も予定が詰まっている為、中断するしかなかった。

それでも彼女は、

「相談に乗ってくれただけでも嬉しいです。」

と笑顔で答えた。

短編12

慰留の日

新機体【ポーリアドール】に適応可能かを確かめる華南の健診。

健診と訓練の合間にできたスキマ時間で、俺＝アレックス・ヘイリーは彼女との面談を行った。

面談では常に、彼女の悩みをひたすら聞く方面に徹した。

行動を起こさないとは、一言も言っていない。

【ポーリアドール】には稼働試験前の最終調整があり、華南が乗り込めるまで数日はかかる。

調整期間と並行して、俺は彼女にまつわる一連の調査に乗り出した。

華南が俺に打ち明けた内容は、正規軍の仲間から受けた熾烈ないじめであった。

暴力に加え、無視や放置も当たり前だったと告げた。

彼女は士官候補に成り立ての頃、同期の人間がいじめに遭っていたのを助けた事があった。

いじめられた人間に寄り添い、庇ったそうだ。

ところが、当のいじめられた人間は家族に連絡を取り、正規軍を辞めさせられた。

その人間の行方を彼女は追わなかったようで何も知らないらしい。

幸せに生きている事を願いたい。

今は華南の方が心配だ。

悲劇は、終止符を打たなかった。

揶揄う相手がいなくなってしまうたいじめっ子達は、矛先を華南に向けた。

華南がいじめられっ子を逃した、と勘違いして。

まずは暴行を受けた。

これだけで、最初に来た時の検査で身体に痣がついている理由が判明した。

「厳しい訓練で怪我をして…」

なんて理由を最初は言っていた。

だが怪我の箇所が、日頃から布で覆われている肩やお腹周りという事実があり、実際は異なるのではと疑っていた。

やっぱり、俺の推測は当たっていたのだ。

彼女の証言が、証拠となったのだ。

証言はもう1つあった。

苦痛で思い浮かぶのは、身体的苦痛の他に、精神的苦痛がある。

今度は精神的苦痛の方だ。

身体的苦痛については、ほんの数人からしか彼女は受けていない。

彼女への被害は、精神的苦痛が大きかった。

所有物をどこかに隠される。

彼女が歩く場所に罠を仕掛ける。

殊更酷いのは…説明し難い害のある物が、彼女の使う机にぶち撒けられていた事だ。

こんな卑劣ないじめを受けても、彼女は正規軍を辞めなかった。

その理由も、俺は知りたかったから、聞いたんだ。

彼女は、

「困っている誰かを、助けたかったから。」

と発言した。

なるほど、看護師資格も保有しているのは、彼女の考えがそうさせたのか。

俺は彼女の履歴を振り返って、納得した。

同時に、疑念が残る。

人を救いたい。いわゆる救済。

救済したいが為に、軍隊に入るのか？

誰もが彼女の考えに、変だと思わなかったのか？

人間より実験が好きな俺でさえ、彼女から真実を告げられた後は異変に気づけたのに。

正規軍は、都合の良い駒しか、使わないのか？

その答えに辿り着いた俺は、早速正規軍に関するデータの収集に務めた。

1人では作業の限界があり、技術局内の研究者達に通常の業務の一部を委託した。

ジェームズら事務局にも手伝いをお願いした。

驚愕の事実を知ったのは、技術局内の研究者から提示されたデータからの情報だ。

内容は、正規軍の兵士達の成績順位表なる一覧だ。

新米からベテランまで、学期生毎に振り分けられている。

日本語表記だが、横書きの記載で左から右に読ませるよう工夫されている。

総合順位→氏名と年齢（誕生日）→身長・体重・血液型→総合評価の数値→個別評価の数値とグラフ、の順番構成になっていた。

俺はこちらの一覧から、華南の名前を探した。

成績表の一覧は、優秀者が上段に位置しており、下がるにつれ劣等者が現れる仕組みだ。

華南の名前を探した俺と、たまたま訪問しかかったジェームズで、一覧を眺めていた。

彼女の名前は、なかなか現れなかった。

検索機能もかけて、ようやく見つけ出した華南の名前。

氏名の左に記載された総合順位は…『151』であった。

正規軍の新規学期生は、200名程度の募集をかけている。

最下位の順位も、『200』の数で示されている。

この順位はすなわち…彼女の成績が正規軍側からすれば…『中の下』以下の扱いとなっている。

優秀者をこっちに回して来ない正規軍に対して、腹は立った。

それでも…まだそれぐらいならば、半分くらいは仕方ないという気で割り切れる。

むしろ…『捨て駒』として判別するのならば、最下層の人間から派遣すればいいだろう。

なぜ…『151位』の華南、1人だけを正規軍は派遣したのだろうか？

これは奴らが『彼女を見捨てよう』と持っていってるようにしか、俺には見えない。

俺は黒川に、重要事項として報告した。

同時に、華南との緊急面談も行いたいとも。

黒川は電話口でこう言った。

『ほんまに陰湿やなあ。正規軍は。やってる事は怠慢やのに。』

冷静に話しているようだが、声の調子で怒りが込められているのは感じられた。

★★★

緊急面談は3人で行った。

華南と俺と黒川が、俺の研究室に集まった。

華南はまた、個別面談の時のように、オロオロしていた。

「君のせいじゃない」と俺は言いきかせ、落ち着かせた。

それを言ったところで、効果は薄いだろうとは感じていた。

面談での内容自体、『今後の方針についていくか』に触れているのだからな。

正直、成績優秀者を派遣してきたならば、緊急の相談なんて設けなかっただろう。

そうでなくても、普通に頑張っている奴なら、ここまで問題にはしない。

華南だから、どうしても気にかけてしまう。

辛い、苦しいとはっきり告げられない、告げる事を許されなかった彼女だから、余計に心配してしまう。

面談で俺は、きっぱり言ったんだ。

「嫌ならやめていいぞ。」と。

彼女はすぐに首を振った。

ショートヘアの髪の毛も揺られていた。

「いいえ、大丈夫です。務めを果たさせてください。」

と懇求した。

目の前の女性に対して心配しがちな俺は、まだ納得できなかった。

新機体に乗せるなら、華南以外を乗せたい。

そう強く願っていた俺は、説得に拍車をかけた。

「人命を救う仕事なら、他にもある。」

軍隊に固執しなくてもいいだろう？

なぜ、卑劣な思いまでして戦い続けるんだ！

善人のままでいたら、いつかお前が壊れるぞ！」

俺は、いつもならあり得ないと疑う程の取り乱し方をしていた。

彼女は前線部隊に立つ人間。

命の保証ばかり気を取られるなんておかしいとは、自分でも認めていた。

でも、どうしても。

野放しにはしたくなかった。

だから彼女を怖がらせるよう、強く言ったのに。

俺の熱意は…彼女に伝わらなかった。

いや、一瞬だけ悲しげな表情を示したのだから、俺の説得は聞こえているのだろう。

彼女は否定した。

つくり笑顔を見せてまで。

「大丈夫です。私は乗れます。いいえ、私は乗りたいです。皆を守るのだから。」

俺は啞然とした。

未曾有の生物に遭遇した時と同じくらい、驚きで言葉を失った。

「もうええ。彼女を乗せる方向に進めようや。新たに人員確保するのも、時間を要するで？ここまで決心してるんや、今更断念してもらうのも、気の毒や。」

黒川の発言1つで、新機体の搭乗前の最終面談は終わった。

★★★

俺の、正規軍から派遣された女性に対する懸念が、顕著となる時が来た。

念願の《宇宙進出》。

夢が現実になる時が迫ってきた。

華南が[ラストコア]に来てから、9ヶ月は過ぎていた。

議論の場に参加して頂いた外部の研究者達の協力もあって、宇宙船内蔵のロケットが飛ばされる日が決定した。

内蔵というよりかは、大気圏を突破して宇宙に出た時にブースター等が外されるという装着型なのだが。

黒川の発言により、外部の研究者達は相当なダメージを受けただろう。

なのに、研究者達は俺達の依頼を引き受けてくれた。

こればかりは、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

《宇宙進出》当日。

運命のロケット発射の日。

内蔵の宇宙船に乗り込んだ主要人物は、西条司令、俺、黒川に華南である。

サブの者も含め、全員[ラストコア]のスタッフ達である。

ジェームズのみ、最悪の事態に備えて地球に残った。

宇宙へ旅立つ場合、生きて帰れない可能性もあるからだ。

現在の地位は事務局長のジェームズだが、ゆくゆくは[ラストコア]の総司令官の地位も確立する事になる。

無論、その時になると、西条司令の安否が不明な場合になるが。

宇宙へ上がる者達は全員、宇宙船内に搭乗している。

宇宙船はロケットの向きに合わせて、ブースター側を底面にして垂直に固定されている。

大気圏を抜けて宇宙空間へ突入するまで、専用として展開されたシートに着席しないとイケない。

ロケット発射時の取るべき体制については、事前に全員に説明されている。

乗る人乗らない人にかかわらずだ。

万が一の問題が発生した時の原因の特定にも繋がるからな。

外部からでも対策が打てるように。

乗る者は全員、専用のシートに着席し、ベルトで身体を固定した。

ゴツイ宇宙服も、外宇宙に出るまでは着用必須である。

臨時の酸素の補給装置も備えてある。

何か起きても、しばらくは生き延びれるように。

ロケットが宇宙に出るまでは、外部の研究者達が主となって活躍する。

発射台もロケット本体も、外部の研究機関から借りているからだ。

現在の「ラストコア」のように、当時は発射台の設置がなされていなかった。

うまく協力して、「ラストコア」の基地内にも発射台を設置できた。

繰り返しになるが、いくら黒川が毛嫌いしていても、協力してくれる外部の研究者達には文句を言えない。

下準備が整っただけでも、喜ばないといけない。

発射の時が迫った。

宇宙へ突き抜ける為の燃料が投入された。

ロケットに内蔵された宇宙船の乗組員全員に、緊張感が走った。

カウントダウン後の離陸時に不慮の事故が生じて、不時着する恐れがある。

運命の日が訪れる前に、何度も無人での発射実験を繰り返していた。

外宇宙への突入に成功したのはたったの2回だ。

同質量の宇宙船のダミーを飛ばす実験は、俺も研究室のモニター越しで見守っていた。

有人で飛ばすのは、今回が初めてだ。

今までは『0』として報告されていた犠牲者の数が、今回でようやくカウントされるに違いない。

発射実験の詳細を知る俺でも、今回ばかりは心の奥が痛んだ。

『発射5分前!』

カウントの合図だ。

シートにガチガチに固定されながらも、放送をよく聞き取った。

合図が出されると、もう後戻りは出来ない。

帰還まで、長期間の修羅場を乗り越えないといけないだろう。

『発射1分前!』

時間の目盛りは刻々と進んでいる。

俺や他の乗組員に、時計は見えない。

勝手なイメージでしか、時計は現れない。

だが、緊張感がヒタヒタと迫る感覚は、理解できる。

俺達は息を呑む事しか、できない。

『30秒前！…20秒前！』

カウントのアナウンスは止まらない。

ロケットが噴射して宇宙に登るまで、続くだろう。

誰も言葉を発しない。

冷や汗が目元から頬へ流れる感触を味わうだけだ。

『10秒前、9、8、7…』

そろそろだ。

シート下から、音や振動が伝わってくる。

発射の際の動力源が、作動したのだ。

ロケットのエンジンも着火し始めている。

『4、3、2、1…』

カウントは終わらない。

発射が迫っているのだから仕方がない。

おそらく、今の俺の思考している最中に、ロケットは空へ、宇宙へ登りつめていくだろう。

『発射！！』

カウントした者のアナウンスが強く響いた。

ロケットが浮上する。

シート下からの振動も激しくなった。

太ももにかかってくる押し上げの圧が、俺達に上昇している事を示した。

ロケットがジェット噴射で上昇している最中でも、誰1人無駄口を叩く事はなかった。

皆、無事に宇宙に行けるのを祈っているのだ。

〔ラストコア〕に絡む者のみが搭乗する宇宙船。

黒川以外、全員が初めての宇宙体験だ。

故に、初体験なもんだから、皆不安を抱えている。

成功するのか、と。

生還できるのか、と。

遠隔のアナウンスの指示に、今は従うしかない。

早く解放の合図を出して欲しいと、誰もが強く願っていた。

そして、固定解除の1歩手前の合図が出た。

『大気圏を脱出完了！部品の除去に移行します。もうしばらくお待ちください。』

乗組員の俺達は、ロケットの外側がどうなっているのかの把握ができない。

彼の音声だけが頼りだった。

ひとまず、宇宙に出るのは成功した。

あとは飛行上の運航に支障がないかの最終点検のみだ。

こちらも、外側から確認できる者しか、状態を把握する事ができない。

宇宙船に、ずっと待機している状態を維持するしかなかった。

でも、宇宙に出たならば、何の根拠もなく安心では…と俺は安易に考えていた。

異常が発生した時は、船内全域に警鐘を鳴らす。

エンジンの音のみの静かな空間がずっと続いてるなら、多分どうって事はないのかもしれない。

仮定は、確証に変わった。

宇宙船の向きを縦から横に、直角に動かす作業が行われた。

シートに固定された俺達が動く事なく。

作業が終わる時、ドーンという大きな音が響き渡る。

それに伴う揺れも発生していた。

《宇宙進出》目前の事前説明でこの衝撃が発生するのは聞いていた。

だから、特に気にしなかった。

一連の流れにおける最後のアナウンスが流れた。

『発射は成功しました。ベルトのロックを解除します。皆さん、シートから降りて、宇宙服を脱いで頂いても結構です。』

放送の後、乗組員達の一部からよっしゃ！と喜ぶ声が聞こえた。

宇宙服を脱いで暑がった者もいた。

暑がりの人間は真っ先に水分補給に向かっていった。

俺や司令、黒川に華南もシートから降りた。

宇宙服を脱いだ俺は、華南や黒川に水分補給を促した。

華南は「ありがとうございます。」と俺からボトルを受け取った。

黒川もお礼を述べて、同じように受け取った。

ただのスポーツドリンクに近い飲み物。

各自これを美味しい！と言って飲み干した。

未知なる世界である宇宙空間で、あまり物資を消費したくないが…。

〔ラストコア〕と外部の人々との成果を残す第1歩を踏み出せたんだ。

今は僅かな幸福を、周りの乗組員達と分かち合おうか。

短編13

挑戦の日

地球付近の宇宙空間まで飛んでいった俺達は、メインの場であるブリッジに向かった。

そこには戦艦らしく、突然の備えに対する機能が配置されていた。

外宇宙の様子を常に監視するオペレーター達は、すでに位置についていた。

俺=アレックス・ヘイリーと司令は華南に、宇宙の景色を鑑賞しておくといい、と話した。

華南は表情を明るくさせて、ブリッジの壁面の窓にへばりついた。

窓といっても、実際は特殊加工のカメラ映像のモニターではあるが。

宇宙の景色、地球を外側から見つめる経験は、黒川以外は初めて。

さらに言えば、大規模な投資までして計画を立てた《宇宙進出》。

今後、こういった鑑賞行為は減多にないであろう。

華南以外も、何名かは宇宙の神秘に見惚れていた。

業務の手を止める者もいたので、各々の隣のスタッフが注意していた。

司令も交代で休憩を挟むから、今は集中しろと指示を出した。

俺と黒川は、後ろで見届けるだけだった。

「眺めんでええんか？」

「何がだ？」

「お前も、宇宙は初めてやろ？」

「この距離からでも、はっきりと見えるからな…。」

俺がそう答えると、黒川は何も言わなかった。

黒髪の、俺より頭半分弱高い男は、別の話題に切り替えた。

「まだ、不安やろ？」

「…彼女か？」

黒川はこくりと頷いた。

「ここまで来てしまったんだ。今更後悔しても仕方ないだろう。」

「顔にめちゃくちゃ出てるんやけどな。」

「すまん。お前みたいにニヤニヤ笑う悪趣味は持っていないんだ。」

「営業スマイル、って言うてくれる方が有難いんやけど。」

「わかってるさ。本心は違う事ぐらいは。」

軽く受け流していたが、黒川の指摘は合っていた。

今回の《宇宙進出》の目的は、現在搭乗している宇宙船と、華南が操縦するロボ【ポーリアドール】の試運転の成功である。

滞在期間は、1～2週間程度と決めている。

物資は1ヶ月分は常備してはいるが、わざと多めに設定していた。

不慮の事故が起きても、命だけは繋ぎ止められるように。

試運転だけでどうか終わって、帰らせてほしい。

研究成果を期待しつつも、どこかでそう思っていた。

多分、自分の思念が強かったのだろう。

黒川が察したのだから。

黒川は鈍感そうに見えて、実際は敏感なタイプである。

他の些細な一面を気にしてしまう所があると、ジェームズからも聞いていた。

そうでなければ、迫り来る敵への対処もできないだろう。

外宇宙では11の星を滅ぼした【宇宙犯罪者】として、脅威の対象とされている黒川。

地球人の味方に今、彼がいるだけでも…嬉しかった。

安全とは言えなくても、多少の心の支えにはなってくれるから。

遠くで宇宙の景色とオペレーター達の業務状況を見守っていると。

1人が司令に報告し始めた。

どうやら彼は、奇妙な《浮遊物》を発見したようである。

どうしますか？と尋ねたオペレーター。

《浮遊物》に動きは全く見られない。

司令は、監視続行の指示を出して、その他の対策は講じなかった。

自分達の敵なのか、味方なのか…判別がつかなかったからである。

「…妙やなあ。」

黒川が呟いた。

俺はそれを聞き逃さなかった。

「わかるのか？」

「偵察機でも、探知機の類でもなく、『浮遊物』、やる？」

そうか…。

俺達は地球から宇宙へ飛び出たばかり。

未だ空間を自由に移動していない。

ならば、地球近辺の衛星かステーションぐらいいし、稼働していない筈なんだ。

謎の《浮遊物》なんて、存在しないんだ。

だが、オペレーターは《浮遊物》を発見した。

人間の体内を胃カメラで観察したような、気味の悪いピンク色の《浮遊物》。広大な宇宙でも、生物の内臓みたいな姿形の星は、地球では確認されていない。

ブリッジにいる者全てが、謎の《浮遊物》を注視した。

華南が、俺と黒川に聞いてきた。

「あの…。出撃の準備を進めた方が、いいのでしょうか？」

その様子は、俺達の表情を伺っている姿だった。

黒川のようなイレギュラーを除いて、[ラストコア]のスタッフの面々は、基本的に指揮下以外での勝手な行動は許されない。

前線に立つパイロットもそれは守ってもらっている。

華南の提案は、本当ならば飲みたい。

出撃準備を進めておけば、いざという時に対処しやすいからだ。

だが、俺には判断を下せなかった。

そもそも俺は研究者気質であって、軍人の素養はあまり持っていない。

その分野においてならば、華南の方が勝る。

他にも、この奇妙な《浮遊物》を、もっと観察したかった。

【ポーリアドール】で粉碎してもいいが、見逃すにはもったいなくて。

研究者の血が騒ぐのもあるのだが、もっと根本的な理由もある。

今まで衛星を打ち上げただけで遠くから観察していた宇宙。

それよりも間近で見られる今は、チャンスだった。

ここでできる範囲のデータ収集を行えば、後々の活動の発展に繋がるだろうと考えているからだ。

《宇宙進出》は今回限り、ではない。

予算と設備が乏しい中で、うまく飛ばせただけで。

俺は、俺達はしばらくの間、経過観察の状態で《浮遊物》に手を出さなかった。ただ単に《浮遊物》を発見しただけ。

他には何も行っていない。

気味の悪いピンク色の《浮遊物》に触れてもいない。

何もしていないのに、魔の手が伸びてきたんだ。

一瞬だけ、《浮遊物》は点滅するように光った。

その後、全方位から…直線状の触手がサッと出現した！

ブリッジの《浮遊物》を目視した誰もが、突発的な動作に反応した。

宇宙船内に止まっていると、パターンを読めずに回避行動を選択できなかった。

1番冷静なオペレーターが緊急用のレバーを取り出し、後ろに引いた。

物理的な回避の為に、独断で舵を取っていた。

幸い、左舷に触手が少し掠れただけで済んだ。

宇宙船が少々左に寄っていたら、動力室あたりが故障していたかもしれない。

最悪の場合、宇宙船そのものが沈下する恐れもあった…。

西条司令の動きは早かった。

「総員、防衛体制に入れ！バリアの強固を怠るな！敵の行動を隈なくチェックしろ！」

オペレーター達は目先のモニターとパネルに集中した。

警報のサイレンも、耳が痛くなりそうな位に鳴り響く。

各自、仕掛けてきた《浮遊物》の警戒の為に、慌ただしく動いた。

「こうなったら動けるようにせなあかん！行くで！華南！」

「は、はい！」

黒川に誘導されるように、華南はブリッジを出た。

2人とも駆け足で格納庫に向かった。

技術局長の俺は、ポケットから小型の無線機を取り出した。

通信先は、格納庫に繋がった。

「【ポーリアドール】の最終調整を急げ！先にA Iを数機送り出しておくんだ！華南はもうすぐ辿り着く！」

★★★

無線機で格納庫の整備士に連絡した俺も、華南達の後を追った。

華南が来たらコックピット内で待機させろという指示は、既に出している。

体力に自信のない俺だが、駆け足で格納庫に向かっていた。

愛嬌湾の底にある【ラストコア】本部の基地と異なり、宇宙船は狭かった。

エレベーターか梯子の移動は必須だったが。

ブリッジから直進して1階分降りるだけで、格納庫に辿り着いた。

「華南は乗れたか！」

「無事着席しました。ベルトの固定も完了しております。」

「あとは出るだけか…。」

俺が格納庫に向かったのは事実だが、実際の機体の保管場所までは降りていない。

真下の階である格納庫そのものは、ハッチの開閉がある以上、宇宙服が必要だからだ。

ロケット発射時のゴツイ服とは違って軽装だが、肌に吸着するのでどちらにしても着心地は悪い。

必要な装備だし、我慢をするしかない。

俺は直の格納庫より上の階に位置する、小さな制御室の強化ガラスから、機体達を見下ろした。

『アレックス！俺はいつでも出れるで！先に調査のつもりで向かう！』

ロボ形態【ブラッドガンナー】に変身した黒川が叫んだ。

「少し待て！【ポーリアドール】の状態を確認する！華南！」

俺はパイロットの名前を呼んだ。

華南はすんなりと俺の呼びかけに応じた。

『アレックスさん！』

「調子はどうだ？具合が悪くなったとかもないか！？」

『私に異常はありません！調整は滞っていますが…。』

「整備士、急げ！」

『急いできます！』

無意味だが、俺は自然と整備士に怒鳴った。

事態は深刻なんだ。早急に手を打たないと。

『焦ったらあかん。アレックス。』

「…！黒川…。」

『焦りは禁物や。冷静に隙を突かされただけでも、終わりが近づいてしまうんや。時間を要するんやったら、俺が先に稼いでくる。』

…やはり、黒川は先に小手調べとして向かいたかったようだ。

「すまない、焦りすぎてしまったようだ。」

『最初やからな。誰だって失態はある。それをカバーして乗り越えたらええだけや。せやから、ハッチ開いてくれ。丈夫なんは俺の方やから。』

黒川の提言を守ろうとした俺は、整備士とは別の作業員に指示を出した。

【ブラッドガンナー】を宇宙空間に放つ為に、ハッチを開いてもらう。

出撃を成功させる為、【ポーリアドール】の調整に携わった整備士も、格納庫内のガラス張りの個室に避難した。

『退避完了しました！ハッチ開きます！』

作業員の合図で、上下に開くハッチが動いた。

専用のスイッチを押すだけで、自動的に開閉してくれる仕組みになっている。

空気が存在する場所と、存在しないとされる空間。

内から外へ、暴風が流れていく。

ロボ形態の【ブラッドガンナー】は重量があったから、簡単に持っていける羽目にはならなかった。

背部のブースターとウィングのおかげで、【ブラッドガンナー】はすんなりと宇宙空間へ出た。

足裏のブースターも噴射して、スピードを上げていった。

【ポーリアドール】の微調整が済んでない為、ハッチは再び閉じられた。

ハッチが閉まり、正常な空気の流れを測定できた後に通信が入った。

担当の整備士からだ。

『アレックスさん、例の機体ですが…。』

「出撃させる。調整を急げ。」

『調整ですが…ほとんど終わらせています。出撃は可能ですが、如何いたしますか？』

「…いけるのか？」

『不安要素はありますが…試運転のような状態で出てもうしかありません。』

念の為、宇宙船の側から迎撃体制を取るよう指示を出します。』

整備士達の報告は出撃の可否の判断材料だ。

報告を聞きながらも、俺は制御室のモニターに目を通していた。

文字と数値の羅列。

現在の【ポーリアドール】の性能情報だ。

外観図からの損傷状況も、異常な数値の振れ幅も、問題なかった。

俺が気になるのは、華南の精神状態のみとなった。

「華南。今回線開けるな？」

制御室のマイクで彼女の名前を呼んだ。

たった1人の正規軍からの派遣者は、素直に回線に応じた。

『はい。大丈夫です。』

「いいか？整備士からも連絡入ったと思うが、宇宙に出ても船から離れないようにしろ。帰還する時の備えだ。攻防は主に黒川に頼ってくれればいい。アイツはあの手のプロだからな。」

『わかりました！』

「それと…調子はどうだ？気分が優れないとかは…。」

モニター越しの、ヘルメットもスーツも着用している華南は、下に視線を逸らしていた。

だがそれも束の間で、即座に俺との視線を合わせていた。

『私、この期間の為だけに、しっかりと休養も取りましたから！黒川さんの隣に立てるよう、努力します！』

「…そうか。」

華南は嬉々とした表情で俺の問いに答えていた。

前線を任せるしかないのだが、どうしても心は痛む。

俺は現在就いている職業を恨んでしまった。

何の意味もない。

単純に若い女性が戦場へ赴くのを見送る自分が憎いだけだ。

後悔を抱いても、何の成果も得られない。

宇宙まで来た以上、前をゆくしかない。

即座に閉じられたハッチの開放を求めた。

【ポーリアドール】の初の宇宙での稼働が、こんな緊急事態の時になってしまった。

黒川からある程度情報を収集していなかったら、もう少し焦っていた。

今でも多少の焦燥感はあるが。

ハッチの開閉を頻繁に行なうのは、作業員達にとっては負担がかかる。

指示を仰がなければいけないし、正常に作動するかを見張らないといけないのだ。

しかし、作業員達は無茶だとわかっていても、俺の指示に従った。

2度目の開放。

やはり暴風の勢いは弱まる事を知らない。

宇宙空間に出る仕組みは、変えていかないといけないと、俺は反省した。

今はただ、祈るしかない。

華南が、パイロットの女性が、無事に生還できる事を。

もちろん、【ブラッドガンナー】で先に調査している黒川もだ。

『【ポーリアドール】、行きます！』

華南は宣言すると、両手に握られたレバーを前に倒した。

レバーは相当重い為に、華南は歯を食いしばっていた。

うう〜、と唸る声が聞こえたから。

【ポーリアドール】も【ブラッドガンナー】同様、背部のブースターとウイングで浮遊できるようになる。

元々、黒川の身体検査を元に開発したロボだ。

外観は多少、似通ってしまう。

まあ、飛べれば問題はない。

機械は組み立てても、動かなければただのガラクタだ。

【ポーリアドール】の浮上は、【ブラッドガンナー】と比べたら非常にゆっくりだ。

暴風に流されるのを、耐えている証拠だろう。

格納庫の床からハッチまでの距離は、ロボの状態だと短い。

踏ん張れ、踏ん張るんだ。

宇宙に出たら、軽くなるんだ。

俺はパネルの縁にて、両手の指を絡ませていた。

自分の開発したロボの《宇宙進出》への、悲願の達成を願っていた。

【ポーリアドール】はハッチの縁スレスレまで、頭部を近づけていた。

暴風に耐えきれず、機体がスボッとハッチを潜った！

『わあっ！？』

「華南！？」

彼女の驚きに反応した俺は、名前を呼んでいた。

【ポーリアドール】は宇宙空間へ放たれるようにして、宇宙船から出た。

不安定な出撃のおかげで、機体が数回でんぐり返りをしていた。

『わ、わあっ！？』

『華南！？今行くで！』

様子のおかしい【ポーリアドール】の元へ、【ブラッドガンナー】が駆けつけた。

宇宙戦も長けている黒川は、スムーズに【ポーリアドール】の右腕を掴んだ。

【ポーリアドール】と【ブラッドガンナー】は、スケールの規格は同じであった。

腕を掴んで引っ張るだけで、【ポーリアドール】の回転は止まった。

『よお出たで？初陣やから不慣れなんはしゃあない。まずは漂う事優先や。あの敵は、俺に任しとき。』

『は、はい！』

黒川の前で華南は返事した。

ハキハキとした声を聞いて、酔った状態にはなっていなかったようだ。

俺は、フゥ、と息を吐いた。

彼女はまだ健在だとわかったからだ。

だが、今は始まったばかりだ。

黒川主導とはいえ、戦闘は始まっている。

【ポーリアドール】に構っている最中に、【ブラッドガンナー】は《浮遊物》に5回発砲していたようだ。

今度は、戦闘に生き延びるという、別の心配をしなくてはいけない。

俺は【ポーリアドール】の監視を怠らないよう、宇宙空間が映るモニターを真剣に見ていた。

短編14

動悸の日

1 番最初の奇襲以来、敵の《浮遊物》は宇宙船への攻撃は一切なかった。先に撃っていた【ブラッドガンナー】が、銃を駆使して注意を引き寄せていたのが、救いだった。

触手攻撃はすばしっこいので、回避を伴う運動も必須であった。

黒川の息は…上がっていなかった。

宇宙戦を経験しているからか、人間よりも強靱な身体を持つHRだからか。理由はどちらも当てはまるだろうが、まだ今の戦闘では耐えられる事は読めた。

黒川は、ヘマをしない限りは、落ちないと予想していた。

俺=アレックス・ヘイリーが心配りしないといけないのは、華南である。

【ポーリアドール】は無事、宇宙空間に放たれた。

華南はきちんとモニター上の数値をチェックし、逐一報告してくれている。別ウインドウで開いた計測値の目安データと照合作業に取り掛かっていた。戦闘の最中だし、そんな暇はない。

黒川の立ち回りのおかげで、有効活用させてもらっているだけだ。

華南が読み上げた数値は、目安データの範囲内に収まっていた。

「これなら…しばらくは維持できるだろう。華南、なるべく船から離れないようにしろ。攻撃は黒川の指示に従ってくれ。奴には武装の種類を叩き込んでやるからな。」

まずはバリアで防御力を強化しろ。」

俺はありったけの指示を華南に告げた。

『わかりました！』

華南の返事は、変わらずハキハキとしていて、心地よかった。

正規軍が彼女を見捨てたのが逆に、腹が立つ程には。

今、矛先を向けるべきは《浮遊物》だ。

正規軍への不満は、後からぶつければいい。

俺は制御室から入手できる範囲で、【ブラッドガンナー】と《浮遊物》の戦闘の状況の把握に努めた。

《浮遊物》については…強気だったのは初回の攻撃だけのようだった。

【ブラッドガンナー】の銃弾が多く撃ち込まれた事により、《浮遊物》は徐々に力を弱まっていった。

ただ、黒川から俺、ブリッジで指示を出す西条司令へと、報告があった。

『《浮遊物》の背後に、細かい装置が付いとるな。どうやら偵察の類かもしれへん。赤い光がチカチカしとるだけやからな…詳細は分かれへん。』

どうする？俺は即破壊したいんやけど？

黒川の提案だった。

赤い光点が、宇宙船から目の届かない背後で点滅しているだけ…。

特徴といえばそれだけなのに、黒川は『監視されているだろう』と推測していた。

俺は黒川の推測は、あながち間違いではないという判断だった。

本来ならば塊の一部だけ分解して、地球に持ち帰ってじっくり研究したかったが…。

何かに監視されているとなれば、自分達の身が危ない。

『私は一向に構わない。宇宙の知識は、お前の方が優れている。私よりもアレックスが、残しておきたいのでは？』

西条司令が自然と、俺に意見を委ねた。

1 研究者であり、技術局長だから、司令が俺に目を向けるのは当然の事だ。

司令が振ったので、黒川も俺に声をかけるだろう。

その前に俺が自ら、宣言した。

「画像データでも保存できれば、十分な収穫だ。安全を第一に確保してほしい。潰してくれ。」

『わかった、遠慮なく潰させてもらうわ。』

と黒川は答えた。

だが彼は銃口を《浮遊物》に向けて発砲を…実行しなかった。

【ブラッドガンナー】はあと少しだけ、距離を離していた。

俺はん？と疑ってしまった。

制御室で宇宙の映像も、簡易的な位置情報のレーダーも随時確認しているからだ。

始末する気満々の黒川が、迅速に《浮遊物》を仕留めないのには、違和感を覚えた。

【ブラッドガンナー】は一定の位置で移動をやめて、宇宙船に2点のカメラアイを向けた。

正確には、【ブラッドガンナー】の視線の先は、【ポーリアドール】に固定されていた。

その後の行動を、俺はなんとなく読めた。

黒川はきっと、華南に《浮遊物》へのトドメを刺させようとしている。

【ポーリアドール】の武装の試運転を兼ねて。

予想は、当たった。

『華南！ちゃんと声、聞き取れるか！』

黒川が叫んだ。

宇宙は基本、音を鳴らすのは不可能だが、黒川にはマイク付きの補聴器を持たせているので音声の心配はない。

マイク付きだから、思いっきり叫ぶ必要はない。

音量を上げて、華南に気合でも入れるつもりなんだろうと、俺は勝手に思っていた。

当の呼ばれた本人は、慌てながらもすぐに返事をした。

『はい！聞こえてます！』

『そうか！せやったら、1回試しにビームでも放とうか？今の敵やったら、未熟な華南でも倒せる。』

『わかりました！』

黒川はビーム砲による攻撃を指定した。

華南はそれに応えた。

ビーム砲は、両手で支えながら操作する縦長の武装になるが、【ポーリアドール】の背部に3分割された状態で収納されている。

使用する時に組み立てて、ビームを発射させる構造だ。

長さが【ポーリアドール】の全長と同じだから、コンパクトにせざるを得なかった。

『ビーム砲、装着します！』

華南の掛け声と共に、【ポーリアドール】の背部のカバーが開かれた。

ビーム砲の3つの部位が、勢いよく宇宙へ飛ばされる。

【ポーリアドール】の手の介入もなく、自動的に大砲の姿へと組み立てられる。

ビーム砲はグリップ部分を下に向けて、【ポーリアドール】の右手にフィットするように降りた。

片手では重い為、後から左手で右手を覆い、後部は右肩に乗せた。

照準合わせのスコープもスライド式で出現し、残るは発射を成功させて仕留めるだけだった。

華南の体調も万全だ、と認められたから送り出したのに。

俺は、違和感を覚えた。

いや、注意深い人ならば、誰でも感じ取るかもしれない。

彼女の掛け声に続いた、無意識な声を聞き取れば。

『いきます！……っう！？』

それはほんの僅かに、音量を計測する計器を乱れさせた。

計器自体は正常で、正確に測定している。

やっぱり、彼女の身に何かが起きている。

「華南！？」

『大丈夫です！……はあ、はあ…。』

華南は続行の意を示していた。

しかし、通信の音声はまだ途絶えていない。

その後に続く彼女の吐息も、はっきりと聞き取れた。

細胞分裂と破壊で拡張と縮小できる生命体のHRとは違い、【ポーリアドール】は機械の乗り物だ。

黒川の身体構造を参考にはしたもの、外側の装甲、内側のエネルギーやエンジンなどは全て、地球上の物質で賄っている。

機体は大型であり、パイロットの負荷は普通の乗り物よりもかかる。

いくら訓練された正規軍の人間とはいえ、華南は女性だ。

身体的構造、筋力や体力には、鍛え抜かれた男性相手だと劣ってしまう。

大雑把な確認しか取れてないが、異変の可能性があるなら止めに入った方がいい。

俺は一時中断の合図を出そうとした。

華南がビーム砲の発射に着手しているのに、中止の合図なんて遅すぎた。

彼女はコックピットの中で、メットも着用した状態で、呼吸を荒くしている。

これで照準が合うはずがない。

合図を出せない状態に陥られた俺は、1発目を無事に発射させた後に中止をかける企てをした。

最悪、《浮遊物》が生き延びたのなら、黒川に処理を要求するしかない。

全員生存して、地球に帰るのも目標だ。

『ビーム砲、発射します！』

『発射！ でええよ！』

華南に黒川からの指摘が入った。

切迫した状況まで敬語で話していたら、キリがないからだろう。

華南の掛け声の後、ビーム砲の銃口が灯る。

やがて光は直視できなくなるまで、眩しく輝いた。

【ポーリアドール】の淡い紫色のボディから程遠い、明るくて白い光。

光が1玉の競技用のボールとなって、前へ一直線に放たれた。

曲がり角が一切ない、長い棒を形成するかのように、ビームの光は鮮明に現れていた。

華南が過呼吸気味になりながらも、照準を合わせていれば《浮遊物》に届く。

ビームの威力は実験のデータでは、地球の硬い地面でもかなりの大穴を開けられるとの結果が出た。

【ブラッドガンナー】の銃弾が相当貫通しているあたり、威力の高いビーム砲ならば1度に焼き尽くすだろう。

照準合わせ以外、俺はビーム砲の異常については気に留めなかった。

ビームの光の輝きは強烈で、まともに直視できない。

俺も後ろに付いていた作業員も、モニターの光を目に入らないよう、頭を伏せていた。

光の余波として照らされたパネルの台や大きめのタイル状のグレーの床を見つめる方が、楽だった。

ビームを放つのは【ポーリアドール】だけ。

一瞬で終わる。

俺の推測通り、ビームの光は徐々に弱まっていった。

手で覆ったまま、俺と作業員は顔をゆっくりと上げる。

モニターの光で目眩を起こさないよう、可視できる箇所を探しながら。

手間をかけさせる行動は、省けたが。

モニター画面を直視しても失明しないと判断した俺達は、すぐに手を退けた。

ビーム発射後の、周りの宇宙空間がどうなっているのか、早急に確認した。

《浮遊物》の存在の有無なんて、地図データでもキャッチできる。

だが俺は、映像を通してではあるが、現在の宇宙空間をこの目に焼き付けたかった。

無駄な行為をしていると、自他共に認めても。

俺は何回もパネルをタッチしていき、モニター画面を切り替えた。

複数のカメラアングルが展開されるモニター画面。

《浮遊物》の姿を探し出すが、どのアングルにも気味の悪いピンクの物体はなかった。

「地図データとの照合をしておりますが…今のところは形跡はありませんね。」

俺は作業員に地図データの照合を急がせていた。

彼は専門外なので、ブリッジの者と連携しろと注意した。

「【ポーリアドール】と【ブラッドガンナー】は残っている。これは合致しているな？」

「はい。2人とも生き残ってます。」

そうか、と答えた俺は、胸を撫で下ろした。

パイロットは無事だと判明したからだ。

だからと言って、油断はできない。

《浮遊物》の存在の消滅が確定しなければ、黒川と華南を帰還させるわけにはいかない。

なんとか適当な理由をつけて、華南に帰還を命じたいのだが。

ブリッジからの通信が入った。

西条司令が自ら、俺に開通を求めた。

俺は普通に承諾して、回線を開いた。

『アレックス、今大丈夫か？オペレーターからの報告だ。《浮遊物》は完全に消滅したと確認できた。おそらく、ビーム砲の攻撃で焼失したのだろう。』

「司令の推測通りだ。俺は地図データの照合を任せて、映像を隈なくチェックした。」

『かけらも残されてないか？』

「全て溶けてなくなった可能性が高いな。」

『実際の映像で形跡がないのならば、そうだろうな。』

司令は俺の調査の仕方については、何も口出ししなかった。

うん、うんと頷くだけで済んだ。

話は切り替わった。

司令が俺に、目先のやるべき事を示唆した。

『アレックス。華南を戻せ。』

「それは検討している。」

『報告は聞いた。【ポーリアドール】には課題点が多いようだな。』

「まだまだ改善の余地はある。武装の展開は乏しいが、宇宙での試運転が成功しただけでもよしとしたい。」

『そうだ。今はそれでいい。』

司令は俺を咎める発言はしなかった。

やはりこの上司も、たった1人の正規軍からの派遣者の身を案じている。

司令も元々は正規軍の出身だから、同郷の人間をつい心配するのだろう。

ただ、これで華南の帰還への口実ができたのも事実だ。

俺は即座に華南へ連絡を入れようとした。

パネルの操作のみで、簡単に【ポーリアドール】と通信が繋がるのだが。

その動作は、側にいた作業員によって妨げられた。

作業員は消滅確定後も、ブリッジとの回線を開いたままだった。

この時、回線越しにオペレーターの声が聞こえた。

『何らかの大群が、接近してきます！』

『まだ控えていたのか！』

『それが…まだ映像が特定できず…！』

『追跡急げ！』

司令とオペレーター達のやり取りの後、2度目のサイレンが鳴った。

警報灯も赤く点滅を繰り返す。

「くっ、タイミングを逃したか！」

『どうやらアレは、囷やったんや！』

黒川からの通信だった。

『あの《浮遊物》の背部に何か仕掛けとる言ったやろ！お仲間さんが嗅ぎつけてきたんや！』

「…様子を見るべきだったのか？」

『仕留めて正解や。せやけど、もう少し早めたらよかったんやろうなあ。まあ、1番初めに攻めて来た時点で周りを見なあかんかったわ。』

黒川の言う通りだ。

いくら初の《宇宙進出》、初の【ポーリアドール】の試運転で戦闘は控えめにするにしても、宇宙船の周りは常に監視しなければならなかった。

華南と【ポーリアドール】に気を取られ、他の事を完全に後回しにしていた。

これは失態だ。

落胆して両目を手のひらで覆った俺。

俺の発言を察したのか、黒川は叱るよりも励ます方向へ持っていった。

『相手が悪いだけや。気落ちせんでええよ？華南の様子がおかしい。お前のA Iと変わってやってくれへんか？』

「お前単独で大群に挑むんだぞ！」

『俺はHRや、後でカメラアイの映像飛ばすけど、遠目で見たら小粒の敵が大量に襲ってきたとしか思えへん。悪いんやけど、急いで華南を匿ってやってくれ！』

モニター画面の映像から、【ブラッドガンナー】が謎の敵の大群へと向かって行った。

「ブリッジの方で映像データが発掘されました、回しますね！」

「了解だ。船外に固まったA Iと船内の予備A Iを、敵の方向に飛ばす。方角は？」

「4時の方向に拠点があります。」

「やや背後の位置から狙おうという魂胆か…。」

俺は幾度目かのパネル操作と音声による制御を行い、予備のA Iをハッチ前に整列させた。

宇宙船にへばりついていた外のA Iには、先に黒川の援護に向かうよう命令を出した。

まずは【ポーリアドール】を安全に帰らせる為の工夫だ。

機体を収容して、微調整中に華南を休ませるんだ。

俺もA Iでの支援に、今は力を尽くすのみだ。

短編15

天翔の日

新たな敵の大群の映像が、ブリッジから飛んできた。

遠くからキャッチした映像だから、敵の口ボらしき個体は数センチ程度にしか見えなかった。

だが、数量のおおよそは把握できた。

映像1つだけでも、ざっと20体は確認できた。

宇宙へ上がる前、黒川は、

『敵の大群が襲ってきたんやったら、100人はおおと思わなあかん。特にHRに至ってはな。』

と教えてくれた。

大群の先頭に、【ブラッドガンナー】が突っ込んだ。

【ブラッドガンナー】は両手に銃を構えて、乱射した。

《浮遊物》の時点で控えていた俺のA1も、敵の前線まで進んだ。

大群は【ブラッドガンナー】に気を取られている。

よし、今なら引き返せる。

俺は華南との回線を繋いだ。

回線自体に、障害は起きてなかった。

「華南、アレックスだ！聞こえるか！」

俺は懸命に叫んだ。

華南に俺の声が、届くように。

【ポーリアドール】のコックピット内は、こちらのモニター画面にも映し出されている。

華南がシートに深々と座っている様子が見受けられた。

下を向いて、ぐったりしていて疲労が蓄積されているようだった。

これは急いで回収せねば。

俺は再度、華南に呼びかけた。

「華南！今【ブラッドガンナー】が敵を退けようとしている！今のうちに船へ戻るんだ！」

『……敵？』

それが、華南からの久しぶりの声だった。

これだけでも、彼女の身が保たないだろう事は、把握できた。

「ああ、今接近している！だが、お前が対応しなくてもいい！

【ポーリアドール】の調整も行いたい！動けるか？」

『…敵、が来てるんですね？』

華南が2度も俺に尋ねてきた。

俺は、様子がおかしいと感じた。

だが回収を急がせたかった俺は、まずは目先の作業を終わらせてかった。

「まさか華南、先程のビーム砲でエネルギーを使い果たしたか！？帰れる状態じゃないな？待っている、今すぐ後続のA1を…。」

『敵が、接近、して来てるんですね！』

「…え？」

俺が動揺の声を漏らした、次の瞬間。

ボウッ！と地上ならそんな大きな音がしたかもしれない。

【ポーリアドール】が、何かの力に目覚めたような、そんな気を起こさせていた。

【ポーリアドール】の機体の所々に入った薄紫のラインが、光った。

そこまでなら、俺の許容範囲だったのに。

彼女は…はみ出してしまった。

光出した瞬間、【ポーリアドール】が移動を開始した。

宇宙船へ帰還するのか…という期待は、裏切られてしまった。

なんと、【ポーリアドール】は、敵の大群に向かって突撃したのだ！

流れ星よりも原型を残していない、と驚いてしまう程の超高速のスピードを出して。

宇宙船とは逆方向へ進んだ【ポーリアドール】を見て、俺は咄嗟に声を荒げた。

「方向が違うぞ華南！地図を、地図を見ろ！宇宙船は健在だぞ！」

単に戻れ、と言ってもよかったが、場所がわからなければ意味がない。

地図データはさほど電力を消費しない。

【ポーリアドール】自体生きているなら、地図データは使える筈なんだ。

自力で戻れそうなら、データを活用しろと言ったのに。

俺の取った行動は、無意味だった。

華南を宇宙船に戻す為のアプローチが、必要だったのだ。

地図の活用意識を促す程度で、彼女は変えられない。

これは緊急を要した。

【ポーリアドール】が、暴走を起こしている。

機体の両手には、刃を細長いビームライトで出来た剣を1本ずつ握られていた。

めまぐるしいスピードで敵を薙ぎ払っていくので、武装の情報を追うのに時間がかかった。

本来ならば、敵を次々と撃破している姿を賞賛したいところではある。

華南の調子が優れているのだったら、だ。

ビーム砲の発射時、彼女は度々呼吸を繰り返していた。

こまめにリズムを打ち込む、速めのペースで。

【ポーリアドール】からの通信は、別回線では繋げていたから、呼吸の乱れを把握できたんだ。

もっと強く、止めないと。

「戻れ華南！今の体調で無理をするな！」

『敵が来ているんですよ！？ここで撤退したら宇宙船が爆破されます！』

「【ブラッドガンナー】が既に囷になっている！お前は無理に出なくてもいい！まだまだ調整が必要なんだ！一旦戻れ！」

『できません！』

華南は強く言い放った。

【ポーリアドール】の全身を、淡い紫の球体が包み込む。

球体っぽく見えるが、実際は面の枚数の多い多面体だ。

正五角形と正六角形を組み合わせてできた、サッカーボールのような多面体は、『フラーレスト』と名付けた。

『フラーレスト』は60個の頂点ビットを光線で繋いでいき、多面体を形成する。

【ポーリアドール】のバリアにもなり、ビットから射出されるビームの拡散で攻撃もできる。

威力は調整できるのだが。

拡散ビームの明暗具合で、威力の程度がざっくりと判別できる。

強烈だった。

目を離してしばらく瞼を閉じていても跡が残るぐらいには。

いや、それ以上だろう。

手の甲で遮る必要があったから。

『フラーレスト』が【ポーリアドール】の全武装の中でも、変幻自在の強大な迫力を引き出す武装ではあるが。

俺の衝撃は、もう1点あった。

華南本人が、『フラーレスト』を使いこなしている高い熟練度に関してだ。

今回が初陣という事もあり、華南には【ポーリアドール】の操縦の全てを熟知していない。

訓練も実施はしたのだが、仮想シミュレーションによるゲーム形式と、手足を軽く動かす点検ぐらいである。

本格的な実戦投与の経験はゼロだ。

最高威力かつ、高難易度な展開作業を必要とする『フラーレスト』を、華南は使いこなしていた。

敵の大群との差は、圧倒的に開いた。

『フラーレスト』の全方位に向けたビームは、あらゆるロボの胴体を貫いた。的にされた大群のロボ達は全て、爆散した。

この敵の大群のロボ達が黒川と同じHRかは未だ判別がついていない。

【ブラッドガンナー】は大群内の他のロボを仕留めるのに精一杯で、こちらに報告を寄越せていない。

どちらにせよ、敵と判断してしまうと、俺達は臨戦体制を取らなければならないのには変わらない。

数が多くなければ、我慢すればよかったのに。

【ポーリアドール】は、2度目の《フラーレスト》を展開しようとしていた。サッカーボール状の球体もどきが固定化されると、それが【ポーリアドール】の超強力なバリアとなる。

ラベンダーと同じ紫色の大型ロボは、無敵状態へと変化を遂げる。機体やパイロットを守りながら戦闘に挑めるので、捉え方に寄れば楽に戦えると思えるだろう。

エネルギーの大量消費問題が、解決すればの話だが。

【ポーリアドール】、後の【パスティユ】シリーズでも共通するのだが、エネルギーが完全に消耗すると…機体そのものが動かなくなる。

宇宙空間だと、ただ浮いているだけのガラクタ同様になってしまう。

A1に引っ張ってもらって回収、するにも時間を要する。

敵と戦闘に入っている状態ならば、作業中に撃墜、という最悪の事態だってあり得るのだ。

是が非でも、彼女の意識を変えてもらわねば。

単純に帰還指示を出すだけでは、叶わない。

彼女の心を揺さぶるような、力強い言葉が必要だ。

俺は、鬼にならなければいけない時が来たようだ。

つまりは、彼女への否定だ。

彼女が今やっている行動は…。

「いい加減にしろ！お前がやっている事は残虐行為だ！決して救済活動ではない！逆にお前は誰かを傷つけてるんだぞ！虐めているんだぞ！自分にしてきた加害者と同じ道を辿ってもいいのか！」

俺が出せる最大限の大声で吐き出した後、通信越しに彼女の吐息が聞こえた。

どうやら、俺の言い聞かせは届いたようだ。

あとは華南の意志で、踏み止まってくれる事を願うだけだ。

こればかりは…同乗していない俺には、どうする事もできない。

パイロットの心変わりで、機体も戦況も大きく変化する。

彼女が納得して戻るのを期待した。

結果は、的外れだった。

いつの間にか3度目に移行していた《フラーレスト》を展開しながら、華南は逆上した。

『だったら！一体誰がこれを食い止めるんですか！？いつまでも助けを待っていればいいと、悠長な事考えてたらいいいんですか！？そんなの、無理よ！私には、耐えられない！』

「周りをよく見ろ！【ブラッドガンナー】もAも飛び回っている！お前が必要以上に背負わなくてもいい！」

『指を咥えてみてろって事ですか！私は手を出してはいけないって！私には、人助けのできる人間じゃないって、否定するんですか！』

彼女の心境が、負の方向へ変化している…！

【ポーリアドール】の不具合は、華南1人の責任ではない。

ただ単に彼女は、『人助け』と偽る破壊活動の中止を、頑なに拒んでいるんだ。その認識を、改めてもらわねば…！

「華南！君は十分に人を助けている！逆に庇いすぎているくらいだ！

ここまでしなくても、『人助け』の機会は幾らでもある！今でも、君の代わりになってくれる者がいる！

だから、戻ってこい！」

おそらく俺は、自覚しているのかは不明だったが…。

今まで生きてきた20年あまりの人生で、1番声を出していた。

華南の、たった1人の正規軍からの派遣者に対して、重い感情を抱いていた。

もう、気づいてもいい頃合いなのに。

彼女は、クククと笑った。

安心感に包まれた時の穏やかな微笑みとは、別の笑い方だった。

モニター越しでチェックしている俺の背筋が凍る。

恐喝するタイプじゃない、むしろ不安になるくらい謙虚すぎる華南。

この恐怖は、一体何か？

華南の言葉によって、具現化された。

『じゃあ、一体誰が代わりにしてくれるのよ！

武人さんが？ A I が？ 違う！ 誰も代わりになんてなってくれない！

武人さんは参加するように持っていったるし、A I は期待できない。

私の代わりなんて、いないのよ！』

華南は息をゼエゼエ吐きながらも、ありったけの思いをぶちまけた。

『今までの正規軍もそう、私は被害者を助けただけ。なのに、卑劣な仕打ちを受けた。

だけど、「人助けをしたい」という希望を叶える為に、ずっと耐えていた。正規軍内では、重要な任務をさせて貰えなくて、心の底でずっと泣いていた。』

華南の呼吸の速度が高まった。

『嫌われ者の【ラストコア】への派遣の際は、左遷かな…と限界を感じていた。自分の役割を果たせないだろう、とひどく落ち込んだ。でも、【ポーリアドール】に出会えて嬉しかった。これで人々を救えるんだ、と私には感じたんだ。』

今私は、幸せなの。幼い頃憧れた英雄になれるから…！

最後の彼女の言葉を聞いた俺の身体が、勝手に動いていた。

向きは、制御室のドアに固定された。

「待ってください！どこに行くんですか！」

近くの作業員が俺の身体をホールドした。

「離せ！格納庫に予備の機体が幾らかあるだろう！スーツを着用して出る！」

「無茶です！戦火の渦に飛び込むようなもんですよ！」

「華南を力づくでも戻せるなら…！」

「落ち着いてください！」

作業員の腕力は、俺の倍近くあった。いとも簡単に振り解けなかった。

ガン！と背中を強く押し付けられた。

手首を押さえつけられて、脚も跨げないよう俺を挟む形で壁につま先をつけた。

鏡がないので顔色の認識はできなかったが、怒りで真っ赤だろう。

息も普段よりも小刻みに吐いている。

【ラストコア】での活動を研究者稼業に注ぎ込んでいる俺が、ロボに乗って華南に近づくのは至難の業だった。

モニターが視界に入っていた。

《フラールレスト》の光の強弱が緩まっている。

そこに、【ブラッドガンナー】が近づいた。

『アレックスの言う通りにするんや、華南。バリアは展開したままでかめへんから、このまま宇宙船に戻るんや。敵の数は大分減っとる。俺に任せれば十分や。』

『でも、まだ残っているんですよ？』

補聴器で一部始終を聞いていた黒川が、華南への説得を行った。

地図データに目を逸らすと、なるほど、初期の段階よりは減少していた。

赤い光の点がまばらにチラついている状態だった。

これならば、黒川でなくてもAIで処理できるかもしれない。

ならば【ブラッドガンナー】と2体で切り抜けて、宇宙船に帰れば彼女は生き延びる。

そうだ、この手段を選択しよう。

俺は作業員に一言謝罪して、手足を退けてもらった。

華南ではなく、黒川に連絡を入れようと決めた、時だった。

《フラールレスト》の光の強弱が緩くなった原因には、2つある。

1つは、準備段階の状態であり、この場合は攻撃体制に入ると再度明るさを取り戻す。

防戦用のバリアを張る時もそうである。

もう1つが…厄介だった。

60基もある頂点ビットの、欠如だった。

《フラーレスト》は全頂点が繋がって始めて、爆発的な威力を発揮する。

1基でも欠けてしまうと、《フラーレスト》は衰弱化してしまう。

欠如した箇所が黒川でも見抜けなかった背後の腰の下だと知ったのは、後日の調査だった。

1基が欠けた箇所には、穴ができる。

そこだけは…敵の攻撃が貫通できる突破口だった。

華南も、黒川も、目先の戦闘に気を取られて、やや傾いた直線のビームに気が付かなかった。

この1撃が、【ポーリアドール】の胴体部分を溶かした。

【ポーリアドール】は機械である。

熱に触れると接続部の隙間から放電が伴う。

溶けた部分から引火が始まり、機体全体を駆け巡る。

《フラーレスト》も維持できず、バリアの光は点滅を繰り返した。

そして、俺にとっても、[ラストコア]にとっても、最悪の悲劇を目の当たりにしてしまった。

【ポーリアドール】の回線が。

華南の意識が…途絶えた。

《フラーレスト》の頂点ビットに覆われた状態で爆散したのだ。

モニター映像は、惨劇の様子を最初から最後まで映し出していた。

俺は戦争映画のワンシーンの如く、悲痛な叫びを放った。

「華南ー！！！」

炎の中に飲まれた女性の名を叫んだ後、俺は膝をついて、顔を伏せて号泣した。

★★★

【ポーリアドール】が脅威な存在と見なしたであろう敵が、抹消後は撤退を開始した。

生き残っている【ブラッドガンナー】とA I ロボから、敵の大群は遠ざかっていった。

攻撃の意思がないと判明した途端に、こちら側の勢力も船に帰還した。

これ以上の滞在は困難だとして、緊急の地球降下が即座に決まった。

西条司令が地上のジェームズと交渉して、着陸の準備を整えてもらった。

宇宙船を横向きの状態にし、大気圏突入用にカバーを全開にして、一気に降りていった。

宇宙船は見事に、太平洋の海面に着水した。

【ポーリアドール】は、華南は…後日の回収作業用のロケットを飛ばして、拾いに行くという。

俺たちの緊急降下ですら1ヶ月はかかったから、機体の残骸が戻って来るのには2～3ヶ月かかるだろう。

残骸は拾い上げたとしても…華南は、もう…。

しばらく俺は、引きこもりになっていた。何をするにも、やる気が起きなかった。

ジェームズが気にかけてくれて、研究室に来れば、俺の話に付き合ってくれた。

それと引き換えに、彼は俺に新情報を持ってきてくれた。

黒川とジェームズが、華南の扱いについて正規軍に抗議したのだ。

『誰の声にも貸さずに狂うほど人格に支障が出てしまったのは、お前達の仕打ちを受けたからだ』と。

しかし、正規軍は聞く耳を持たず、鼻で笑うだけだったと…。

最後の最後で、彼女の居場所はなかったのだろう。

ジェームズの話を知っているだけで、心が痛んだ。

時の流れに身を委ねるように生きてきてから3ヶ月後、[ラストコア]に機体の残骸が届けられた。

光沢のあったピカピカの紫色は、焦げて皺くちやに変形していた。

【ブラッドガンナー】と変わらない全長と少し重い質量がステータスの【ポーリアドール】は、紫の金属の岩のような塊への変貌ぶりを見せた。

回収作業員達が集めたのは、格納庫で並べられた【ポーリアドール】の部位だった欠片で全部だった。

華南は…骨ですらも燃え尽くして、人によっては吐き気がするぐらいの惨めな醜体と化していたと聞いた。

作業員の1人が、白く綺麗な箱を運んでいた。

お腹周りぐらいのサイズの箱の中に、彼女の遺し物が入っていた。

日本人の弔いに関するしきたりとして、この形を取ったようだ。

作業員が誰に箱を渡そうか、悩んでいた。

すると、黒川が俺に目配せをした。

「アレックスに、渡してやるんや。」と。

作業員の足は、俺の元へ歩んでいった。

あと50センチの所で立ち止まり、作業員は箱を俺の前に出した。

「…どうぞ。」

作業員は女性だった。箱の底面の端を両手で持っていた。

最初、俺は戸惑った。

たった1年弱の面識しかない俺に、受け取る権利があるのか不安で。

だが作業員はその場から動かなかった。

俺は一言、質問でもしようかと模索していた。

考え込んでいる最中に、また黒川が発言した。

「受け取るとき、アレックス。お前はようサポートしてたで？」

「…いいのか？」

「お前は深い悲しみから、中々立ち直りにくいと思う。せやけど、ずっと後悔したまんまやったら、何も変われへんで。

お前の勇気を出す為にも、これを大事に保管しとくんや。」

それを聞いた俺は、スッと両手を伸ばしていた。

白い箱の底面を持ったのを確認した作業員は、両手を離した。

俺は箱を胸元まで引き寄せた。

薄い模様が光る白い箱。

だけど、中身は華南の…。

俺は、大粒の涙をこぼしていた。

涙は箱の天面にポタ、ポタ、と落ちていった。

涙は膨れ上がり、目の前の視界がぐちゃぐちゃになった。

「か、なん…。」

俺は普段よりも濁らせた声で、彼女の名前を呼んだ。

箱を右腕に抱えて、白衣の左腕の袖で、涙を拭った。

ううっ、と咽び泣く声も出していた。

ああ、そうだ。

俺にはまだ試練が残されているんだ。

彼女が消えても、戦いは終わっていない。

今回の《宇宙進出》の試みで、改善点は幾つもあった。

これらを直す目的でも、俺は立ち直らなければならない。

彼女の消失で感傷に浸ったまま終わるのはダメだ。

彼女の消失を無駄にしないように、地球と、宇宙の安寧を考えるのが先決なんだ。

華南。お前は宇宙より遠い彼方で、見定めてくれ。

俺の、努力を。

短編16

逃走の日

体が大きい。

その特徴だけで、周りの者達が『強い』と判断しがちである。

実際に観察していけば…期待よりも遥かに『弱い』生物と判明した実績もある。

言葉を交わさなければ、各々の生物は中身の区別がつかない。

判断材料が、外見のみに絞られてしまう。

体が大きい。

それだけで『性』の区別をつけない者もある。

大きいだけの、『メス』なのに。

★★★

木星圏フォトム。

木星という、太陽系では太陽を除いて一番大きい惑星の圏域の星。

惑星の大きさに比例するように、民達の体型も大きかった。

性の区別関係なしに。

私も種族柄、他星の《メス》の子供と比べたら、やや体格に幅があると言われてきた。

それは出港口のある街の商店に雇われていて、他星人とよくすれ違うから理解できるんだ。

ずっと同じ種族の生物達と固まっていれば、違いは気づきにくい。

同郷の《オス》の民達の体格は、私より一回り大きい。

見下ろされると、得体の知れない恐怖を感じてしまう。

《メス》の私達でも怯えるのだから、小柄な他星人だと威圧感に耐えきれないだろう。

時は『静止』の概念を知らずに、刻々と進んでいく。

私は毎日、商店の雇われ者として、店主にこき使われていた。

店主はフォトムの《オス》であり、やはり怪物みたいに巨体の姿をしていた。

フォトムの《オス》はとりわけ気性の荒い生物として宇宙では知られ、暴力的な振る舞いは同郷の《メス》や他星人達を脅かした。

私も数えきれない程、《オス》の店主に叩かれたり、蹴られたりした。

皮膚が割れて血が出ても、お構いなく暴走をやめなかった。

私はHRという、噂の禁忌の生命体ではない。

単純に、自分の両親を失っただけの孤児である。

所謂成人者の後ろ盾のない子供だから、店主とその奥さんが親代わりだった。

他に身寄りがないから、彼らの躰を咎める者はいなかった。

だから、《オス》の店主に暴力を振るわれたり、店主の奥さんに責任を押し付けられていた。

どんなに酷い仕打ちを受けても、育ての親には逆らえなかった。

でも…とうとう我慢の限界も、来たのかもしれない。

当時、私はまだ産まれてから10年しか経っていない、子供だった。

だけど、事の良し悪しは…なんとなく理解していたつもりなんだ。

ある日の事だ。

いつもと変わらず、商店の仕事に従事していた時に、困り果てたお客様がいた。

店頭に並べてある商品を、じっと眺めている。

私は気になったので、ちょっとのつもりで声をかけたのだ。

そのお客様は、話がとても長かった。

要約すると、特定の品物が欲しいのだが、貨幣がほんのちょっと足りないとの事だった。

この方も一生懸命稼いできてはいて、何度も商店に足を運んでいた。

やっとの思いで買い物しようとするば…値上がりを目の当たりにして…。

2年くらいは、この生物の顔を見た事がある。

今にも泣き出しそうに、辛そうにしているのを目の当たりにすると、私も同情してしまう。

なので、お客様の持ち合わせの貨幣と。欲しがっている商品との交換に応じようとした。

そこに、待ったの手が掛けられた。店主が売り場まで出てきたのだ。

これはマズイと、私は直観していたが遅かった。

店主が販売拒否を伝え、お客様は怒った。

私が売ろうとしたとお客様が言うと、店主は即座に私の頬を叩いた。ピンタを1発かましてだけで、私の身体はグラリと揺れて、地面に倒れてしまった。最初にぶつかったのがお尻の部分で、致命的な怪我には至らなかった。

同じフォトムの民の私でも転ばせてしまうのだ。

体格の小さな他星人だと、数メートルは飛ばされるかもしれない。

店主のピンタは超強力なのだ。

この痛みを身体に染み付いてしまったら、強靱な精神の持ち主でないと彼に逆らえないだろう。

私も、タフな精神力はない。

でも、この店主に対して…反抗心が芽生えていった。

もう従順な奴隷には、なりたくない。

私は引っ叩いた大柄の《オス》に対して、抗いたいと願った。

私には店主にぶつけられる力を持っていない。

できる事は、たった1つだけ。

横暴な店主から、出来るだけ遠ざかる事。

そう、逃げる事は…私に残された、唯一の希望。

気持ちが切り替わってから、私の行動は早かった。

無我夢中で、街中から外へと、走って行った…。

★★★

気がつくと、私は賑わいの盛んな街とは異なった、広大な荒原地帯まで走っていた。

街の外は膝までの高さの雑草がまばらに生えているだけで、身を隠せそうな木すらもない。

砂を運ぶ風の音だけが、私の耳に届いた。

逃げる決意をしただけで、ここまで遠く走れる事に…私は感動を覚えた。

同時に、何も考えずに走ってきたので、自分の将来が不安になった。

店主の命令に従って生きてきたこの身で、これから何をしたらいいのかわからなかった。

このままだと飢餓で倒れてしまう。

スタミナを持続させるよう走るのはやめて、歩いて行こうとした。

元いた町からは離れて、別の集落を目指す事に決めた。

走りすぎたせいで、私の呼吸はかなり乱れていた。

体力がものすごく減った実感はしても、思考はちゃんと働いていた。

自分からの視点だから、他の生物からしたら異常かもと悟られそうだが。

…余分な思考は、一旦片隅に置いておこう。

まずは、生命を繋ぎ止めるのが先決だ。

じっとしては、いずれあの店主に捕まってしまう。

よろめきながらも、私は1歩ずつ足を前に出した。

荒原は雑草以外は、ほとんどが砂地だった。

私の足跡も、1つ1つ残っていく。

足跡の数は数えていない。

感覚的には、100歩くらいは歩いたかなあとと思っている。

そこまで前進していた時だった。

エンジンの駆動音を聞いたのは。

私の身体は、ピクリと跳ねた。

恐怖が蘇ると思ったら。

何らかの乗り物に乗ってまで、私を追いかけてきたの…？

怖がりながら、私はエンジンの駆動音が鳴る方へ振り向いた。

見たことの無い、浮遊するタイプの車だった。

この星のイメージカラーとも言われる茶が黄土色の塗装ではなく、藍色とでも
言えそうな深い紫色のラインが入った、銀色の車だった。

それは始め、私の横を通り過ぎていった。

10メートルくらい先の地点で、その車はストップした。

何にもない広大な荒原で急停車するなんて、奇妙に感じた。

車の停止の状態は、維持しなかった。

向きを変えず、車はバック走行を開始した。

バックしてきた車は、ちょうど私が立ち止まっている地点で停止した。

浮遊するタイプの車は、停止時に底面を地面につかせる。

フワフワ揺れ動かない事を確認してから、乗っている人は降りられる。

車の側面には、外と内を繋ぐ役目の扉があった。

それは、自動的に開かれた。

動く前の扉の付近で、藍色の髪の毛の若い《オス》が立っていた。

彼は首元より下を紫色のマントに包んでいた。

しかし、端正な顔立ちに上手に整った髪型、さらにマントの綺麗さから、気品
溢れる《オス》だと判断した。

この方は、相当高貴な生物なんだろうな。

一目見ただけで、私は勝手に想像していた。

高貴な《オス》が、車から地面に降りてきた。

段差が1つあるだけなので、大した怪我もなくそれを跨いだ。

車の中に、耳当てをした紫色の髪の毛の《オス》が2名いた。

扉付近で私の視界に映ったから、この方も含めて3名以上車に乗っているのは
確かだった。

「君は、ここで何をしていますのです？」

《オス》は丁寧な口調を交えていた。

私と視線はやや高めだけど、声変わりは済んでいるようだ。

「あっ、えっと…。」

私はうまく、喋れなかった。

商店の接客のお仕事のように、定型文がない会話は、初めてだった。

10年も生きてるのに？と不思議がるかもしれない。

だけど、今までの私は接客対応か、店主の命令に素直に頷くしか、できなかった。

私が発言に悪戦苦闘していると読んだ高貴な《オス》は、後ろの乗組員達に伝えた。

「すまないが、ちょっと身を潜めてくれないか？」

「承知しました。」

覗き込んでいた乗組員達は、スッと車の中に隠れた。

指示を出した彼は、戸惑う私に視線を戻した。

「2人きりの状態になっただろう。大丈夫だ、思う存分、話すといい。気が楽になるであろう。」

高貴な《オス》の口から、丁寧口調は消えていた。

躊躇いもせずにスラスラと話せるのだから、ひょっとしたら《権力者》の類いなのだろうか？

私は心底、期待と不安が入り混じった感情を抱いていた。

この方についていけば幸せになりそうな期待と、同じ惨めな思いをしそうな不安だ。

高貴な《オス》がここまで気を配っているのに、私はうまく言葉を発せなかった。

言葉の1文字でも空間に漂わなければ、沈黙の空気が流れるだけ。

お互い、どうやって切り出したらいいか、迷っていた。

両者の間で気まずい雰囲気を書き換えていると、新たに車のエンジン音を聞いた。

段々と、ボリュームは上がってきた。

2台目の車が、私と高貴な《オス》が乗る車の前まで近づいてきた。

先の停止した車と並ぶようにして、その車は停まった。

私の背筋が凍りついた。

隣に停まった車の塗装は、この星の民ならば何度も目にする茶色だった。
わざわざ横並びに停めるとなると、この車の乗組員達の目的は、たった1つしかない。

私を、取り戻しに来たんだ…。

自分の身体の震えが止まらなかった。

「どうしたのだ？ん？」

高貴な《オス》は、私の異変にすぐに気づいた。

同時に、足音も聞いていた。

《オス》の声で、得体の知れない恐怖は現実となった。

「おお。旅の者か？サレンを捕らえてくれて助かったぞ？」

迎えに来た店主が、笑った。

私は彼の笑う姿を、1度も見た事がない。

私のいない所で笑顔を見せているのかもしれない。

でも、私にはそんな記憶はなかった。

余計に、今のニヤニヤした笑いが不気味だと感じた。

私の身体は自然と、店主とは反対方向に反らしていた。

「さて。こちらに引き渡してもらおうかな？」

私の身体は更に、店主が乗ってきた車から、ちょっとずつ離れていた。

高貴な《オス》と、目が合った。

彼もわけがわからないみたいで、奇妙な目で見ていた。

彼は店主から状況を尋ねた。

「何があったんです？」

「ああ。このガキはな、売っちゃいけねえモンを売ったんだ。俺が1発ビンタ
すると、突然逃げ出してな…。」

無論、店主の発言は嘘ではない。

それを実行した私が、1番よく知っている。

ここぞって時に、私は悲鳴すら上げられなかった。

高貴な《オス》が再び、私の顔を見た。

彼にはおそらく、私が狼狽えている姿が映っているだろう。

実際、私も今後降りかかって来そうな恐怖に怯えているんだ。

違うと否定したら、嘘を重ねてしまう。

店主が右足を、1歩前に出した。

「ほれ。ウチに帰るぞ？」

店主は私の身体に手を伸ばしてきた。

私の足は、横にずらしていた。

彼の指先ですら、触れられたくない気持ちが強くなっていた。

目元も熱く感じた。

視界が滲んでいるから、涙が出ているだろうと思っていた。

店主に捕まったら、今度こそ逃げられない。

脅威がどんどん押し寄せてくる。

疲れているのに、走り出したいと強く願っていた。

ところが、私の恐怖が和らぐ時が来た。

誰かが私の身体ごと、両腕で優しく包んでくれた。

これはきっと、店主から漂わせてこない心地良さだった。

私はゆっくりと顔を上げた。

せめて、私を抱きしめた者だけは知っておきたいから。

2台の車の外に出ているのは、私と店主と高貴な《オス》しかいない。予想できるのは、たった1名のみであった。

高貴な《オス》が、私を囲ってくれた。

彼は店主に対して、再度質問をした。

「詳しく話が聞きたいのですが、本当に何があったのです？」

店主の顔が、みるみる曇っていった。

「お前、さっき説明した通りだが？」

「直近の話は聞いております。私が申し上げたいのは、彼女にまつわる今までの経緯です。」

彼の顔を見上げると、すでに店主を睨む目つきをしていた。

すると店主が突然、怒りを露わにした。

「コイツが悪さをしたから怒っただけだ！それ以上の理由があるか！」

「微かに身体を震わす可憐な乙女が、ですか？彼女はきちんと反省できる律儀な《メス》でしょう。必要以上の怒号は、彼女を苦しめますが？」

ぐぬぬ、と店主は歯を噛み締めていた。

気の荒い巨体の《オス》は、大きな右手を上げていた。

「ガキ共の分際で、偉そうな口を叩きおって！」

右手が私を抱える高貴な《オス》に降り掛かろうとしていた。

間一髪の所で、ピンクのダメージは回避した。

私は高貴な《オス》に身体ごと持っていかれるようにして、車の中に入った。

車の扉は、最初から開いたままだった。

「すぐに発進するんだ！」

高貴な《オス》が乗組員達に指示を出した。

乗組員達は突如起きたトラブルに困惑していた。

もちろん、私の存在も。

「王子、この者は…。」

「構わん！予約済みの宿泊施設へ急げ！手続き次第、この星を出る！」

「りょ、了解しました！」

気品のある《オス》だと思っただけだが、『王子様』だったとは…。

私は驚きで口を開けずにはいられなかった。

車は扉を閉めて、浮上し、豪速で走り出した。

荒原が広がる大地では、交通の規制はない。

別の新たな街に入るまで、車は速度を落とさなかった。

★★★

リュートと名乗った王子に連れられ、私は流れるままに流されていった。

元いた街以外を知らない私は、同じフォトムの中の街ですら、どこまで辿り着いたかわからなかった。

ただ、宿泊施設で短時間の休憩をした後に、駐艇場まで連れていかれた。

寝る間も惜しんでまで、先を急いでいた。
駐艇場には他星の宇宙船が停めているとは、私も小耳に挟んでいた。
フォトムの外に出るのか、と私は不安になった。
未知の世界への冒険は、かえって恐怖を煽ってきた。
怖くて暗い気持ちになった私の手の甲に、王子の手が重なった。
「歴とした王国へ君を導く。何も怖がらなくてもよい。」
そう言った彼は、左手で私の頭を撫でた。
宇宙船に乗ってから、私達は木星圏フォトムを出発した。
恐る恐る、行き先を尋ねた。

王子は『土星圏ニコソ』へ戻ると言った。
土星圏の星は木星圏のそれと距離の近い位置に存在する。
初対面の私達で、言葉が通じやすいと感じたのは、そんな理由があった。
近隣の星々と関係性を保つ利便性は大きく、おかげで商工業の発展に貢献している。
取引の交渉には、貨幣や物の他、スムーズに進行できる言語が必要だった。
だから自然と、共通言語の仕組みが整えられたのだ。
土星圏ニコソは藍色の星だった。
真っ黒な宇宙空間で、闇に溶け込みそうだと錯覚するぐらいには。
星の外観同様、連れてこられたお城も同じ色で染められていた。
城の規模の大小は不明だが、全高は低かった。
城にいた者達が私を見つめる視線は、冷たかった。
握られた槍を向けてこないのは、隣に立つ王子のおかげだろう。
怖がらなくてもいいと言われても、やっぱり安心はできない。
今更引き返すなんて、できないのに。

王子の父である、王家〔フレアランス〕の当代の王様とご対面になった。
貴族どころか星の未来を導く筈の権力者ですらも無縁だった私は、仰天した。
しばらく、立ったまま固まってしまった。

質問をされたけど、うまく答えられなかった。

王子のフォローがなければ、私は失神したかもしれない。

それくらいの緊張感が漂っていたのだ。

私はここで、店主にされたように束縛されるのだろう。

それを身構えていた。

拷問の類は、なかった。

王子の懸命な説得により、私は王家の技術機関へと配属された。

《メス》である私は、本来なら家政婦見習いとして仕えるのが普通では…と思っていたが。

まさかの人手が欲しいとの理由でそちらに移動させられた。

★★★

〔フレアランス城〕に暮らすようになってから、私の表情に明るさが戻った。

これは、王子であるリュート・フレアランス5thの談である。

技術機関の一員として頑張って働く私を、リュートは陰で見守っていた。

度々、私達は束の間の休息にて、談笑しあった。

「ねえリュート。何であの時、あなたはあそこで車の移動をしていたの？」

ずっと前から抱え込んでいた疑問を、ようやくここで打ち明けられた。

知りたかったけど、対面の恐怖でなかなか会話が出来なかったから。

「それは…。」

「ずっと不思議だったのよ。一王子様がどうしてあんな荒れた大地で車を走らせたのが。観光目的とは考えにくいし。」

すると、リュートは深刻な表情を見せて、私に尋ねてきた。

「…君は、『ヒスロ・インフィ』というHRをご存知か？」

「ヒス…？」

「君の出生である星の《オス》だ。奴は狂暴な巨人のHRとして恐れられているのだが…聞いた事はないか？」

「ごめんなさい。あの星の記憶は、歪な商店の思い出しかないわ。」

「そうか…すまない。」

リュートは少し落ち込んでいた。

いい情報が見つからなかったからだ。

私も、自分の出生の星で、恐ろしい怪物が現れていたのを聞いて、内心驚いた。

〔フレアランス城〕の者達に優しくして貰ってるから言えるけど、あの星を出てよかった。

衛星データなる映像から、私をこき使った店主が罰せられているシーンを拝見した。

あのまま居座っていたら、また別の場所に売り飛ばされたかもしれない。

『逃げる』意志を決め込んだだけで、私は星をまたいでも、幸せを得た。

リュート。私はあなたに感謝している。

立派な技術仕官になれるよう、頑張るからね。

短編17

伝道の日

物語には、人を惹きつける魅力がある。

創作とは無縁の進路を辿った俺でも、それぐらいの事はわかる。

俺、ジェームズ・フェリーにも学生時代、友人は複数いた。

男女の性別差などなく、いろんな経歴を持つ人間と交流する機会を得ていた。

俺が友人だと捉えているグループ内の1人に、文学好きのロマンチストがいた。

彼女は読書も執筆も、自ら進んで行うタイプだった。

何故、1人の軍人である俺が、ロマンチストの女を話題にあげたのか？

彼女もまた、俺が事務局長としての責務を任された【ラストコア】に関わる、重要人物なのだ。

今から俺は、彼女の紹介をしたい。

ほんの一場面、俺が彼女に依頼をしに行った時の話しかしないが。

作家として活動している女性である。

民間人の紹介は、関連の記録のみを述べれば、大体理解できるだろう。

彼女としては、不満に思うだろうが。

★★★

リーザ・カーゴットという女性を、俺はハイスクール時代に会っていた。

彼女は授業の時に、度々同じ教室で受けていた。

学生時代での彼女の記憶は、以下の内容だ。

様々な学問に興味を持つ、好奇心溢れる女性。

だが成績は、ずば抜けて優秀でもなく、落ちこぼれでもなく…平均的であった。

とりわけ、文学の知識は…豊富だった。

俗に言う、文学女子である。

リーザとは友人と言っても、かなり親しい間柄ではない。

彼女もまた、交友関係が広がった。

趣味で執筆したであろう小説も、学生達に何度読まれたか。

俺も男の友人から勧められて、数本は読んだ。

文学どころか芸術に疎い俺は、優れたアーティストを名前にあげるとしたら…
リーザしかいなかった。

それなりの著名人も知っているが…俺の感覚では全く心に響かなかったんだ
ろう。

ハイスクールを卒業して、10年は経った。

西条宗太郎司令と共に「ラストコア」という宇宙対策の新たな機関が設立され
てから、5年が経った。

新規の立ち上げというのは、人員が少ないもんで。

技術局長まで登り詰めたアレックスの尽力がなければ、『モノ』ですらも不足
していた状況下だった。

外部の保守的な機関の協力も仰いで実現した『宇宙進出』も、「ラストコア」
に追い討ちをかけた。

宇宙に出たのはよかったが、代償も大きかった。

黒川の隣に立って前線で戦いに挑む予定だった女兵士が、宇宙で爆散してし
まった。

それが災いとなって、彼女を派遣した正規軍からは余計に煙たがられるよう
になった。

定期的な視察訪問には応じてくれるらしい。

だがモチベーションは上げてもらわないと困る。

正規軍の基地へ赴いてまで欲しい人材は、黒川と共に前線で活躍すべき戦闘員
である。

意欲のある人間にやってもらわないと、かつての女兵士のような悲惨さを再び
味わう羽目になる。

…彼女は意欲があっても、惨めな最期を迎えたが。

正規軍からの信頼度が低下したとしても、黒川が軽蔑していても…彼らの協力
は必要だ。

かく言う「ラストコア」も、正規軍から独立して設立された専門機関。

宗太郎も俺も国は違えど、元は正規軍の一員だった。

信頼回復は困難を極めたが、せめて…。

この日、俺は〔ラストコア〕の基地の外に出ていた。

既に目的地は、決まっていた。

★★★

リーザ・カーゴットは自然を好む女性だった。

彼女の本拠地は、アメリカではなくヨーロッパだった。

環境問題のニュースが報道されている中、澄んだ空気が心地いい田園地方は残っていた。

イギリスの首都ロンドンの北、イングランドの小さな街で暮らすリーザ。

海外のメディア情報もキャッチしていたので、住居も特定ができた。

自然派の女性と言えど、暮らしの利便性は必須だ。

集落の中に家を構えるのは当然である。

彼女の家のつくりは、街の風景と見事に調和した、古い1軒屋である。

窓の上にテントでも張れば小さなお店でもできそうな建物だった。

手のひらサイズのベルを、左右に揺らす。

訪れたのは昼間である。

家の前で2人ぐらい通り過ぎた者がいた。

午後を過ぎた頃ならば、リーザでも起きているだろう。

彼女の普段の生活模様は、全く知らないが。

ドアが開かれた。

取っ手を持っていた人間は、リーザ本人だった。

大人になってますます美人になった彼女はメディアの媒体でチェックしていたが、生で見るとこれまで、麗しさに磨きがかかっているように感じられた。

「あらジェームズ。ここまでよく来れたわね？」

「車を運転できるからな。道路の走行なんて大した事はないさ。」

「そうなの。さあ、上がってちょうだい。コーヒー用意するわね？」

リーザはドアを開く角度を大きくした。

俺は彼女の家の中に入った。

家の中は通されたリビングを含めて、自然と調和したインテリアとなっていた。

窓際のスペースに、小さな観葉植物が配置されている。

リビングの低めのテーブルも、椅子の骨組みも、木製でできていた。

「どうぞ。インスタントのコーヒーだけど。」

「アポを取ったのは俺の方さ。味は気にしてないぞ。」

「あら意外ね。こだわりがありそうに見えたのに。」

「職業柄、ピリピリするようになっただけさ。」

椅子に座ってコーヒーを受け取った俺は、彼女と他愛のないやり取りをしていた。

だが、彼女の家に長くは止まれない。

訪問した今日だって、他に予定は組んでいる。

「ラストコア」の事務局長としての仕事はタイトである。

舐めてもらっては困るんだ。

彼女も彼女で、メディアでもお目にかかる程の有名な作家になった。

到底、作家業の仕事だって忙しいだろう。

再会時の挨拶は切り上げて、俺は依頼を申し込もうとした。

ただ、単刀直入には言わずに、彼女の状況を探る事から始めた。

「リーザ。現在執筆中の原稿はあるのか？」

「そうね。現地の新聞の連載が継続中ね。2本ぐらい。あとは、コラムを書く仕事もしている、って所かしら。私1人で食べていける程度しか、稼げてないわ。」

リーザは戸惑う事なく正直に話した。

コラムは副業的な意味合いだとして、連載の小説に支障が出るのは不味いな…。

俺の依頼は、彼女の本業を疎かにさせる懸念もある。

招待へのプレゼンは、別の人間に任せるのがいいか？

彼女をお願いする立場の俺だったが、業務を聞いてからは黙り込んでしまった。

目線をやや、下に落としていた。

リーザには、俺が悲しそうに見えたのか。

今度は彼女が様子を伺った。

「ジェームズ？何を深く考えているのかしら？」

彼女の発言に、俺は我に返った。

「…俺が、深刻そうに見えたか？」

「顔色見たらすぐわかるわ？出迎えた時から暗かったわよ、あなた。」

驚いた。

10年ぶりの再会だと言うのに、俺の心情を瞬時に読んでいたんだ。

彼女の洞察力には、参ってしまう。

そうでもしなければ、登場人物に感情をインプットできないのだろうな。

彼女がここまで言うならば、俺も腹を括ろう。

「今から伝える内容も予想できてると思うが…君に依頼したい仕事があるな。」

「仕事の依頼ね。」

彼女はなるほど、とても言いたげな表情を見せた。

やっぱり俺の意図も、読めていたようだ。

もうこれは引き下がらなくても問題なさそうだ。

今度は大雑把な概要ではなく、詳細を告げた。

「小説を、書いてほしい。戦士達の闘志がみなぎるような、活力あふれる小話を。」

「少年漫画のような？」

「うーん。似たようで異なるな…。」

俺は返答に困った。

読者は正規軍の人間達と固定はしている。

彼らの何人かでも[ラストコア]へ引き抜いて、アレックスが開発中の試作機に乗せるのが目的であるが。

これ以上、リーザに言っても大丈夫だろうか？

そこはもう、適当に誤魔化すしかない。

洗いざらい話さなくてもいいが、まあ、書いて欲しいコンセプトは伝えよう。

「近未来的なファンタジー小説を執筆してくれないか？資料とかは、できる範囲で用意する。」

「空想科学？」

「資料的に言えば、ハードにはなりそうだが…。これから苦難の試練に挑む若者達に向けて書いて欲しいんだ。君にとっては、難しいジャンルに挑戦すると思うが…。」

依頼は彼女に伝えた。

だが俺の気分は、スツとしない。

彼女の学業での成績を細かくは知らないが、自然科学や技術分野の素養には詳しくない筈だ。

難しい仕事を頼むのだから、期待して良かったのかと心が痛んだ。

彼女は連載小説を執筆している身。

無理矢理にでも仕事を託すと、メインの業務を邪魔してしまう。

なかった事にしよう、と諦めがついた時だった。

リーザは、予想外の返答をした。

「あら、面白そうじゃない。やってみようかしら。」

「…本当に、いいのか？」

「早速構成練りたいわね。ジェームズ、資料は持参してきているのかしら？」

「紙媒体だと少量だが…。」

「データ上の資料も頂けるならそれでもいいわ。必要になったらプリントするから。」

仕事を抱えているにも関わらず、リーザは俺の依頼の執筆にやる気を見せていた。

これには俺も、わかったと頷くしかなかった。

俺はパソコンを開き、リーザの執筆を支援する【ラストコア】の資料を添付ファイルとしてメールで送った。

メールの受信アラームは、リーザが座る椅子の隣に立てかけたノートパソコンから鳴った。

専用のケースで保管していたパソコンを取り出したリーザは、メールをチェックした。

「あら。こんなにたくさん。」

「読み込みが遅くなって、ストレスになりかねないが…。」

「適度に情報を入手するから大丈夫よ？」

ありがとう、と言ったリーザは、微笑んだ。

★★★

リーザに執筆依頼をしてから、3ヶ月が過ぎた。

彼女がビデオ電話をかけて来た。

依頼の承諾を得てから、新たに連絡用のアドレスも交換していた。

『ジェームズ。文書データを送ったから、読んでね？』

「リーザ！？早くないか！？」

『連載なんて少し待たせてもいいじゃない。ありふれた日常の描写がされた小説なんて、誌の読者全員が読まないわ。』

いやいるだろう。彼女の連載を期待している読者なんていくらでも。

俺はツッコミたかったが、あえて黙っておいた。

他の心配事に切り替えた。

「修正はしたのか？本は公に出たりするし、チェックが厳しいだろう？」

『連載担当の編集者に読ませたわ。彼は褒めてくれたわよ。こんなファンタジーも書けるんですね、って。』

なるほど。その辺りの人脈も押さえてるという事か。

「わかった。データは受け取っておく。感想はなるべく早くでいいな？」

『あなたのペースで…なんて言うとかわるわよね？軍人で忙しいんだし。』

「じゃあ、1週間後に報告する。発行作業はこちらでやっても構わないな？」

『構わないけど…作れるの？』

「完全な製本は厳しいが…広報誌系のパンフレットならば素人でも任せられそうだ。情報処理のエキスパートに、相談してみるよ。」

『わかったわ。あとはお願いね？』

★★★

リーザの原稿のデータは[ラストコア]内の有識者達によって編集され、1冊の本が完成した。

何部か刷って、1部をリーザの自宅に発送した。

ビデオ電話で彼女からの評価を貰った。

原稿を受け取ってからの編集期間は、1ヶ月もあれば十分だった。

実際にそれで済んだのだ。

リーザの原稿は、修正をかけなければならない箇所が少なかった。

物語の整合性も、しっかり取れていた。

たった4ヶ月の短い期間で、1冊でも仕上げられたのは上々だ。

あとは、これを正規軍の閲覧室への配置を完了するだけだ。

募集をかけるのは、まだ速い。

隊員達が手に取って読んで貰うまでは…。

俺は日本各地に点在する正規軍の基地へ足を運んだ。

本を何部かに分けてトラックで配送すれば良い話ではあるが…厳しいチェックがあるんだ。

何も知らないドライバーより、私が事情を説明すればいいだろう。

要するに、軽い営業だ。

日本語の翻訳まで終えた完成本を、各基地へ出荷する。

初めて持ち込む際には、自分自身のトークで納得させなければならない。

ただ、中身を洗いざらい話すと疑われるから、工夫が必要だ。

彼女に『名前』を利用してもいいか確認した。

『誤魔化しようがないし、いいわよ?』と認めてくれた。

この本のセールストークはこれだ。

『自然主義の女性作家リーザ・カーゴット、新境地の近未来ファンタジーに挑む。』

★★★

リーザの初のSFファンタジー本が正規軍内で発行されてから、2年が過ぎた。

この間、彼女は合計6巻の長編シリーズを書いていた。

誌の連載等の他の仕事も詰まっている中で、ここまで書き切った彼女は素晴らしいと、褒め称えたい。

【ラストコア】の当てがわれた専用の個室にて、俺はパソコンを開いていた。

リーザの小説のレビューを読む為だ。

あんなに厳重な対策をしている正規軍で、こんな事できるのか、だと?

それでは、カラクリを教えよう。

実は滅茶苦茶わかりにくいリーザの小説のレビューサイトであるが、あえてわかりにくくした。

巻末の奥付け欄の一番下に、5ミリ以下の小さな文字でレビューサイトの誘導情報を記載した。

ただ、URLを載せているのではない。

URLは裏表紙を開いてすぐの白いマット紙に書かれているが…人間の肉眼でははっきり見えないのだ。

ではどうするのか?

答えは…UVライトを当ててみる事だ。

すると文字がくっきりと浮かび上がってくるのだ。

UVライトなんて所持する者は少ない…と思われがちだろう。

実際に所持する人間はほとんどいないのは事実だ。

だが正規軍は、スパイのように隠密な任務をする役割の兵士もいる。

彼らは解読用にライトを常備して任務に取り掛かる。

そんな知恵の回る奴が1人か2人いて、サイトにアクセスしてくれれば上々だ。

この方法、もといリーザの小説の発行自体がダメ元で計画したようなものだ。

初の《宇宙進出》で双方に溝ができたとしても、基地の訪問行事は中断していない。

1人でも、アレックスが気にかけていた紫邑華南と同じ、正規軍の人間がこちらに配属されるのを望んでいる。

僅かな期待を胸に秘めながら、俺はレビューサイトを眺めていた。

立ち上げた2年前に比べると、感想や意見の件数は伸びた。

数百件に及ぶレビューだが、大抵が『面白いです!』『続き待ってます!』の応援コメントばかり。

ここまででコメントを控えるのなら普通だ。

人間というのは、誰しもが悪の側面を持っている。

それを見せてはいけないと隠すか、開き直って全面に出してしまうかの違いが起きるだけだ。

批判の行為自体は、悪ではない。

正しい道筋で論すように表現すれば、作者だって頷いたり検討したりする。

汚い罵倒で執拗に相手を攻撃するのは、真っ当な批判ではない。

これがあった事実についてリーザにも報告しているが、

『感性が合わない人もいるのよ。仕方ないわ。』

と軽く受け流していた。

リーザはそうかもしれないが、本の発行にはそれなりの手間がかかっている。

彼女以外の携わる人間の苦労も知って頂きたいものだ。

レビューサイトに注意書きで『露骨な批判の書き込みを禁止』と条件を加え、該当するレビューはこちらの権限で削除した。

この日も過激な暴言を含むレビューを削除する作業に追われていた。

その最中に、俺は1件のレビューを目撃した。

月に1度のペースでレビューサイトのチェックを欠かさなかった。

ん？と興味を持たせたレビューは、前回のチェック時から2週間後に投稿されている。

新規のメッセージであるのは事実だ。

これが妙に、俺は気になったのだ。

問題のレビューが、こちらだ。

『こんな小説が閲覧室に置かれているのは、正規軍も宇宙を目指すのでしょうか？楽しみです。』

文章自体は平易な内容だった。

なのに、俺は引っかかったのだ。

この投稿者は勘違いしている。

いや、それはそれでいい。

〔ラストコア〕から送った事を秘密にしているからだ。

（リーザが応援の為に送付したと説明している。）

逆に、この勘違いが、俺の心を動かすきっかけになった。

彼らは常に、上からの命令に従う。

原則、反抗は許されない立場だ。

実際に正規軍の上層部と意向が同じ兵士ばかりではない。

表だった発言は禁止されている状況下である厳しい環境。

おそらく、当レビューサイトでしか、内面を打ち明けられないのだろう。

俺はすぐに行動開始を決めた。

〔ラストコア〕の最高司令官である宗太郎に、連絡を入れた。

「近日中に正規軍の基地を訪れたい。日程の調整をしたいのだが…。」

★★★

調整は上手い事してくれた。

俺は正規軍の、東日本を拠点とする基地へ足を運んだ。

レビューの投稿者は、8割強特定していた。

サーバーに問い合わせれば、端末情報を取得できる。

ほとんど高度な情報処理を得意とするスタッフに任せておいたのだが、10万人以上在籍する正規軍の兵士達の中から絞り出せたのは良かった。

端末情報以外に、兵士達の固有のIDまで割り出せた。

あとは、本人との面会だ。

基地内の施設には当然、面会用の部屋も設けている。

しかし、それを利用せずに、俺は外出許可を取らせるように伝えた。

やむを得ない状況のみ、部屋の利用を考える算段でいた。

意外に、該当者の外出許可は取れたようだ。

基地の近くのファミレスにて場所を指定したのだが、彼女はやって来た。

約束の時間より30分早い到着だった。

兵士である所以か、定時にきっちりと行動している。

「お待たせしました。フェリー少佐。」

彼女は俺に一礼した。

俺も立ち上がり、彼女に対して頭を下げた。

石切寿恵子（いしきりすえこ）。

正規軍の陸軍の人間だ。

年齢は『宇宙』で散った華南と変わらない、25歳であった。

階級も士官クラスだった。

彼女が『少尉』と答えたからだ。

黒髪、毛並みをきちんと揃えたショートヘア。

他の日本人女性よりも背が高くみえるが…サイズを聞くのは野暮だからそれはやめた。

身も蓋もないセクハラな質問をしてはいけない。

くだらん事を聞いている場合ではない。

この面談の場で最も重要な話題を振らなくては。

石切少尉を向かいの席に座らせた。

現在の時刻は《13:00》を示している。

たまたまこの日の訓練は、朝方で終了しており、大半の基地の人間は束の間の休息を過ごしていた。

少尉も俺との約束がなければ、基地内で身体を休めていただろう。

貴重な安らぎの時を無事過ごせるよう、面談は短めに済ませよう。

俺は単刀直入に聞いた。

「先月、サイトにこれを投稿したのは君か？」

A4サイズの紙を、彼女に見せた。

それは問題のレビューがプリントアウトされていた。

少尉はテーブルの上の紙に目を通す。

少し経ってから、彼女の両目が大きく開かれた。

ギョツとした表情で、俺の顔を見た。

「はい…。私のレビューですが、どうして少佐が…」

「リーザとは知り合いでな。色々気になって調べていたんだ。」

俺は誤魔化すように言った。

少尉はそうなんですか？と目を輝かせていた。

彼女は高い関心を示している。

まだリーザの関係者としか流してないのに、その後の展開を期待しているようだった。

ここから、少尉はものすごく喋り始めた。

「自分、自由時間の時に読書をしておりまして…。カーゴット先生のエッセイはとても落ち着くんです。まさか、先生が日常とかけ離れたSFファンタジーを描こうと決心するとは、夢にも思いませんでした…！」

饒舌な語りの少尉。

立場上は上官であるこちらが少し引いてしまいそうだ。

あまりにも加熱するので、ストップと言って右手のひらを前に出した。

「熱が入っているところ申し訳ない。今回はリーザの評判云々の話ではないんだ。」

「あ…少佐に、ご迷惑を…！」

「気にしていない。彼女の知人として、むしろ褒めてくれて嬉しいさ。

彼女と会う機会があれば、伝えておくよ。」

「ありがとうございます！」

少尉は感謝極まって、頭を強く下げた。

さて、俺からの本題だ。

レビューの内容で、引っかかった点を彼女から聞き出さなくては…。

「何故、正規軍側で宇宙に出る計画を進めていると考えたんだ？」

「カーゴット先生のSFファンタジーが、『宇宙を目指す道のり』についての内容で…何から何まで細かく描写されているのが凄すぎて…。逆に私達が勉強になるとしてしまうぐらいには。」

まあ、そう仕向けたのは俺ではあるが。

リーザに渡した資料はごく一部だ。

十分な分量だと彼女は喜んだが、[ラストコア]の全貌を知るには不足していた。

俺が彼女に入れて欲しかったのは、『宇宙進出』の描写のみ。

それ以外は自由に描写していいと伝えている。

特殊な設定ゆえ、ネタは限られてくるのだが。

虚構のシーンをふんだんに取り込まれているこんな小説でも、興味を示す者がいるんだ。

もう1歩、踏み込む必要がある。

レビューへの質問はここまでにして、俺は彼女に尋ねた。

「もしもの話だが…正規軍ではない別の機関で、『宇宙を目指す道のり』の計画が立てられているとしたら、君は参加するか？」

少尉は両目を丸くした。

「実在するんですか？そんな機関が。」

「実在するとしたら、どうする？」

そう言わずとも、直近で《宇宙進出》の計画を実行した〔ラストコア〕である。

全容は非公開で進めていた為、正規軍の人間は真実を知らないのだ。

下層部の少尉達ならば、さらに〔ラストコア〕の実際を知らされていないはずだ。

正規軍側の上層部が悪口を交えた説明をするから、下の人間は間に受けて信じてしまう。

犠牲者を出してしまった、最初の《宇宙進出》。

これしきの事で怯んでいては、俺達は黒川の言う、HRの脅威に打ち勝てなくなる。

現状維持のまま、終わらせてはいけない。

1歩でも足を、前に出していしないと、〔ユートピア〕の悲劇が再来する。

〔ラストコア〕にやってきたスタッフ達では、黒川の隣に立てる程の力量はない。

どうあがいても、兵士達の協力が不可欠だ。

俺は、少尉の返答を待った。

彼女は俺の目を見て、真剣に自身の思いを伝えた。

「1度は、挑戦してみたいです。軍は軍で頑張ってますけど、現状維持のままでもいいのか不安になりまして…。こんな私でも、役に立つのであれば、参加したいです。」

彼女の瞳に、情熱の炎が燃え上がっている。

俺は内心、喜んだ。

諦めムードの疲弊した正規軍の中にも、闘志を抱く兵士が残っていた事に。

これは、何としても計画を進めていかなくては…。

俺は少尉に1つ、依頼をした。

「掛け持ちになるだろうが…。君にはリーザの小説の布教を頼みたい。より多くのファンを生み出してほしい。」

「ですが、他の人が参加したいかどうか…。」

「構わない。ファンの中の少数でも、参加希望者がいればいい。君のIDは知っている。サイトはチェックしているから、レビューを書き込んでくれ。」

「承知しました。自分の友人にも、声をかけてみます。」

「ありがとう。」

俺は少尉にお礼を言った。

彼女は恥ずかしそうに、顔を赤らめた。

普段、軍隊の中で過ごしていたら、褒められる機会なんて滅多にない。

上官に優しい言葉をかけられる事に、慣れていないのだ。

彼女の反応は、至って普通である。

質問と依頼を終えた後、俺達2人は30分程、談笑していた。

正規軍や「ラストコア」に関係のない話を、たくさんした。

ドリンク1杯分頼んで、全部飲み干した。

それを合図に、少尉との面談は終わった。

★★★

石切少尉に『小説の依頼』をした半年後。

小説のファンの数は、徐々に増えていった。

彼女のいる東日本の基地でも、30人程集まっていた。

彼女がレビューサイトで呼びかけをしたのか、他の基地からもファンの数は増加していった。

ざっくり数えると、100人以上は小説を高評価してくれた。

いよいよだ、本格的に募るのは。

俺はレビューサイトに投稿した。

『【重要】宇宙へ旅立ちたい者の参加を望む【事項】』とタイトルをつけて、希望者にはコメントを残すようにと記載した。

設定で、レビューサイトの上部に俺の投稿を固定した。

あとは待つだけだ。

今度は月に1回ではなく、週に1回のチェックを心掛けようと決めた。参加者の確認の為だ。

IDを調べて、1人1人面談しよう。

これを実行した結果、15名の兵士が志願した。

もう少し集めたかったが、これ以上引き抜くと上層部が訝しんでくる。アレックスが開発している戦闘兵器が少なくとも3機以上出せれば、今は十分だ。

あとは正規軍への厳しい申請を掻い潜って、彼らを【ラストコア】に連れて行く。

厳正な審査は、3度目でようやく許可が降りた。

白井3兄妹が【パステージュ】に乗る、半年前だった。

俺は石切少尉を含めた志願兵達を、正規軍の基地から連れ出した。

【軍用機】の搭乗訓練が、いよいよ始まった。

短編18

自責の日

（未成年の飲酒の描写がほんのり出ますが、地球外の出来事として捉えてください。申し訳ございません。）

生物は、どんな種族であっても、優劣をつけたがる。

自分自身の地位が高かろうが、低かろうが、関係ない。

扱いやすい身分の者を手下に見据えてこき使うと、自分の労力を抑えられるからだ。

生物は孤独では、生存できない。

だが、共存が必須な世界にて、どの生物にも負の感情が募る。

成功体験が少ないのであれば、尚更大きくなる。

この程度の生物だと開き直るか。

めげずに努力して上を目指すか。

不平不満をダラダラと吐き続けるか…。

今後の生き方への選択肢、どれを選んでも…この世界に影響を及ぼさない。

世界全体が一気に隆盛しない。

世界全体が一気に衰亡しない。

縮小した世界の中で変化が起こったとしても、拡大した世界の中で計れば、その量は微々たるもの。

誰しもが生きていく上で、『楽になりたい』と願っている。

欠点を指摘するだけの生物が多いのは、反省や成長よりも、『楽』だからだ。

快楽を得たい生物達の捌け口にされた者へ、俺は会っていた…。

★★★

H Rはこの世に生を受けてからずっと、権力者達に振り回されてきた。

普遍的な特徴の生物のような扱いをしてもらえず、自分の星を守る為の戦力として身体を改造させられた。

俺、マルロ・ヒーストンもこの中の1名だ。

俺の出生地の星は、天王星圏スイル。

しかし、物心がつく前から、俺は多くの他星を移り変わっていった。
故郷に戻る時だってあるが…家はない。
HRには、雇い主の権力者以外の元に、居場所はないのだ。
同じ天王星圏の、ブラージャがこの時の俺の居場所だ。
居場所と軽々しく述べたが、居心地がいいなどの生易しいものではない。
俺や同郷のHRをこき使う権力者がそこにいるから、拠点としているだけだ。

地球の年齢に換算してまだ10代だった頃、俺はブラージャの行政機関の権力者に誘われた。
上下関係があり、気軽に接する真柄ではない俺達。
誘われたとしても、断る選択肢はなかった。
権力者は俺の事を好意に買っているみたいだが、単純に上の者に逆らっていないだけだ。
どんなに無茶な任務を要求されていても狼狽えず、何らかの対策を講じて、結果的に完了させている。
彼らにとって不都合な案でも、ひとまず隠してやり遂げたと伝えている。
あまりにも粗末な対応をしていると権力者側から勘をくぐらされるだろう。
だが権力者という生物は、単純な威嚇者である。
外見だけ凶暴さを取り繕うだけで、内面を見抜けばあっさり弱体化する脆さを秘めている。
HR以外でも兵と称した捨て駒を身近に置く輩は多い。
都合の良い時だけHRを使役し、最悪の自体には真っ先に切り捨てる。
ブラージャの《オス》の権力者もその内の1名だ。
そういった権力者は、HRばかりに横暴な態度を取るだけではない。
HR側への被害が大きいだけで、同じ行政機関の部下に対しても、酷くあしらっている。
こんな奴らの趣味なんて、下劣な嗜好ばかりだ。
俺を誘った権力者は、行き先を教えなかった。
サプライズのつもりで奴は企んでいるのだろう。

実際、サプライズでもなんでもない。

事前に告げたら、俺が失望すると想像したんだ。

案内された場所は、《メス》だらけの楽園だった。

『楽園』と称するのは、権力者やその側近だけだ。

太陽から遥か遠く離れた天王星圏の星々に、太陽光は届かない。

届かぬ光の影響で、辺りは暗いし、寒さを強く感じる。

木星圏よりも太陽の近くに位置する星々の者達がやってきたら、寒さに震えて歩きにくいだろう。

H Rだと合金の遺伝が引き継がれているから、温度への耐久性は持っている。

昼時でも暗すぎるこんな星内でも、生物には目がついている。

最低限の灯火は必要だった。

火の灯りではなく電氣を利用した灯りを、繁華街の内外で展開されていた。

特に《メス》の楽園なんて…照明の扱い方が他の繁華街と異なる。

書物がくっきり読めるくらいの強い光ではなく、ダークなオレンジ色の味が増すぼんやりとした空間演出を取り入れている。

雰囲気は、健全じゃない。

これまで4、5つの星を仲間と共に潰してきた俺だが、戦場の血生臭とは違った異様な光景に、吐き気を覚えた。

手を口元に当てただけで、体調不良を気付かれずに済んだ。

前方の権力者は、俺の身体を気遣わずに中に入るだろうが。

中年の《オス》は、女豹の繁華街の一角にある建物の中に入った。

そこは、日帰りのできる宿屋だった。

ただの訪問者を休ませる為の宿泊施設ではない。

中にも、着飾った《メス》達が控えていた。

ガスが充満しているわけではないのに…。

行政機関や俺達の仮の住まいからは感じない、薬剤の匂いが鼻に吸い込まれてくる。

この《メス》達は、化粧もしているのだ。

自慢ではないが…俺の出生地であるスイルは、小人達の住まう星だ。

成長するにつれ縦に伸びる地球人からすれば、外見が可愛らしいと思うだろう。

ブラージャの生物達はスイルと比べて、容姿はあまり良くない。

化粧は所詮、誤魔化しの技術だ。

巧みな腕の持ち主ならば、老け顔もあつという間に童顔にしてくれるだろう。

宿屋内の《メス》達は、行政機関の彼女達と綺麗さが異なっていた。

ブラージャの全《メス》の痩せこけたシミだらけの醜さとは真逆の美貌を強調していた。

あまり《メス》の楽園に足を踏み入れる機会のない俺ではあるが、ブラージャの者かそうでないかの区別はついた。

この星の奴らは雌雄問わず、内面も獣を有している。

つまり、がめつい一面を持ち合わせているんだ。

こちらとしては拒否の意を示しているのに、強引に勧めてくる。

これで俺は1度、大失態を犯してしまったのだ。

下手に断るのをやめたのは、それが原因なのだ。

権力者は『おまかせコース』しか頼まない。

奴には、ストレス発散になれば気が済むとでも思っているんだろう。

色とりどりの《メス》達の細部など、興味がなかった。

権力者の気が変わらないよう、穏便に済ます事を考えていた。

寄ってくる《メス》達と社交辞令を交わす程度で終わらせようと思っていたのだが…。

俺は、目を見開いてしまう程の《メス》に出会ってしまった。

大小の区別のある地球人からすれば、その《メス》は子供みたいだ。

白い髪セミロングを丁寧に整えた髪型以外は、清楚な和装に身を包んだ少女とも言える。

地球人の子供と紹介しても、違和感がないだろう。

しつこく引き寄せてくるプラージャの《メス》達など眼中にない。

俺はただ、まだ幼いであろう少女だけに、見惚れていた。

視線どころか、身体の向きまで動かしていた。

「お気に召した者がございますか？」

「…あ、ああ…。」

側でくっついていた《メス》が俺に話しかけてきた。

腕に絡みつки、身動きが取れない状態。

これで動作を始めると、両脇の《メス》達も少し驚いてもおかしくない。

《メス》達は表情を崩さず、にこやかな態度で接してきた。

「お呼び致します。今宵はゆっくり御堪能なさって下さい。」

「いや、俺は一言も…。」

違う意思を示すまでに、俺が見惚れていた幼い《メス》が呼ばれていた。

隣の《メス》が片手をヒラヒラさせている動作も確認した。

名前を呼ばれた幼い《メス》が振り向き、こちらまでやって来た。

「この者の相手をしなさい。」

「かしこまりました。」

俺の隣にへばりついた《メス》は退き、代わりに幼い《メス》がこちらに寄ってきた。

彼女は正座して座り、深く頭を下げた。

「初めまして。『エルカ』と申します。」

「…マル口でいい。」

「かしこまりました。」

『おまかせコース』の宴会場では、賑やかな笑い声が響き渡る。

なのに、この幼い《メス》の対応は、ごくちなかった。

宴会の空気にそぐわない感じがしていた。

妙に、彼女の戸惑いがひしひしと伝わってきている。

いくら乗り気じゃない俺でも、緊張感が勝る空気の中では…。

時が過ぎるのを待つにしても、辛さを感じてしまう。

この店は宿屋である。

部屋数は多少はあるはずだ。

俺は『エルカ』という幼き《メス》に尋ねた。

「店内でも構わない。他に自由に出入りできる部屋はないか？」

「あの…相手は…」

「もちろん君と一緒に連れていく前提だ。」

俺がそう言うと、エルカは立ち上がった。

「少々お待ち頂けますでしょうか？女将にお伺いしてきます。」

エルカは女将を探しに回った。

彼女が左右に首を振りながら女将を探していると、成熟した《メス》とぶつかった。

あまり落ち着いたタイプだなと分析しつつも、俺は黙って彼女の行動を見つめていた。

どうやら、女将はすぐに発見したようだ。

エルカがぶつかった相手と話し合っている姿を見ると、あれが女将なのだろう。

じっと待っていると、彼女が戻ってきた。

「奥に庭がございます。そちらへ移動しますか？」

「ああ、それで頼む。」

「かしこまりました。ご案内します。」

別の場所への移動が決まり、俺は座布団の上で立ち上がった。

わいわい騒いでいるプラージャの権力者と《メス》達の宴会の場から、俺とエルカは姿を消した。

★★★

真っ白な雪化粧が広がる庭まで、俺とエルカはやって来た。

太陽の光が差し込みづらい天王星圏の星に、真っ白な雪の粉は鮮やかに見えた。

寒さも身体に伝わってくる。

庭の中には入らなかった。

地面が雪だと、俺もエルカも着物の裾や足元を濡らしてしまうからだ。

俺は元々戦闘民だからまあいいが、エルカは清潔な身なりをした《メス》だ。

ちょっとした汚れで麗しさを台無しにさせるわけにはいかない。

庭の風景の鑑賞できるギリギリの位置で、俺とエルカは腰を下ろしていた。

庭と通路を繋ぐ透明の窓がある。

通路に座ると他の従業員の邪魔になるから、窓と向かい合った部屋の中に入った。

地球の西洋風の印象が強いブラージャの民達。

だが、今回訪れた宿屋は、東洋風の内装である。

床に座布団を敷いて座れるのは、地球で言う畳と同じ構造でできているからだ。

太陽の差し込み具合が限りなく少ない天王星圏の星は、気温もかなり低い。

寒気も感じやすい。

無理矢理庭に出ようとせず、近くの部屋を暖めてくつろいでいた。

俺は権力者が近くにいない事もあってか、姿勢を崩しても気にならなかった。

エルカは…正座を保っていた。

自分の仕事として、俺と接しているからだろう。

楽にしていざと言ってもいいが、断られそうだからやめた。

「静かになったな…。」

「そう、ですね。」

エルカは会話が不慣れなのか、話すスピードにもぎこちなさを感じた。

膝の上に両手を置いて、目を床に落としている。

目と目が合わなければ、心地よいお喋りができない。

庭を眺めていた俺は体の向きを変えて、エルカを真っ直ぐに見つめた。

誰もが尋ねそうな質問を彼女に打ち明けた。

「差し支えなければ、聞いてもいいか？」

「はい…何でしょうか？」

生物によっては癩に触る奴もいるから、前置きだけしておく。

誰にだって、繊細な心はあるんだ。

初々しさの残るエルカが、心理的に鈍感なわけがない。

嫌な思いをさせないよう、少しの配慮として彼女に言った。

前置きの次に、本題だ。

俺の感覚だと、大袈裟な内容ではないのだが。

「君は、いつからここにいるんだ？」

「あ…。」

エルカの声に、戸惑いを隠しきれていなかった。

やはり、暴かれてはいけない内容だったか…。

俺に影響を及ぼすものではないし、この話を振るのをやめようとした。

ところが、俺の想像は異なる方向へと進んだ。

エルカが、次に口を開いた時から。

「物心つく前には、すでに。私は、実の両親の顔を知りません。」

「生きていないのか？」

「そうかもしれません。でも、わからないのです。女将から何も教わっていないのですから。」

「そうか…。」

正真正銘の無知なのか、こう切り返せと躡けられているのか。

初めて宿屋を訪れた俺に、詳細はわからない。

真実を知りたいが為にこれ以上の詮索はいけない。

彼女の経歴を知ったからって、俺の糧になるわけではない。

エルカを含め、この店の《メス》達は客に安らぎを提供する為に側にいる。

ならば、彼女は彼女の業務に徹してもらうのがいいだろう。

適当な小話をして、談笑でもしていれば問題はない。

2人きりならばお互い同士だ。

多人数の会話よりも、参入はしやすいのだが…。

相手は俺だけなのに、エルカは口を開こうとはしなかった。
ただ黙って、部屋の暖炉の燃え具合をチェックしたり、空になった陶器に飲料を注いだりしていた。

白の世界が広がる庭に、変わった動きはない。

静寂さは、時に焦ったくなる場合がある。

あとちょっとだけ気分を軽くしたい一心で、俺は口を開いた。

先に声を発したのは、エルカだった。

「貴方は…違う星の民なのですか？」

オブラートのない、ド直球な質問だった。

いや、彼女なりに配慮はしているのだろうと思う。

強く攻めるのなら、俺の事を『天王星圏スイルの民ですか？』と尋ねる可能性もあった。

星の具体的な名前まで、エルカは告げなかった。

まだまだ、建前を話せるレベルまで達していないだけかもしれない。

戦場とは無縁な彼女がその疑問を抱いたのかが気になって、俺も質問で返した。

会話が噛み合わないとわかっていても。

「どうして、そう思う。」

「…貴方と私、雌雄は違えど、姿形が似ていますので。」

俺は彼女の答えを聞いて、新たな発見をした。

エルカの頭髪に、視線が行った。

髪の色は、俺と同じ白髪だった。

癖毛がやや左右に広がる俺とは違って、セミロングの彼女の毛先は綺麗に下ろしていた。

気づいていた、はずだ。

彼女の髪色が白いのを、初めてお目にかかった時に知った。

移動中の間でも、彼女の故郷の候補をいくらか考える時間はあっただろうに。

今更、衝撃を受けていた。

俺は1つの推測に辿り着いていた。

「お前は…どこの出身か、わかるか？」

答えを確かめる為に、エルカの口から吐かせようとしていた。

彼女の表情に深刻さが増す。

あまり自分の正体を悟られたくないのだろう。

彼女はあえて、星の名前を告げなかった。

その代わり、俺の想像がつく内容を述べた。

「あなたの故郷と、同じでした。挨拶した時に一目見ただけで、気づいておりました。」

「両親の顔を覚えていないんだろう？」

「女将から教わりました。私の故郷の星は顔立ちが綺麗だから、化粧は薄めですよと。」

すなわち、素の状態でも見た目は全く変わらないのか。

だとすれば、この《メス》は相当可憐な美少女である。

これは俺以外でも、《オス》ならば興奮を覚えるだろう。

あとは話術さえ磨ければ、品格のある娼婦に昇格するかもしれない。

当の本人が、それを望んでいるかは知らんが。

夜を賑わす演者の身分は、到底低い。

底辺のトップに君臨したとしても、決して喜ばしいものではない。

内情を知らない赤の他人からの評価が高くない。

褒め称えられる高貴な存在が少なからずいるこの世界では。

好評の感想を、何の考えもなしに述べるのは良くない。

彼女に対して、声を出さなかった。

会話の引き出しが少ないと、辺りの静寂さが増しやすい。

暖炉がなければ、室内でも寒気がする。

華やかさが売りの《メス》で繁盛するような店には、相応しくないだろう。

だが俺には、今の空気が心地良かった。

任務続きもあってか、自分の身体に疲労も蓄積されている。

軽く眠気もする。

眠りの世界へ誘いやすいというのは、ここはとても癒される空間なのだろう。

半分うとうと落ちそうになった時、《メス》の声が聞こえてきた。

暖かい部屋にいる《メス》は、エルカしかないない。

「あの…大丈夫ですか？」

声に気づいた俺は、ハッと睡魔から覚めた。

歪んでいた背筋を伸ばした。

エルカが不安そうに俺を見つめていた。

具合が悪いとでも、思われたんだろう。

そうじゃない。

疲労は溜まっていても、体調不良まで深刻には至ってない。

俺は否定した。

「いや、大丈夫。ちょっと眠気がしただけだ。」

「それなら、よかったです。酒が苦手でしたら、代わりの飲料を用意しますの
で、おつまみだけでも…」

「ありがとう。飲めるのは飲めるが、好みでないだけだ。これを飲み干せば、
アルコールの含まれていない飲料を頼みたいが。」

「かしこまりました。」

エルカが正座の姿勢を崩した。

飲料とおつまみでも用意しようとしたのだろうが、今は必要なかった。

俺とエルカを挟んで、机は配置されていた。

机の上には、2、3種類のおつまみと酒の小瓶とグラス。

水の入ったボトルまで置かれていた。

追加の注文は、十分だった。

「これだけあればいいさ。完食した頃合いに物足りなければ、こちらから伝えるよ。」

「そうですか…、でしたら、その時はお願いしますね？」

エルカは納得して、正座の姿勢を戻した。

物音も、鎮静化した。

どこか寂しさを感じる雰囲気に戻った。

出生にまつわる話を振ったから、エルカは気を悪くしているのか…。

沈黙が続く中、再びエルカの方から口を開いた。

「あの…。」

重たそうに、俺に話しかけてきた。

「俺は気に触っていないし、気楽に話してもいいぞ？」

「申し訳ございません。忠告されているので、どうしてもこのような口調になってしまうのです。」

…こんな商売も、大変だな。

どんな仕事でも、楽な仕事はないが。

話の続きを、エルカに委ねた。

「その…うまく言葉にできませんが…。私はこうして、あなたと出会えた奇跡に感謝しております。」

「奇跡…。」

「大袈裟でしょうけれども…今までプラージャの民以外の生物に出会った事がなくて…。」

「生まれはスイル、なのにか？」

「そもそもご指名すらも、稀の出来事でして…。」

…目が腐っているのか、プラージャの民共は。

彼女に対する評価に、腹が立っていた。

怒りをぶつける予先がないので、外見ではおとなしさを装った。

厚化粧の醜い《メス》が、そんなに尊敬の価値があるのか？

己の美の磨きを自慢したいのか？

身だしなみなんぞ、誰かと面会するのに必要な、最低限のマナーだ。

醜悪な《メス》に踊らされる《オス》も《オス》だ。

当たり前の作法をしている者を、チャホヤもてはやす。

よそ者なんて全く眼中にない。

いつまでも些細な交流をおろそかにしていると、いつかしっぺ返しが来るぞ。

自分の故郷ではない星の行末を心配しても、意味なんてない。

俺達の部隊なんぞ、即座に別の星に移れるのだから。

だが、目の前の娘は、そうもいかないだろう。

気に入ってしまったのなら、罪を犯しても連れ出したいのは山々だ。

俺が変わり種の、《同調性》とは無縁の単独行動型のHRだったら、強引に手を引っ張っただろう。

しかし、俺にも仲間が存在がある。

実績を積んで、自然と部隊のリーダー格へと成長した。

星の破壊なり施設の壊滅なりと物騒な任務ばかりこなしてきたから、良い成長とは程遠いが。

部隊の仲間も、俺と同じスイル出身のHR達だ。

自分も同じく辛い苦しみを味わってきたから、彼らの悲惨な境遇もよく知っている。

せめて、俺だけでも彼らの心の支えにならないといけない。

だから、俺は彼女を救う事は不可能だった。

そもそも、この《メス》の店は、権力者の紹介で来たんだ。

自分の個人的感情で動いては、今の権力者にクビを切られてしまう。

悔しさは込み上げてきている。

でも、しょうがないのだ。

手を出すのを、堪えるしかない。

自分に我慢を言い聞かせていると、またエルカから話しかけてきた。

「今日は、とても嬉しかったです。」

嬉しい…？

「何故なんだ？」

「同郷の人に会えて、ご指名を頂けて…感謝の気持ちでいっぱいです。本当に、ありがとうございます。」

エルカは俺に対して、深々と頭を下げていた。

一瞬だけ、彼女の目元から頬へと流れ落ちる雫がキラリと光った。

ああ、どうして。

この《メス》を見ていると、別の意味で邪な感情が芽生えてしまう。

一体どのくらいまで、俺は辛抱できるのか。

この場で、正気が保てなくなってしまうのでは…。

そんな風に自分自身に対する危機感を募らせていた時、他の《メス》の声が聞こえてきた。

「お帰りですわよ！マル口様！」

寂れた個室にわざわざ、この店の《メス》の従業員がやって来た。

ああ、やっぱり比較すると…エルカよりも酷い化けの顔だ…。

憂鬱さを覚えながらも、俺は立ち上がって、権力者達と合流した。

★★★

天王星圏ブラージャは数ヶ月後、瞬く間に滅びた。

それも当然か。

自分達の星以外を蔑む種族に、恩恵など与えられないのだからな。

勝手に消えて無くなればいいさ。

この星の権力者に雇われた俺達がどうなったのか？

簡単だ。すぐに別の星へ移っていった。

同志達の一部から情報を得て、すぐに新たな権力者と契約を結んで、変わり映えのない新生活をスタートさせる。

H Rは虐げられている立場なら、簡単に拠点を移せないだろうと疑うかもしれない。

当の昔に最初の関門を潜り抜けた俺達に、怖いものはない。

強いて言えば、不慣れな『高熱』ぐらいだ。

火さえ、炎さえ立ち塞がらなければ、俺達は耐え凌げれる。

俺と同志達は、別の星のある建物内にて、少しばかりの仮眠を取っていた。

俺はあまり、眠れそうになかった。
ある光景の記憶が、ふと甦ってしまった。
もう、崩壊した星には…帰れないのに。
涙を溢しながらも、笑顔を見せる若い《メス》の行方を、心配してしまった。
星に戻っても、再会を果たせないのに。
俺は泣き崩れる姿を、晒さなかった。
同志達に余計な気を遣わせてしまうから。
だから、ぼんやりと薄暗い部屋の中で、彼女の名前を呟いた。

「エルカ…。」

当然、側にいない生物から返事はない。
静かに呟いたから、同志達も目を覚さない。
ただ自分自身が、侘しさを感じるだけだ。
店の者達と共に逃げていると思いたい。
だがこき使われているのは、そのままだろう。
連れ出せない、と決めてしまったのは自分だ。
自分の選択が悪いんだ。
もしも彼女がこの世にいないければ、俺に呪いかかるだろう。
時がくれば、俺は呪いを受けよう。
不幸を考えすぎても無駄だ。
新たに舞い込む任務に支障をきたしてしまう。

今は、眠ろう。
そうだ、俺は冷徹なHRだ。
ならば今まで通り、冷徹になればいい。
無慈悲な俺に、呪いを与えてくれるなら。

短編19

欲望の日

苦しい、苦しい。

得る物が何もないと、こんなに息苦しくなるなんて。

自分は孤独じゃない。

ちゃんと、家族が側にいてくれた。

でも、『愛』では満たせない。

暖かいぬくもりに包まれて眠ろうとしても、冷たい風は隙間から入ってくる。

『お前に恵みは与えんぞ。』と囁かれているようで。

眠りの時間でも、疲れは取れなかった。

もしも今、得る物に身を包まれていたのなら、こんな惨めな思いをしなくてもいいのに。

このまま、寒さに当たる生活を送り続けたいといけないうのか…。

それは、嫌だ。

あれが欲しい、これが欲しい。

それを願うのは、悪なのか？

違う、至極真つ当な感情なんだ。

知性を伴う生物には、潜在的な物欲があるんだ。

俺は、間違っていない。

絶対に手に入れてやる。

嘲笑う奴らを、見返してやる。

覚悟しておくんだな。

来る時が来るまでは、俺は我慢する。

それまで、せいぜい楽しんでおけよ？

★★★

火星圏タレスは、空気の悪い星だった。

だから、みんな長生きしない。

長寿の者ですら、50年も生きていれば十分、であった。

原始地球人でも…そうそう変わらないだろうが。

いや、退屈すぎる学校の授業で聞いた事はある。

『原始地球人は健康面の管理や医療技術の発展により、長寿命化した。』と。

おかげで原始地球人は、半世紀も長生きする者が増加していた。

タレスなんて、50代まで生きてると長寿命だと驚かれる。

大抵は、30代か40代手前で消える。

酷い奴なんか、20年も持たないのもいるんだ。

空気が、悪すぎるんだ。

勉強して分かった事だが、この星の窒素と酸素の割合がおかしいんだ。

3:1か4:1ぐらいの割合なんだが、酸素が薄いんだ。

9:1の数値を観測した時もあったぐらいだ。

酸素の割合が低すぎる。

火星圏の星々は原始地球に近いのばかりだ。

生物も地球人に似た二足歩行の猿達が支配している。

呼吸するのに、肺が必要だ。

肺に酸素が十分に行き渡らないと、時折身体がしんどくなる。

どんだけ体力有り余った健康体でも、重さを感じる。

重力にも引っ張られているから、余計に過酷さを強いられていると思うでしょう。

まだガキだった俺は、親の手伝いに付き合わされた。

買い出しを任されて、外に出ている。

とっとと帰って、座りたいもんだとつくづく思った。

買い出しの途中、トボトボ歩いていると、1枚のポスターに目が行った。

中身は、労働者の募集を募るやつだった。

しかも、仕事内容は製造関係という、下流民がよくやる作業だった。

「ケツ、誰でもできる仕事だから、報酬も薄いんだよなあ。」

社会の理にケチをつけても、時間が過ぎるだけだ。

俺はポスターの周りから、離れようとしたんだが…思わぬ所に目が行ったんだ。

俺は、募集のポスターの数字の大きさに、目を見張った。

地球のアラビア数字ではないが、俺達の星では『数字』だと認識できる文字だ。

ソイツが他の文字と比べて、一際大きいんだ。

文字のデカさばかりに気を取られるな。

要は、報酬の金額だ。

凝視し続けると、俺は呆気にとられてしまった。

1回に支払う報酬が、高い。

わかりやすく言えば、ウチの家の生活費の6ヶ月分を、一度に支払うみてえなんだ。

コイツは、期待してもいいな。

俺は買い出し途中なのに、ポスターが示した場所へ向かった。

★★★

訪れたそこは、立派な建物だった。

タレスの暗い雰囲気にも染まる事のない白色が、美しく映えていた。

星内にいるというのに、別世界に来たみたいだなあ、と錯覚した。

俺はただ、立ち止まって見上げるだけだった。

荘厳な建物を眺めていたら、近くの《オス》が俺に寄ってきた。

服装を見れば、ピシッとした制服を着てやがった。

見張り役か、とガキの俺でもわかった。

「そこで何をしている？」

自分の身分が高いんだろうか、俺に対して見下すように聞いてきた。

なんかイライラするんだが、感情を昂って牢屋に放り込まれるのはごめんだ。

ガキの分際でも、俺は冷静さを見失う事はしなかった。

とりえず媚とけばどうにでもなる。
実際、興味があつてここに来たんだからな。

「実はポスターを拝見しまして…。」

「工員希望か、随分と小童だが…。」

ガキはお断り、ってわけか？

面倒な奴らだなあ。

口にしてしまうと自分の行動が無駄になっちまうから、声に出さなかったがな。

訝しむように俺を見る見張り役。

疑う時間は、そんなにかからなかった。

「…わかった。上に申請しておこう。そこで待っている。」

見張り役はそう言ってから、俺に背を向けた。

この口ぶりだと、一応考えてくれるらしい。

断られるかもしれない場合も懸念したが、俺の心は期待で満ち溢れていた。

ここで雇ってもらえれば、欲しいモンがわんさか手に入る。

そんな夢を見れるだけでも、俺にとっては生き甲斐になれる。

申請の許可は降りた。

人手不足だったそうで、猫の手も借りたいらしい。

すぐにでも働きたいと申し出たら、見張り役が即座に案内してくれた。

立派な建物の中は、工場というより研究室と呼ぶ方がしっくり来る構造になっていた。

『モノ』の製造工場のように、ライン工程で組まれてはいなかった。

生物を丸々包み込むカプセルが、だだっ広い空間で何十基も配置されていた。

どのカプセルにも、生物が1体ずつ入っていた。

立ったままで、眠ってはいいるが…。

解剖学の授業でもしてるのかってくらいに、生物達の身体が弄られていた。

メンタルの弱い奴なら、あっさりと恐怖に怯えてしまふに違いない。

まだ身体つきが小さいくせに、胴体部は開かれていた。

俺は別に、怖さで泣き出してはいない。

だが、驚きと疑問はあった。

一体、これは何をしているのか？

何故、小童なのに大層な手術でも受けているのか？

開いた口が塞がらなかった状態の俺に、案内してくれた《オス》が言った。

「『改造』だ。より強固な戦士に仕立て上げる為の。」

「改造…？ どうしてです？」

「コイツらは特殊なガキなんだ。機械と生物の間に生まれた異端児さ。」

異端児？

変わっている奴だとは想像がつくが、こんなに多いのか？

「《ヒューマニティー・ロボティクス》、通称HRと呼ばれているんだ。どうかの星のロボが暴走して、《メス》の生物を襲ったのが誕生のきっかけだな。」

実際はとてもおぞましいみたいらしいがな、と案内役の《オス》が言った。

俺はへえ…、と率直な反応を示すだけだった。

この薄汚い星の中で、知らない世界が広がっているもんだから。

製造の工場を幾つか巡ってきたのに。

「どうだ？ 怖くなったか？」

案内役の《オス》が聞いてきた。

「怖い…？」

「サラッと見ただけで逃げ出す輩もこれまでにいたからなあ。募集をかけてもなかなか来ないんだよ。」

案内役に自分の感想を尋ねられた俺は、改めて『改造』現場の光景を見た。

この景色に『恐怖』を感じ取った者ならば、目を逸らして去る決意をするだろう。

俺は、2度もチェックしていた。『恐怖』など、特に抱かなかった。

俺の中には、好奇心が芽生えていた。

長生きできず、貧しい生活を送るだけの人生になるのかと、ずっと思っていたのに。

世界にはまだまだ、面白い試みをやっている所がある。

それを知れただけでも、今日は大収穫だ。

「全然、怖くないです。むしろ…興味が湧いてきました。」

俺は自然と、笑みを浮かべていた。面白いモンを、見つけたから。

「それは、真か？」

案内役が聞いてきた。要は最終確認も兼ねているんだろう。

こんな所、滅多に部外者に見せられるような光景じゃないのは、知識の乏しかったガキの俺でもわかる。

離れるのならば、今のうちだ。

だが俺は、否定の言葉を出さなかった。

「嘘、偽りはございません。」

「…そうか。ならばついてこい。もっと奥まで案内しよう。」

そう言った《オス》は俺に背を向けて、歩き出した。

少し間隔が開いた頃に、俺はその《オス》の後ろを歩いた。

★★★

それからの手続きなんて、あっという間に終わった。

家族には、金額の保証があると伝えた。

すると、みんなとても喜んだ。

その代わり、俺はいなくなるけどな。

えらく大層な建物の工員となった俺は、最初のしばらくは、扱かれた。

痣が残っちゃうんじゃないか、って位に鞭で強く打たれた。

よくよく考えてみれば、特殊な『生物』を扱っているんだ。

いくら扱いの程度は自由といっても、命まではお粗末にしたいだろう。

後の説明で、

『彼らはこの星の貴重な戦力となる』

と教わったからな。

すごく、勉強になった。

単純労働と家事の繰り返しの惰性で生きてきた俺には、この上なく。

生物の体内の仕組みの細部ですら、俺の目には新奇に見えた。

《HR》と呼ばれた俺と同世代か年下ぐらいのガキの身体内部を弄る範囲は、年月を経て拡大していった。

金属の部品やら、薬の知識まで豊富になっていた。

作業をしているだけで、俺は研究者にでもなれるんじゃないかと自惚れていた。

自惚れていたと言ったが、『研究者になれる』のは、嘘ではなかった。

10年も長い施設内で働いていると、責任も負うようになる。

それは、《HR》のガキを丸々自らの手で改造して、立派な戦闘員に仕立て上げる事だ。

上からの指示など一切ない、俺だけの改造手術。

つまり、その《HR》は俺の手で仕立て上げるオリジナルの戦闘員になるわけだ。

俺の心は、踊った。

数名のガキを改造して、上の奴らに見せた。

試行錯誤を何度も繰り返したんだ。

自信はある。

上の評価は、中々の上々であった。

俺の施しがなされた《HR》達が、次々と戦場に投下されていった。

ただ…それを見送るだけだった。

当初、改造手術に昂っていた俺だったが、年月が経つにつれて段々と意欲を失わせていた。

どうして楽しみが激変していったのか…。

初めは疑問を抱くだけで止まっていた。

だが、社会の仕組みとリンクしていくと、自ずと答えが見えてきた。
報酬は十分満たしている。
貰った額の半分を家族に支払っている。
満たされないのは…地位や名誉だった。
血や呪いで汚れてしまった《オス》には、輝かしい栄光なんて授けられない…。
期待は、していなかった。
昇格できないだけなら、俺は耐えられたんだ。
いつも違和感を覚えたのは…完成品をお披露目する時だった。
俺は使用した部品なり、施術工程なり逐一説明している。
なのに、俺を雇った上の奴らは、《HR》における改造施術について、無知だった。
勉強しているのかコイツら、と内心腹が立ったぐらいに。
研究所のトップに近い奴らが、何にも知らない。
こんな奴らが施設のトップでいいのか？
こんな奴らの私利私欲を満たすだけの駒で、俺はいいのか？
そう思うと、俺は自分自身が情けなくなった。

だから…謀反を計画した。

★★★

呆気なかった。
無知な生物を騙して蹴落とすなんて、こんな簡単にあっさりできた事に。
初めのうちは、自分だけで反逆の計画を進めていた。
コソコソと成り替わりの準備を進めていると、いつかは見抜かれる。
見抜いた奴らは味方として引き入れるか、始末した。
開発分野以外では非力な俺が逆らえる力があるのかだと？
あるさ、俺には…別の味方が。
今まで改造を施してきた《HR》に、俺はチップを埋め込んだ。

俺の言うことを聞くように、仕込んでおいた。

指示系統を、『独立』前から開発したのさ。

《HR》をコントロールして、俺に刃向かう輩が消え失せた時は、もう20年も生きていた。

タレスの寿命と言われる『30年』まで、10年は切っている。

晩年の歳だし、若手の奴らに引き継ごう…なんて考えなかった。

限界？俺の頭にはなかった。

そりゃあ、肉体労働していないから、疲れる頻度が減ったからな。

謀反に成功したら、『王様』は俺が君臨する。

周りに有無は言わさない。

俺が雇われた立派な建物は、[レッド研究所]と改名した。

ファミリーネームそのままつけた。

ネーミングを考える知恵まで働かせるのは面倒だったからな。

この施設内での作業も変わらない。

付け加えたとしたら、『取引』だった。

今まで[ここ]は、《HR》のガキをそのまま回収して改造、するだけだった。

俺に成り代わってからは、『選別』を開始する。

上層部が溜め込んだ資金で、いい材料を買うことに決めたんだ。

『回収』だけでは、性能の悪い《HR》も生まれる。

責任持って改造するなら、先に材料を『選別』させてほしいんだわ。

こうして、俺は運命の《オス》に巡り合った。

★★★

商人共が俺の元へ続々とやってきた。

奴らから詳しく話を聞きながら、ガキの『選別』をする。

引き取ったガキ共はまず、健康状態の検査を行う。

その時に俺は、目を見張った。
検査自体は至って普通にやった。
最初は生物の手を借りながら全員の診断を行った。
盗人が現れるトラブルが起きてから、他の同郷の者を信用できなくなった。
俺は検査用のロボを数台開発し、データ収集を任せた。
データは精密な装置に集積される。
逐一、俺はチェックしていた。

一際、身体能力の数値が一回り飛び抜けたガキがいた。
12番目に『選別』した《オス》だった。
身体能力のみならず、知能指数も高い数値が出た。
商人曰く、『賢い《メス》から産まれた《HR》は、その遺伝子を引き継ぐ。』らしい。
俺は特別なガキを手に入れたようだ。
コイツには名をつけた。
『ラルク・トゥエラー』と。
商人の内の1名が、ご鼻屑にして下さっていると菓子をくれたんだ。
12つ入りの甘い菓子。
箱には他星の文字で『ラク』と書かれていた。
どちらも捻らせて、くっつけて…有望な《HR》に名付けた。
最終検査を終えてから、改造施術に取り掛かった。

★★★

『ラルク』は完成後の試運転も異常はなかった。
根暗な印象の《オス》のガキだが、《HR》なんてどれも似たようなものだ。
表情の変化なんて、ありゃしない。
だって、自分達が惨めな存在とはっきり身に染みているからな。
『王様』に君臨してからだが、俺は興味を持ち始めている活動があった。

他星の侵攻だ。

タレスで《HR》の改造が行われた背景には、星の防衛があった。

他星から派遣される《HR》共は、権力者やそれに準ずる者からの命を受けて、星を滅ぼしにかかる。

当然、他星も愚かではない。

改造し巨大化できる《HR》で、民達や建造物を一気に消そうとさせる。

機械の構造を持たない生物がかなうはずがない。

どうしても《HR》同士の対決は免れない。

星の存続がかかっているんだからな。

俺も防衛目的で、雇われ時代からの《HR》で組ませていた。

ずっと守るだけの体制では、備蓄だけが減っていくだけだ。

進展など、ありゃしない。

存続まで考えるには、多少の改革も必要なんだ。

受け身ではなく、自発的な攻めが欠かせない。

『ラルク』の登場で、とうとう戦略を立てられるようになった。

ちょっぴり懸念も残っていたから、手始めに星…よりも小ぶりの基地の破壊を命じた。

情報があるだろうし、入手していた地図とかは渡しておいた。

俺は軍人じゃない。

効率的な攻め方なんぞ、全く知らん。

やり方は『ラルク』に任せた。

これで無理なら次の《HR》に期待しよう、と切り替えも早かった。

ところが、『ラルク』は俺の想定を遥かに超えた。

もちろん、良い方向にだ。

奴は基地だけではなく、その星全体まで滅ぼしてきやがった。

共に連れていった他の《HR》に戦利品まで持ち帰って。

戦利品は研究所の維持に必須の物質から、有名な特産品まで幅広かった。

特産品は度々来る商人共に贈与した。

喜んだ商人共は続々、俺の管轄外である商業分野も紹介していった。

タレス内の民達に案内しろと頼んだ。

研究所外から、俺を慕う奴らが増えた。

慕う奴らから、金を巻き上げた。

元から権力者たる行政機関もあったが、コイツらも俺の手腕を見て、何も物が言えなかった。

そして、実質俺が…火星圏タレスの権力者へと成り代わったんだ。

『ラルク』には次々と、他星の侵攻を命じた。

特にヘマもせず、成果を上げて帰ってきた。

それも、小手調べの基地の分を含めて、11回成功しやがった。

ただ、気掛かりな点と言えば…。

あのガキは民達を丸ごと消滅させる事まではしていないのが引っ掛かった。

つまり、ソイツらの生存を許したのと同意義だ。

その点について、俺は直接アイツに聞いた。

アイツは『ライフラインさえ止めれば、自然にくたばる』と述べた。

少しばかり気に食わなかったが、俺には決定的な武力への戦略方法は思いつかん。

戦利品も大量に持って帰ってくるし、復讐対策は別に考えりゃいい。

俺は無闇に『ラルク』の意向を変えなかった。

アイツにはタメ口を許した。

アイツには、『メス』を与えてやった。

アイツには…任務の許容範囲を広げてやった、苦なんだ。

12番目の星を滅ぼす遠征にて。

『ラルク』は、戻ってこなかった。

★★★

研究所に戻ってきたのは、『ラルク』の付き添いの《HR》だった。

こやつらも『ラルク』と引けを取らない改造を施している。

人数は多いに越したことはないからな。

俺は真っ先に問うた。

「ラルクはどうした？」と。

ありのままの質問が、口に出た。

付き添い共は、とぼけていた。

わかりませんと、首を横に振るだけだった。

己に、怒りの感情が芽生えた。

同行していた報告者共は、俺に対してさらに恐怖を抱いた。

怯えてしまって、口を慎んだ。

まあ、こやつらの処分はお預けだ。

まだ別の任務に回せる価値があるからな。

侵攻の要がいなけりゃ…これからのビジネスはどうしたらいい！？

最低限の貨幣さえ払えば、商人共は納得するだろう。

だがな、取引だけの薄っぺらい付き合いばかりでは、衰退は免れない。

俺は無人の小型衛星を飛ばした。

向かうは、12番目に潰す星、金星圏フェルホーン。

行方不明者の手がかりを探すにはまず、馴染み深い場所を当てるのが筋だ。

すなわち、『ラルク』を派遣した星。

換算すると2ヶ月かけて、外部から調査した。

衛星が記録した現象の数々。

俺の顔つきを凶変させる1枚があった。

『ラルク』が、フェルホーンの王女と仲睦まじい関係に発展している。

無口で無愛想な『ラルク』が？

一時期ストレスが溜まっていた時に、発散目的で接触行為をやっても涙が溢れるだけだった、あの可愛い《自慢の息子》が？

他星の王女に対して、微笑んでいる…！

フェルホーンはメイスから富を巻き上げている癖に、『平和』を主張するなど呑気な事してやがる星だ。

それに『ラルク』が転がり落ちた…。

《メス》の色気にやられたか？

不自由のない贅沢な暮らしに憧れたか？

送り出して以降、再会を果たしていないから、実際の意図はわからない。

ただ、これだけは可能だ。

《息子》が本気で寝返るつもりなら、奴をその場で処刑する。

城に忍ばせてこっそり倒す方法もあるが、奴は気づくだろう。

10代半ばのガキだし、感覚は鈍ってはいない。

公開処刑だ。

王女の目の前で、無様な姿を曝け出してやる。

11の星を滅ぼした【宇宙犯罪者】が、のうのうと平和主義に転じてんじゃないええよ。

タイミングは訪れた。

王女一行の地球降下の時、俺は兵を連れて直に降りた。

処刑は、失敗に終わった。

我々の祖とかのたまたま原始地球の一部でも破壊しまくったら、『ラルク』は守るだけで落ちると予想していたのに…。

奴は、息を吹き返した。

【ブラッドガンナー】は俺の部隊を粉々にしやがった。

逆転負けだと確信した俺は、ギリギリのところまで撤退を命じた。

《息子》の命も、地球も奪えずに。

惨めにさせられたのは、俺の方だった。

俺はなかなか立ち直れず、自室に引きこもった。
乱雑に置かれた部屋の物に、当たり散らした。
憎悪の念は、ますます込み上げてくる。
総力戦並みの兵力を使い果たした為に、再度の侵攻には限界があった。

しばらくは、偵察と開発に徹していた。
後から流れてきた情報は、俺に酷いショックを与えた。
王女エトラトル・フェルホーンは地球戦にて、天に召されたと。

もう1つ。
『ラルク』は地球にて宇宙侵攻への対策本部の幹部をしていると。
王女の件はともかく、星を潰して両手を真っ赤に染めた《犯罪者の息子》が躍進している、だと…？
俺は、孤独感が増す自室で、高らかに笑った。
赤い両目を手で覆い隠して。
ラルク！《自慢の息子》よ！
お前は俺に、どんだけ泥を塗れば気が済むんだ？
自分がしでかしてきた罪を棚に上げて、何故弱者の味方になろうとする？

許せん。許せんぞ…。
逃しはしない。
今は調整期間だから休めているだけだ。
処刑では物足りんなぁ。
やっぱり連れ戻して、永遠に俺の下でこき使わせてやる。
せいぜい、短い平和ボケを楽しんでおくんだな。
《自慢の息子》よ？

短編20 成長の日

転機は、突然やってくる。

自分の人生を、一生懸命に生きていれば。

何もない、と否定する者もいるかもしれない。

でも、それは気づいてないだけじゃないかと、私は思う。

日常のほんの些細な事でも、転機のヒントが隠されていたりする。

それに、敏感になれるかどうかが鍵となるだろう。

とてつもなく難しい行動だけだね。

偉そうにこうすればいいよという提案は、私にはできないだろう。

1歩前へ踏み出すのは、怖かった。

もしも、失敗したらどうしよう？

ネガティブな可能性を見出してしまうと、そう考えてしまう。

そんな時、背中を後押ししてくれる人がいれば。

誰かが支えてくれるのならば。

少しは、気が楽になる。

私は数少ない応援のおかげで、境界線の先に踏み込めた。

これからは私が築いてきた人生の一部を、話そうと思う。

私に訪れた、『転機』の話を。

まあ、軽く聞いてくださいな。

★★★

私は高校生になり、久しぶりに友達ができた。

元々決められた勉強はそこそこできた私は、進学率の高い高校に進めた。

中学時代の、馴染みのある顔ぶれとは全く異なっていた。

見知らぬ人達ばかりが、教室と廊下を歩き来していた。

不幸の時から中学卒業まで友達がいなかった私は、周りの子達と少し距離を置いていた。

輪に入るタイミングが、掴めなかったからだ。

高校に通い始めて2週間が過ぎた。

平静を装う目的も込めて、私は休み時間に読書をしていた。

この日だけは、特殊だった。

私に、声を掛けてきた女の子がいたから。

「その本、昔に賞を獲った作品が収録されている本だよな？」

「え？」

私は顔をあげた。

どうやら、今読んでいる本の中身をご存知のような口ぶりだった。

「…よく、知っているんですね。」

「私も本をよく読むんだ。この作者さんの初めての短編集だよな？」

「ごくありふれた日常風景の描写が丁寧だから、いつも読んでいます。」

また、今読んでいる本の中身に触れてきた。

読みやすいよねー、わかるー。

そんな風に言った彼女は、うんうんと頷いていた。

私の席の机の角に手を当てていた彼女は、本の問題から逸らして、ある疑問をぶつけてきた。

「何で、そんな丁寧に話すの？」

その質問は、私にとっては意外な内容だった。

なので、本の中身を知っていた事実と同様に、戸惑いを覚えた。

私は目上の人、または初対面の人に対しては、丁寧に話すよう心がけている。

こんな些細なきっかけで、いじめられてしまう場合もあるから。

実際、私は小学生の時にいじめを受けたんだし。

他人に対する警戒心が強くなるのは、仕方がない。

高校生になっても、心配性の婆ちゃんが私に1人で外出しないよう注意している。

今朝の登校も、下の兄が学校まで付き添ってくれた。

「接触機会のない人に対して気を払うのは普通、じゃないんですか？」

「私達、同じクラスなのに？」

…やっぱり私は同世代の人間とのズレが生じやすいのかなあ？

私は彼女との会話が続き、今読んでいる本の文章に目を落とした。

対して変化のない、日本語の縦書きの文章。

あっと驚くべきシーンなんてないのに、じっと目を凝らしている。

気まずい雰囲気になったと思ったのか、彼女はちょっとだけ焦っていた。

「ご、ごめん！余計なこと喋っちゃった？」

「いいえ。私…人の接し方がわからなくて…。」

その後の私は、うまく話せなくなった。

平常心を保とうと思っていたのに、やっぱり辛いと感じて、悲しくなってしまう。

当然、私の態度は近づいた同級生を困らせてしまうだろう。

ところが、予感は裏切られた。

「じゃあさ、君はそのままでもいいから…ちょっとお喋りしない？」

「お喋り…ですか？」

私は本を持ったまま、彼女の方へ顔を向けた。

まだ、気がかりであった。

話しかけてきた彼女との現時点での接点と云ったら、私が今読んでいる短編集の詳細をご存知という事ぐらいだ。

うまく、心地よいテンポで会話が弾めるのか…悩んでいた。

彼女を納得させられそうな会話の引き出しは、あるのかしらと。

でも、それは私の杞憂だった。

暗さが滲み出る私と対照的に、彼女は明るい光の女神だ。

不安を払拭させようと、笑顔を崩さずに説得し続けた。

「何でもいっよ！君が話しにくいんだったら、君が知っている話題を振ってくれたら、私は合わせてあげるから。」

フッフ、と彼女はニッコリ笑って、頭を右側に倒した。

…まだ疑心暗鬼な所はあるけど、この人だったら気軽に話しても問題ないかもしれない。

「じゃあ、お願いします。」

「おやまあ、ガチガチの返事だね…。うん、よしとするよ。私、山吹桃枝（やまぶきももえ）って言うの。よろしくね！」

「白井未衣子です。」

私達はお互い、自分の名前を口にした。

★★★

あの挨拶以来、私は桃枝と一緒に行動する事が増えた。

上の兄の通っていた吉川高校と同レベルかそれ以上の進学校である宮里高校。

白井家で通っているのは私1人だけだ。

桃枝の事を家族が知ったのは、私が自宅に紹介した時だった。

唯一、送り迎えしてくれる勇希兄ちゃんには、1度だけ挨拶したおかげで事前
に知っている。

たまたま、桃枝も放課後一緒に居残りしていた時だった。

携帯電話に連絡が入り、私は荷物を持って校門前まで向かった。

この時は桃枝も一緒に、他愛ないお喋りは長く続いた。

ゆっくり歩いていたら、自然と約束地にたどり着いた。

校門前では、下の兄が自転車を持って待っていた。

未衣子！と元気たっぷりの声を出して、右手をあげた。

私が近づくと、勇希兄ちゃんは驚きの表情を見せた。

「え、お前、その近くにいろの…。」

「ああ。私の高校の友達だよ。」

私はさっと告げた。

大袈裟な下の兄は、近所迷惑かと思わせるくらい大声を出した。

「ツンツンなお前に、友達ができたのかよ！？」

「失礼ね。寡黙な少女と言いなさいよ。」

「お前の場合、それよりも怖いからよお…。」

下の兄は、ため息をついた。

後ろで桃枝がクスリと笑った。

微笑ましいと思ったのだろう。

「仲、いいのね？」と彼女は言った。

私は否定しちゃったけど、顔が真っ赤だよと指摘されちゃった。

恥ずかしかったのかなあ。

下の兄には偶然紹介したので、今度は家族にも、と範囲を広げていった。

未だに私の単独の外出は認めておらず、勇希兄ちゃんと一緒に、桃枝を誘った。

実家の近所の駅前で待ち合わせして。

軽く笑いながらお喋りしていると、私の実家に到着した。

婆ちゃんの喫茶店は、まだ営業中だった。

勝手口から入らず、店の入り口をそのままくぐった。

営業中の喫茶店は、婆ちゃんがカウンターで動き回っていた。

爺ちゃんは靴職人で、夕方までは帰らない。

婆ちゃんだけが、私達を出迎えてくれた。

お昼前だと、お客さんは1人か2人ぐらいだった。

彼らは物静かな人達なので、会釈だけするとそのままコーヒーを飲んだ。

ご近所の高齢者だと知っているの、今は気にしていない。

婆ちゃんは桃枝を、温かく出迎えた。

喫茶店も接客業なので、愛想良く接するのは慣れている婆ちゃん。

けれど、今日に至っては、私以外の家族でもびっくりするくらい、喜んでくれた。

理由はわかっている。

私に久しぶりの友達ができたからだ。

桃枝はとても明るくおしゃべりできるタイプで、歳が倍以上離れている婆ちゃんと気軽に話してきた。

途中、婆ちゃんは桃枝に私の過去について短く話した。

桃枝はそれを聞いて、衝撃を受けていた。同時に納得も。

「大変、苦勞したんだね、未衣子。」

桃枝の感想だった。

普通だったら、今更同情なんてされても困るなぁ、と喜べなかったのに。

桃枝に言われると、なんだか嬉しさを覚えた。

きっと、久しぶりの友達に共感してもらえたからかもしれない。

素直にありがとう、と新しい友達にお礼を述べた。

桃枝を誘ったこの日の午後は、プチパーティー状態となった。

婆ちゃんがジュースやお菓子を出してくれた。

私も婆ちゃんの手伝いをした。

配膳の手際の良さを、桃枝は褒めた。

こんな事も言っていた。

「未衣子は、自分で弁当持ってきてるんだよね？」

「うん。私が作っているよ。」

弁当の持参についても、凄いなあと桃枝は感動していた。

一応、学校でも一緒に食べる機会があった。

けど、大抵学校の事とか読書の事で話題になるから、家の話はそこまでなかった。

家の訪問で、本格的に私の経歴を紹介していた。

それから時は経って、上の兄である和希兄ちゃんや、爺ちゃん。

たまに帰ってくるお父さんも、桃枝に会わせた。

お母さんの事も聞かれたけど、私が幼い頃にいなくなったと説明したら、桃枝はシュンと落ち込んだ。

友達である桃枝が気を落とす事はないのだけど、色々と私に対して共感を持ってくれるのには嬉しかった。

小学校中学年から中学卒業までは、こんな温もりなかったのに。

桃枝は私の家族と仲良くしてくれた。

特にトラブルなど起こさず、穏やかに接してくれた。

桃枝は1人っ子で、両親と3人暮らし。
大家族で賑やかだと、彼女は感じていた。
かなりの笑顔で、楽しんでいるんだから。

高校生活。
大学受験が控えている、3年間。
勉強も学校行事も、私は常に桃枝と一緒に励んでいた。
大学の進学先も、桃枝は私と同じ大学を選んだ。
国公立だし、勉強大変だよ？と私が心配していたら…。
「勉強教えてくれたら、私頑張れるから！」
と手伝いをお願いされた。

★★★

一生懸命勉強して、志望の大学に2人とも合格した。
私は文学部で、桃枝は社会学部の学生になった。
私は判定がよかったので、難なくスルーできた。
桃枝は…かなり努力したと思う。
何度も手伝いを頼まれて、覚えられるまで繰り返しやっていた。
その分、桃枝は私に色んな本をプレゼントしてくれた。
小遣い、少ない筈なのに。

2人で助け合いして、同じ大学に進学できた。
文科系の学生なので、学部が違ってても似たようなスケジュールになりやすい。
おかげで桃枝とプライベートで遊ぶ時間も取りやすかった。
桃枝は誰とでもすぐに仲良くなれる性格で、大学に入ってからでもそれを発揮した。
私にもたくさんの同世代の人間を、紹介してくれた。
桃枝が紹介してくれた人間は、男女比の割合は、女性の方が多い。

だから飲み会より、お茶会に誘われるのが多かった。

兄達や祖父母が飲み会の参加を阻止するのも理由の1つだけ。

4、5人で集まったお茶会。

大学近くの行きつけの喫茶店で、私達はコーヒーか紅茶を飲み、手作り焼き菓子を嗜んだ。

突然、私に聞いてきたのは桃枝ではなく、お茶会のグループの中の1人だった。

「未衣子さん、未衣子さんは読書が好きなのよね？」

「…はい、そうです。」

高校まで家族以外と触れ合っていなかった私は、まだぎこちない対応で接していた。

桃枝と戯れるようになって、少しは人慣れしてきたけど。

私の趣味は読書だと、自分から言ったり、桃枝が紹介してくれたりで、周りの人間に広まった。

今尋ねてきた女性も、桃枝から聞いたんだと思う。

突然そんな質問を今しても、不思議ではなかった。

他の人達にも、私の読書好きは認知されているから。

だけど今回、尋ねてきた女性は、違う話題に触れたのだった。

「書く側になりたいとか、思った事は無いの？」

「書く側…？」

私は落ち着き払っていたけど、この発言にはちょっと驚いた。

考えが、飛躍していると感じて。

小さい頃、いじめの経験があって…同世代の子供達と馴染めなかった私。

読書で存在するかわからない者達との静かな触れ合いが、唯一の繋がりだった。

活字を1字1字、目を通すだけでも、没頭できた。

読む事に専念しすぎて、『書く事』には目を向けなかった。

だから、彼女の問いかけに、目を見張ったんだと思う。

新たな視点の、気づきができたから。

「ごめんなさい。今まで、そんな事考えていなかったの…。」

「あ、そうだったの？こちらこそ、ごめんね？変な事聞いてしまって…。」

変な事、ではない。

読書が好きで『文章を書く側』にまわる人もいるんだし。

私自身がそんな考えを持たなかっただけだから。

でも、『書く方にまわる』、か…。

私が読む本は小説やエッセイばかりだから…『物語』をメインに書きそうだ。

ちょっと、面白そうかも。

「素晴らしい提案を、ありがとう。」

「え？私、何気なく聞いただけなのに…。」

「いいえ。私の中で、挑戦してみたいと、今思いましたので。」

お茶会の場で、ちょっぴり宣言した。

周りの女子大生達は、キョトンとしていた。

でも、桃枝が気づいて、

「よし！私、応援するよ！」

と後押ししてくれた。

些細なお茶会での出来事。

これが、私の人生の、転機になった…。

★★★

お茶会での決意表明から、数日経った。

私は家に帰ると、本よりもノートを開く回数が増えた。

『物語』を書くための、プロットを練るために。

よし書くぞ…と意気込みを入れたのはいいのだけど。

実際、何を書いたらいいのか、よくわからなかった。

なので、今まで読んできた本から、ちょっとした話題をピックアップしていった。

ノートにつらつら書いていったのだけど…いまいちピンと来なかった。

日常風景の描写ばかりで、新鮮味が感じられなくて。

飲食物とか生活用品の言葉の羅列で、変だなあ…と思い込んでしまった。

面白み、新鮮味が感じられないなあ…。

そう思って、ノートにずっと、ペンでツンツンしていた。

ペン先でツンツンしていたら、黒い点がいくつも出来ていた。

ただの点の集まりなのに…。

私には何か、1人の男性像が出てきたように錯覚していた。

よく、インテリアの家具の模様とかで全く関係ないものと見間違えてしまうような。

あれと同じ感覚だった。

ただの錯覚で作り上げられた男性像。

でも、これが私の『物語』をつくる材料と…なるかもしれないと思った。

ノートに次々と書き込んだんだ。

『この男性と、何をしようか?』を。

この男性とご飯を食べる。

この男性とお散歩する。

この男性と勉強する…。

男性と、男性と、男性と…。

私は『やりたい事』ばかりに、気を取られていた。

他の情報なんて、のけものにして。

せめて…プロフィールの設定ぐらいは、作らないと…。

どんな人にしようかな?

髪の色、身長、彼自身の趣向…。

ノートの1ページ分、単語の散らばりでぎっしり埋まった。

まだまだ書き足りなくて、もう1ページにも特徴的な単語をつらつら書いていた。

設定が定まってきた感覚は、まだない。

でも、『何気ない点の集合』から生まれた男性の妄想をするのは、楽しかった。

自宅の部屋で、『物語』のアイデア用として購入したノート。

全てのページを使い果たして、新たにノートを購入した。

★★★

学園祭は、大学でも存在した。

この祭りは、学生達があらゆる企画で、他の学生やそれ以外の人達をもてなすイベントである。

ご来場頂いた人々を、楽しませる為に。

私はこういったイベントには『楽しむ側』として傍観しているのが多かった。

しかし、今回の学園祭では、『楽しませる側』に回った。

なぜなら、私は『物語』を書き上げたからである。

学園祭は有志で、自分のみでの展示も可能ではある。

でも、私は桃枝の計らいで、文芸のサークルにお世話になる事になった。

サークルの人達は、とても親切だった。

学園祭で初めて触れ合う私に対しても、優しく接してくれた。

私はサークルの方々にお世話になっている時に、本を2冊頒布した。

『物語』を、2作品分。

内容自体はほとんど変わらない。

『男性の人と何かをするお話』である。

1つは『男性と一緒にご飯を食べて、気を養う話』。

もう1つは、『落ち込んだ時に、男性に励ましてくれる話』。

…なんかちょっと、図々しいような内容だけど。

沢山の来場客で賑わう学園祭。

私の本を手にとって、軽く読んでくれる人もいた。

仕舞いには、購入に踏み込む、ありがたい人まで。
十数本刷られた本は、時間が経つと減っていった。
完売とまではいかず、それぞれ2、3冊が終了時に残った。
私は見本用の本をすでに持っているの、桃枝やサークルの人達にあげた。
少しだけ読んでくれていたけど、彼女達は大喜びだった。
たったの2冊しか、私は本を作り上げていない。
こんなちっぽけな作品でも、感謝の気持ちを伝えてくれる人がいる。
私は感情を、中々表に出さないタイプだ。
でも、うまく笑顔を表現できなくとも、私の心の底では、喜びで満ち溢れていた。
これが、下の兄が言った、『活力』なのかもしれない。
私はそう信じた。
学園祭以降は、普通の大学生活に戻った。
講義を受け、同世代の学生達と仲良く会話をする。
中学時代には思いつかない、人と触れ合う毎日が続いた。
そんな私に、吉報が届いた。

★★★

私の元へ、誰かが訪ねに来たのを知ったのは、婆ちゃんからだった。
婆ちゃんが喫茶店を営業している時に、お客さんとして来ていた人物らしい。
そのお客さんが、婆ちゃんに聞いたんだって。
婆ちゃんはそのお客さんをテーブル席に案内した。
他の人に聞かされたくない話をするみたいで、入り口とは逆の奥の方へ。
そのお客さんは先に、コーヒーを頼んでいた。
「お待ちせしました。」
私はそのお客さんの席まで来て、彼に声をかけた。
おおよそ、40代くらいの男性だった。
若々しい私の父（50代）と変わらないくらいで、顔のしわは少なめだった。

仕事用のスーツをきちんと着こなしていて、まさに『ビジネスマン』といった感じの男性だ。

他の同性のお客さんのように、髭が剃り残ってもしなかった。

こんなに清潔感のある男性がいるんだなあ、と私はしみじみ思った。

「君が、白井未衣子さんだね？」

「はい。そうです。」

男性が私の名前を言ってきたので、私は肯定した。

テーブル席の前で立っていた私。

婆ちゃんの声掛けがあって、ようやく席の向かい側に座った。

婆ちゃんが私のためにカフェラテを持ってきてくれた。

婆ちゃんは店の切り盛りで動き回っているので、男性の相手は私だけである事になった。

ようやく、男性から自分の正体を告げた。

「初めまして。私は網田出版社の江堀と申します。」

ご丁寧に、名刺まで渡された。

出版社だから、本を発行する会社だと大体は掴めた。

となると、原稿の依頼でもしに来たのだろう、私に。

私がプロの作家ならば、仕事の依頼だと判断して、迷わないんだけど。

この時の私は、ごくごく普通の大学生。

出版社の人に声をかけられる機会なんて、ないはずだ。

もう少し、動向を探ろう。

「あの…私をご指名したいのですが、一体どうしたんですか？」

ひとまずストレートに、男性に尋ねた。

オブラートに包む話し方は、あまりよくわからないから。

読書や執筆経験あるのに何言ってんだ、ってつつこまれそうだけど。

だけど、目の前の男性は、江堀さんは私の質問に対して、優しく答えた。

「君の御本をですね、私は学園祭で手に取りまして…。」

「学園祭に、お越しになられたんですか？」

「私の母校でしたので、久々に足を運んだんですよ。文芸サークルの方へ向かったら、君の本を見つけたんです。」

学園祭に来てくださった…。

しかも、私の大学のOBにあたる人だった…。

私には彼と会った記憶がないのに…。

でも、私の本を、少しでも読んでくれた。

わざわざ私の前に現れて、感想を告げにきたんだろうか？

正直、不安だった。

ダメ出しとかされると、萎縮してしまいそうで。

初めての本だから、色々課題は残るんだけど…面と向かって指摘を受けるとやっぱりしんどい。

かなり緊張した。

マイナス面も言うてくだろうと、構えていた。

ところが、江堀さんは私の想像とは正反対の評価を述べてきた。

「面白い視点から書いているのがいいですね。ベタベタな恋愛感情が薄い、あっさりとした内容。私は好きですよ。」

恋愛…？私の作品は、恋愛小説になるのかなあ？

単純に、男の人と遊んだり食べに行ったりするお話をまとめただけなのに。

「恋愛の、つもりはないんですが…。」

「それが新鮮なんですよ。デートの感覚じゃなくても、デートをしている風に見えるのが、ね。」

新鮮…。

これは、私の作品を褒めてくれている？

世の中には、新しい何かを求める風潮がある。

物語を紡ぐ業界でも、新しい発想が求められている場面が多いそうだ。

江堀さんは話を続けた。

今度は本当に、依頼の内容だった。

「私は今の会社で、編集者を務めております。本を出版するサポートを行なっています。…是非、貴女の物語を本にさせていただけないでしょうか？」

「私の作品を？でも本は…。」

「少数の頒布ではなく、商用展開をしていきたいのです。すなわち、貴女の作品を全国に広めたいんです。」

全国…日本国内に…？

私の想像を遥かに超えるような話を、江堀さんがしてくる。

私、お茶会で一緒に参加した同じ大学の女性から促されて、ちょっと書いただけなのに…。

「いいんですか？私の作品は、学園祭で出した分しかありませんよ？」

「お気になさらず。これからどんどん出していけばいいのですよ。」

これから、出していく…。

「活動が続いているうちに、成功を収めた作家も多数おります。貴女は大学生。まだまだ若いんです。今決断すれば、可能性は高いですよ？」

江堀さんは自信ありげに告げた。

自信満々な勧誘は、逆に不審に思えてしまう。

大学の説明会でも、『甘い勧誘の裏には危険が詰まっている』と教わっているから。

出版の話に、乗っかっていいのだろうか？

だけど、ここで勧誘を断れば…私に『作家』としての道が、少しだけ閉ざされるのかもしれない。

就活の準備も進めているし、普通に会社勤めでもいい。

でも、初めての物語の制作は、楽しかった。

思いついたアイデアをつらつら書いているうちに小話が膨らんで、分厚い本が出来あがっちゃって。

サンプル用の本を手にした時は、思わず感動していた。

この情熱を、もう一度味わえとなれば…書いてみたい欲が出てきそう。

学生時代の思い出話として終わらせるには、惜しいと後悔してしまいそう。

そう考えてもいるけど、やっぱり不安で。

兄達は製作者なり教師なりを目指しているのに、私だけあやふやな夢を追いかけて…。

家族を、困らせないだろうか？

思い悩んでいる私の側に、婆ちゃんがコーヒーとカフェラテを運んできた。

ついでに、手作りお菓子まで用意してくれた。

婆ちゃんが言った。

「末衣子。昔からずっと、本が好きだったんでしょ？」

「うん…。」

「書き上げるまでのめり込んでいるんだったら、挑戦すればいいわよ。私達はね、貴女を縛りつけすぎたのかもね…。」

「そんな事ないよ？婆ちゃんは私の心配をしてくれているわ。私がおかしな子供で…。」

「十分、立派に成長したわよ？友達もできるようになったし。本の販売も商売だから、難しいかもしれない。でも、大丈夫よ。今の貴女ならきっと、心に残る本を出せるわ。価値はね、お金で決めるものじゃないのよ。」

婆ちゃんは私を、熱心に励ましてくれた。

喫茶店の仕事で大変そうにしている婆ちゃんが、私の後押しをしてくれる。

これはもう、1度は挑戦してみないと。

私は編集者の男性に、自分の意志を伝えた。

「是非、私の本の商用出版を、お願いします。」

★★★

商用出版への意志を固めた時から、数年後。

私は無事に大学を卒業した。

就職先も吟味していたが、最終的に江堀さんの紹介で網田出版社の社員となった。

創作活動をしながら仕事するといいいよと言われて。

一般的な業務だけは覚えて、空いた時間に創作活動を行った。

単純にノートを書いたり、ノートパソコンで文章を打つだけの作業ばかりだ。

こんな作業でも楽しいと感じられるのは、私が考えるのが好きだからだろう。

自然と、本の下稿が出来上がっていた。

読みやすくする為にパソコンのソフトで軽く体裁を整えて、紙にプリントアウトした原稿を江堀さん達に見せた。

私の文章を読むのは、江堀さんだけではなく、社内の勤めてる人達もそうだった。

原稿への感想は様々で、軽い批判の意見もあった。

江堀さんが絡んでいるせいか、社員の皆さんは柔らかに指摘するだけだったが。

修正に手を加えつつ、推敲も協力してもらいながら、商用出版の為の本が出来上がった。

私の本は市場に出た。初めのうちは本屋に並ぶ機会が少なく、ネット販売との兼用で展開していた。

電子書籍版も、社員さん達の協力で販売を実施していた。

活字の本は、売れにくい。

幅広いようで、実際はニッチな世界である。

私の名前も、私が出した本も全く知らない…という人がいて当然である。

自分自身も、そう構えていた。

静かに埋もれている期間は、比較的あまり長くなかった。

私の3冊目の出版にて、奇跡が起こった。

商用出版されている3冊目の本が、有名な賞にノミネートされたのだ。

最優秀賞・優秀賞・佳作賞の3つのカテゴリで、数多くの作品の中から選ばれるらしいんだけど…。

私の3冊目の本は、優秀賞に選ばれたのだ。

3冊目の本は、かなり直情的に描いた。

コンセプトは、『ワガママな自分を、男性が慰めてくれる』という、思考がズレているような感じの内容。

大学の学園祭で頒布した本よりも、狂った方向に飛躍していったと、自分でもわかっている。

『男性と一緒に』から外したくないから、3冊目はこれで突き進もうとしたんだと思う。

ビジネスが絡むので、江堀さん達会社の皆さんには申し訳ないけど…売れる売れないとかは考えないで書いてきた。

深く考えすぎると、筆が進まないから。

自分自身の秘めた内を、ゴリゴリに書ききった。

没覚悟で社員さん達に読ませたけど、その内容で本を作る企画へと発展した。

共感できないだろうと思っていたのに。

女性の社員さん達から、「泣きました」とコメントが舞い込んできた。

是非とも読ませたい、と会社の皆が一丸となって、本が仕上がった。

強い願いが、優秀賞という形になって、返ってきた…。

有名な賞だから、表彰式並のトークイベントが開催された。

最優秀賞と優秀賞3作に選ばれた作家4名が、イベントのメインとされた。

客席の前列にはテレビや新聞などのメディアの取材班が並び、後方に一般の書店のお客さんが見守っていた。

大型書店のイベントブースで行われているから。

お客さんが集まっている衆の中に、2人の兄達と桃枝が駆けつけていた。

桃枝が笑顔で手を振っていてくれる。

私はそれに、ニコリと笑って返した。

トークイベントは、受賞者1人1人のコメントを述べて、取材班の質問に答える形式だった。

順番は、最優秀賞の人から始めて、優秀賞の人達へと続く。

私は、1番最後に出番となった。

他の受賞者である3人のプログラムは、順調に進んでいた。

皆さん、ハキハキとコメントと述べ、質問を返していた。

カメラのフラッシュが小刻みに点滅を繰り返している、眩しい光景。

…正直、内で静かに過ごしているのが好きな私にとって、活発なイベントは苦手だった。

大勢の知らない人達の前で、自ら言葉を口に出せるのか、怖くなっていた。

足のつま先を前に、出せなかった。

もうすぐ、司会者が私の名前を呼ぶのに…。

私の心臓が、緊張でバクバクしていた。

波打つ鼓動が、伝わってくる。

歩き出せないまま、ここで膝から崩れ落ちてしまうんじゃないか…？

悲観的に思考するようになっていた、時だった。

私の背中に、綿みたいになんわりと触れてくる感覚がした。

触った人と顔を合わせる為に、私は後ろを振り向いた。

しかし、後ろには誰もいなかった。

カーテンの布等で仕切られた控え部屋の空間が、目に映るだけ。

人物の姿など、どこにもなかった。

でも、私は…信じている。

実際に『誰か』が。

もしかしたら私の想像した男性達が、背中を後押ししてくれている。

『お前に行ける。前へ進め。』

こういう言葉で、私を勇気づけてくれる。

絶対に、行かなきゃ。

私は今、生きている。

これからも立派な人間として、地球人として、生きていく。

トークイベントの場は、私にとっての、自力で歩く人生のスタート地点だ。

想像上の男性達、産まれてから出版にまで携わってくれた人達の応援があって、ここまで来たんだ。

私は、歩んでいかなければならない。

どんな結末が、自分に降り掛かろうとしても。

司会者に私の出番が告知され、私はトークイベント用の席に座った。

運んできて下さった自分の本を持ち上げて、表紙を取材班とお客さん達に見せた。笑顔ももちろん作って。

司会者からコメントをお願いされた。

私は真正面に顔を向けて、はっきりと述べた。

「私は産まれてからずっと、他人に迷惑をかけて生きてきました。

嫌われる経験の方が、多かったです。

でも…こんな私でも優しく、正しい方向へと導いてくれる人がいてくれました。

今回、この本に出てくる男性達は、そんな人達をモデルにして書いています。」

嘘は、ついているだろう。

最初は直情的に書いたつもりでいたんだし。

でも、後押ししているのを感じ取ったのは事実だ。

根拠は全くないのに。

取材班からの質問が始まった。

質問、というよりも同情が近かった。

「苦労、したんですね…？」

「苦労ですか？そうですね…してるんじゃないかなあ、とは思ったり、思わなかったりですね。」

「どういう、意味でしょうか？」

「嫌われやすい人間で、他人と接するのが苦痛でした。でも、こんな私を支えてくれる、助けてくれる家族や仲間がいました。だから、苦労していたとしても、辛さを感じなかったと思います。」

「遅しい、ですね…。」

「そこまで強くは、ないですよ？」

「尊敬しますよ。世の中には立ち直れず、内に籠る人達もたくさんいます。白井さんは籠らないで、『ワガママ』を言いつつも、懸命に生きているのではありませんか？」

取材班の言葉に、私は感嘆を受けた。

扱いづらい私を理解してくれる人間が、まだまだいたという発見に。

「白井さんの御本の最後、主人公がマトモな人生を送ると決めた結末に、皆が感動しました。もちろん、私もその1人です。」

どストレートに、書き上げたのに。

共感してくれる人達が、たくさんいてくれたなんて…。

私は、1人じゃなかった。

小学校中学年に執拗ないじめを受けて、中学時代は1人ぼっちで過ごしていた。

高校で桃枝と出会い。

大学でお茶会に誘われて。

頒布した本を出版社の編集者に褒められて。

こんな根暗な性格の私でも、手を差し伸べてくれる人間はたくさんいた。

今から私は、家族や仲間への恩返しをするつもりだ。

別の取材班の人間から、新たな質問が飛び込んできた。

「白井さん。これから作家活動が続けていくおつもりですが、抱負はありますか？」

ある意味、イベントの最後に飾るには、お決まりの質問だろう。

私はもう、恐れずに、答えを述べた。

「ありったけの言葉で、どんどん書いていこうと思います。
誰かと育める、新しい未来を築いていくために。」

最後はこれで、締めくくった。

受賞者全員の出演が終わり、最後は並んでの記念撮影で、トークイベントは幕を下ろした。

途中で駆けつけた江堀さんも加わり、帰りに5人で外食した。

江堀さんが予約していた、高級レストランで。

フルコースを堪能して、私達はそのまま家に帰った。

明日から、何気ない日常がまた始まる。

この日のトークイベントだって、私の人生を形成する中での、ほんの一部に過ぎないだろう。

でも、小さな欠片は集められると、巨大な宝物へと変わる。

自らが積み重ねてきた創造の宝物は、自分オンリーの貴重品だ。

だから私は、ありふれた日常で起きた出来事を、1つ1つ思い出として、残しておく。

想像上の男性と一緒に戯れた女性の物語集のように。

☆あとがき☆

…何とも言えないような話で終わらせてしまってますね…。

結構、本編に登場していないキャラが沢山いますよ。

途中退場してしまった人はしょうがないんですが。

本編の期間が短いから、バタバタと物語が駆け足気味で、他の背景が描ききれ
てないですよ…。

元々は短編を書く予定はなかったのですが、ページの余白ができたから埋め
合わせしようとしたら、こんなに長くなってしまったんですね。

急な企画で、ゴリゴリと書いてしまいました。

既存の作品の影響も、多少ありますし。

『ミコロボ』シリーズの更新、『note』のまとめ記事以外は中断しております。

『虚構のアイランド』も書いていかなきゃいけないですしね。

色々片付けて、キリのいい所で何か新しいのあればいいんですけどね。

家の用事もこなしながら。

以上、カレーポークでした。

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

また、別の作品でお会いしましょう。

☆『ミコロバ』シリーズ一覧☆

○《共闘》ルート ※表記がない分です。

[1・正夢の日]、[2・復讐の日]、[3・糾弾の日]、
[4・暴挙の日]、[5・酔狂の日]

[6・暴露の日]、[7・告白の日]、[8・業火の日]、
[9・協議の日]、[10・誓約の日]

[11・包囲の日]、[12・潜入の日]、[13・奪還の日]、
[14・忘却の日]、[エピローグ・再出発の日]

公園で出会った《武人兄ちゃん》と一緒に、[宇宙犯罪者]のHRや《武人兄ちゃん》の『育ての親』であるクーランに挑むルートです。

《武人兄ちゃん》の過去や、未衣子の兄である和希・勇希の話も含んでいます。

☆『ミコロボ』シリーズ一覧☆

○《反転》ルート

*前巻

[1・捕囚の日]、[2・更改の日]、[3・降下の日]、
[4・翻弄の日]、[5・遭遇の日]、[6・招待の日]
[7・供述の日]、[8・力説の日]、[9・立証の日]、
[10・切替の日]

*後巻

[11・入城の日]、[12・破滅の日]
[13・集結の日]、[14・解放の日]、[15・譲渡の日]、
[16・対峙の日]、[17・絶縁の日]、[エピローグ・再認識の日]

《武人兄ちゃん》と袂を分つルートになります。

《武人兄ちゃん》の代わりに、《マルロ》が味方になります（言い切った）。
未衣子のトラウマ話も出てきます。『7』だけは人を選びそうな内容なので注意書きがあります。

※先に《共闘》ルートの『1』『2』を読む事をおすすめします。

☆『ミコロボ』シリーズ一覧☆

○短編

『1・調査の日』、『2・奮起の日』、『3・観察の日』、
『4・報告の日』、『5・改名の日』、『6・方言の日』、
『7・説明の日』、『8・救助の日』、『9・同居の日』、
『10・触発の日』

『11・試練の日』、『12・慰留の日』、『13・挑戦の日』、
『14・動悸の日』、『15・天翔の日』、『16・逃走の日』、
『17・伝道の日』、『18・自責の日』、『19・欲望の日』、
『20・成長の日』

8割方、1本で完結するタイプの短編です。

『8』～『9』（白井3兄妹の両親編）、『11』～『15』（華南編）のみ続き物となっております。

大体、本編の補完的な内容になっています。

おくづけ

作者 カレーポーク

メアド ton1200tekisuki★gmail.com

(★→@に変えてください。)

個人サイト『お肉のうまい定食屋』

(URL : <https://plus.fm-p.jp/u/meat5rice>)

note ID→curry_pork

pixiv users→87815976

(pixivのURLの後ろに入れるか、『カレーポーク』でユーザー検索してください。)

発行日 2014年11月21日

制作先 製本直送.com様